
命題と恋愛

高居望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命題と恋愛

【著者】

Z3596V

【作者名】

高居望

【あらすじ】

僕には彼女がいる。かわいいけどちょっと変わっている彼女がいる。そんな彼女と僕の約束。週に一つ”命題”について語り合うこと。命題を通して恋愛はどのように進んでいくのか。これはそんなお話を。

「自分の存在している上での責任についてどうおもうかしら？」

・・・自分の存在している上での責任。

唐突にして意味不明な出だしにあっけにとられた方、読む気をなくした方、憤りを覚えた方、そんな簡単なこと聞くなよと思つた天才肌の方、他にも十人十色、さまざま印象を持った方がいることだろ？

言いたいことはわかる。僕もそちら側の立場だったなら同様のことと思つかのしれない。いや、絶対思う！

それでも、それを承知の上で頼みたいことがある。

僕の話を少し話を聞いてほしい。判断は、それを聞いてからでも遅くはないだろ？

それではこの物語の語り部、この僕、十坂春から事のいきさつを説明しよ？

現在、僕は彼女の家の彼女の部屋に彼女と一緒にいる。ありていに言えば、自宅データ中だ。

彼女というのは、『間渦幻』、彼女についても少し語つてみよう。

背丈は女性の平均か、それより少し上ぐらいの160ほど。腰に届くか届かないかほどの流れるような黒いストレートの髪。目つきが少々悪いことを除けば誰といっても見劣りしないような美貌。思わずテレビの中の人かと思うほどのスタイル。

これが間渦幻の外見だ。彼女の内面については、ここにあえて説明しなくとも、すぐにわかるだろ？

何？問題はそんなことじゃないって？確かにそうだ、冒頭で皆々様がさまざまな感情を抱いた原因は、幻の人物像がつかめなかつたからではない。

おそらく、といつか明らかだが、その原因は彼女の台詞、彼女の

発言にあるだろつ。

”彼氏彼女”の会話としてはあまりに似合わない、あまりに幸せボケしていない、そんな会話に驚かれたと見受けれる。

大丈夫、最初は驚くかもしれないけどすぐになれるさ、なんて何の解決にもなつていなかつた彼女は、公園でたそがれていた僕に、

何故僕たちがこんな哲学のような会話をしているのかと言ひと、それには詳しいわけがある。ここまで読み続けたその我慢強さを評して、敬語で説明しよう。

遡ること一ヶ月の夏休み。幻との出会いと、今の始まりについて。まだ知り合つていなかつた彼女は、公園でたそがれていた僕に、「あなたの生きている理由つて何?」なんてトンデモな事を聞いてきたのです。

突然のことに驚いてしどろもどろになつたのです。主人公補正は、どうやらかからなかつたみたいです。

そして、なぜか彼女はそんな僕を気に入つたらしく、僕の発言の言葉尻をとらえて脅迫まがいのことをしたのです。これについては、僕の責任といえばそれまでですけど。

僕は警察のお世話にならないように必死に交渉したのです。そして、今の関係になつたのです。

そういうことなのです。敬語だと話しくいので、前言撤回、そろそろ普通に戻させていただこう。わなながら我慢弱いな。まあ、そういうことで、彼女が僕に三つの条件を出すことで事なきを得た。その三つの条件とは、

- 1、週に一度何かしらの命題についての討論
 - 2、学校へ一緒に登下校すること
 - 3、上の2つを高校卒業まで守ること
- この出来事がきっかけで彼女と僕は付き合つことになつた。

ここまで聞けばもうお分かりだと思つけど、冒頭のあれは今日の

命題なのだ。そして僕たちはそれについて語り合いつとこなのだ！

ペアルックで。

・・・ペアルックな理由は、彼女が三十分前のことでもうれしそうな顔で、「服を買ってきたわ。よかつたら着て」といつて差し出してきたペアルックを断れずに受け取ってしまった、この僕の愚かさ無力さにある。

まあ、そんなに悪い気はしないけど。

最後に討論のルールについて。

僕たちは、一方が問題提起と追加質問、もう一方が答える側、という春の幻ルール（幻命名）を用いている。ちなみに今週は僕が答える側。

そろそろ皆様も状況できただろうから（あれ、ここまでたどり着いた人数が数えるほどもいない気が・・・）、本題に移ろう。

「己の存在に対する責任か。僕は自己の存在が様々な犠牲の上に成り立つていると考へている。身近なところで言えば家族関係。やむをえない場合はもちろん除くとして、自分の存在が家族に迷惑をかけているといえる状況は割とあるだろう。普通は、”家族なんだから”ってことで許されてしまふけど、負担があることは確かだろう。大きなところでは、ものの消費。全体から見ればとても微量だけど、僕は間違えなく、資源を消費している。どんな視点から見ても、それは避けようのない事実だろう」

「それは確かにそうね。その考え方でいくと、あなたは責任を果たすために死ななければならぬって結論に至るわけ？」

「いやいや、違うよ。何で僕を殺したがるんだ？」

自分の死が話の落ちつて・・・洒落にならないな。

でも、自分が迷惑をかけていることを認識しながらも、それに気づかないふりをして、目をつぶつて生きている。間違ったことをしてはいけないと言つているそばから、間違つたことをしているよう

しかもその矛盾に気がついても、僕は生き続けるといつ矛盾。ひねくれたものの見方かな？

「ここまでは僕の存在するデメリット。ここからはメリットについて語つてみよう」

僕は「マジではないので、自虐で終わり、といったつまらないことはしない。この話にはもちろん続きがある。

「僕は何かを消費していると同時に何かを生産してもいるんだ。何かを犠牲にしていると同時に、いい意味で誰かの犠牲になっているんだ。消費をマイナス、生産をプラスって考えて、その帳尻で最終的にプラスへもつていくこと、それが可能な人にとっては、存在している上での義務だと思う」

ひどく乾いた理論が出来上がった。

「あなたが今まで語つてくれたのは、社会に対する義務よね。なるほど確かにいい心がけだと思うわ。人間をプラスマイナスで判断するのは、いささかドライな気もするけれど」

ドライか・・・きっとドライなのだろう。

僕のこの意見は、人を人として見ていない。道具、歯車、無機物、なんと例えてもいいが、僕は人を人として見ていない。

「まあ、そんなあなただからこそ、あの時声をかけたのだけれど」

「なんか、全く喜べない選別だな」

なんて網にかかつてしまつたんだろう。

「で、そのほかはないの？」

彼女の抽象的な問いの意図がいまいちつかめないままに、僕の発言ターンになる。

「ほかには・・・どうだろう。とりあえず基本的にはもらつたらその分ちゃんと返す、もらいつぱなしにしない、つてのが普通に生きていいくうえでの義務だと思うけど」

「じゃあ、これにはどう返してくれるのかしら」

彼女はそう言つと、おもむろに立ち上がり僕のほうへ飛び込んできた。文字通り飛び込んできた。

「うわっ」

突然の光景に驚く僕。そして衝突。当たり前だが高校生の女の子とはいって、人が飛び込んでくるのを受け止めるのには相当なパワーが必要だ。

当然僕にそんなスーパーパワーがあるはずもなく、彼女ともども後ろに倒れる。

ただ、彼女が怪我をしないように、僕も怪我をしないように、それくらいのことはできた。

「愛もただもらつてるだけじゃなくて相手にも伝えなくちゃね。あなたのポリシーによれば

「・・・そうだね」

僕は抱擁のお返しに、頬にキスをした。

もううだけじゃなくきちんと返す。それは恋愛における鉄則なのかもしねれない。

ある考えがほかの問題にも通用することもある。今回はそんな、言われば当たり前だと思つこともわかつた。

『自ら気づいた事実の自覚』と『外から教わった事実の理解』の違い。これはまた今度の命題だな。

影の登場、命題の理由

「命題だって？ 面白いことやつてるんじゃない。いまどきの彼氏彼女が集まつてやることじやかないけど、それは面白いね。おや失礼、自己紹介がまだだつたね、ぼくは間渕影、幻の兄だよ。もつとも幻には僕のほかに四人の姉がいるから、一人つ子つてわけではないよ。君のことはもう知つているから自己紹介はいいよ、春くん。君は今、幻と付き合つているそうだね。いやいや、勘違いしないでくれ、ぼくは何も反対しようつてわけじやない。むしろ応援してあげたいぐらいだよ。それにしても命題ね・・・こんな時期から命題に触れているとは、幻は本気で君のことが好きなようだね。君と幻が結ばれるには命題は不可欠だからね。ははっ、といつても今はまだわからぬだろ。まあ こうことは幻に聞いたほうがいいだろうから、ぼくは余計な口出しあはやめておこう。じつこうことは当人同士でやるのが一番だからね」

始まり早々に長々と語つていらつしやるのは本人の言つとおり、幻のお兄さんの影さんだ。

僕と幻が彼女の部屋で遊んでいたら、急に部屋に入ってきた。

ちなみに遊びといつのはテレビゲーム。幻は実はゲーム漫画アニメのオールラウンダーだつたのだ（これは本当に驚いた）。

僕はあまりゲームをするほうではないので、さつきから幻に助けられている形だった。

・・・話が脱線してしまつたので無理やり元に戻そ。

この部屋には今、僕と彼女と彼女の兄がいる。ゲームはゲームオーバーの画面になつていて、幻は僕のひざの上に座つていて。

・・・これが修羅場つてやつか。この言い訳のできない状況、このからだつ挽回すればよいのだろうか。

なんて考えてくると影さんが口を開く。どんな叱咤が出てくるのだろう。

「幻、今日はあくまで挨拶にきただけだから落ち着きなさい。ぼくも自分の妹が付き合っている男に興味がないほどに、無関心な兄ではないからね。今日は春君がどんな子なのか見に来ただけだから。それももうすんだことだし、邪魔者は立ち去ることにするよ。ぼくはこれから出かけるから。それじゃあ中睦まじにお一人さん、『きげんよ』」

そう言つと、影さんは去つていった。

本当に去つていった。

・・・僕たちの格好に一切触れてこなかつたな。放置されるのもそれはそれで氣まずいのだけど。

部屋に静寂が訪れる・・・なんてことはなく、幻が僕に座つたまま語りだす。

「ついに影兄さんに見つかってしまったわね。まだ兄弟との遭遇はさけたかったのに・・・。でも見つかってしまったからにはしようがないわね。いいわ、あなたに隠していた真実を、今ここで打ち明けましよう。まさかこんな序盤で明かされるなんて、思つても見なかつたけど。実を言つと、私の家は芸術一家といふのかなんと言つのか、とにかく芸術を好いているのよ。まあここまではちょっと珍しい一家といふことぐらいですむのだけれど、問題はここから。家族ルールで、恋人ができるなら家族全員からの命題に答えること、というのがあるのよ。お父さんが哲学好きでその影響なんだけれど。そして家族全員の命題に答えること、これが結婚の条件でもあるわ。つまりはそういうことよ。」

突然の急展開についていけない僕。

そんなことにはお構いなしに、幻が再び話を始める。

「勘違いしないでね、何もあなたに暗に結婚しなさいと言つているわけではないのよ。これはもしもそういうことになつたら、という

時に少しでも力になるようにやつていてることなのだから、「

彼女の”勘違いしないでね”には真に残念なことに、シンデレの要素が完全に欠落していた

。これは支柱のない家、イヤのない自転車、主人公のいないドア、そういう類のものだつた。

惜しい！ 素直にそう思った。いや、本当に。

そういうえば冒頭でお兄さんも”勘違いしないで”って言つてた様な・・・はやつているのだろうか。

しかしこの場合、そんな瑣末なことはどうでもいい。

問題なのは命題に隠されていた理由。まさかそんな重大なことが隠されていたとは。

さつきは混乱してしまつた僕だが、実際幻とのことを考えてみると、このまま付き合つて結婚まで行きたい、と思つていないことはなかつた。むしろ口にこそ出さなかつたが、そのことは考えていた。その条件が命題つてわけか。なるほどなるほど。

命題といつて、なんだかんだ言つてもやはり不自然なものに答えが「えられて、頭がすつきりした。

やつぱりなんて言つても変だつたもん！
すつきりしたついでに少し幻をいじつてみる僕。

「なるほどね、話は大体分かつたよ。つまり君は僕と結婚したいから、」こうして毎週命題について語り合つてているというわけだね「な、何を言つているの、勘違いしないでつて言つたでしよう。別にあなたと結婚したいつてわけじやないんだからね！」

おおつ、ツンデレ度が少し含まれていた。

ツンデレつてたな！

「まあ冗談はさておき、そういうことならもつと命題に励まなくちやね」

「・・それはどういう意味かしら」

「おいおい、最後まで言わす氣かい？ 命題の理由を考えてみれば

明らかだろ。つまりは、そういうことか

かつ、このいい台詞で占めてみる僕。

今日は珍しいことに僕が主導権を握れたな。これはたぶん、影さんのおかげだろ。ありがとう、影さん。

会話をリードできて少し機嫌のいい僕、僕の言つた言葉の意味に気づいて少し頬を染めている幻。

結婚という途方もなく遠い位置ではあるが、確実に存在するそれを意識して、僕たちはそこに向かって一步、歩き出した。

「今日は僕が出題の日だったね。それじゃあ早速、今日の命題は『幻の兄、影さんと対面してから二日後、今日は命題の日だ。場所は相変わらず幻の部屋。』

「名前にはどのような意味があるのか”。名前って生き物にはもちろん、無生物につけることもあるだろう。それってどういう意味があるんだと思う?」

命題については事前にメールで知らせるのがルールなのでここで話がとまってしまうことはまずない。彼女もすでに考えてきた持論を発表する。

「名前を付ける、名付けるね。まず名前をつけることで生まれるのは、他との差異。無数にいる同種のなかで他との違い、大勢の仲間の中で個性を作るため。別に名前だけが個性というわけではないけど、名前が個人の特徴のなかで決して小さくないのは確かだわ。よく店とかで、自分と同じ苗字もしくは同じ名前が呼ばれたりすると、思わずドキッとすることってない? あのドキッが名前がアイデントイティの中の大きなひとつであることの証拠といえるわ。子供に珍しい名前をつけるというのも具体例のひとつね。あれも名前が個人の大きな要因であることが真だからこそのことでしょう。もつとも、私はそういう奇をてらったようなものはあまり好みじゃないのだけど」

さすがは幻。言われてみればそうだけど、実際に考えたことがない、もしくは考えたことを忘れててしまっている、そんなところを拾つてくるとは。やつぱり「いつこのりがスゴイと思わせるところなのだろうか。

「名は体を表すつじとか。じゃあ無生物については?」

「無生物へのネーミング、それもやはり他との差異というのが大きいと思うわね。名前を付けると愛着がわく、まったく同じものは実

際はたくさんあるけど、自分が名付けたこれはこれだけ。でも生物の場合と違った点もあるにはあるわ。生物に名前を付けるのはあくまでその生物のためでしょ。でも物に名前を付けるのは、そのものを所有する自分のため。物のためではなく者のためってね。ふふ、面白い冗談だわ。」

自分の言ったジョークに笑う幻。でもいまのが面白かったかどうかはかなり微妙だ。

「ん、何？ あなたも笑つたら？ 別に今笑つても私を蔑んでいるなんて勘違いしないから安心して。さあ、笑つていいのよ」笑いフリ来た！！ これはどうすればいいのだろう。

僕は何とか笑おうとして見せる。たぶん、いや間違えなく引きつていただろ。」

「もしかして……春君、今の面白くなかった？ そんな……ヒドイ……」

急に悲しい表情になる彼女。え？ いや、そうこうつむりだつたんじやないのに……

「この窮地を切り抜ける手段は一つ、それは……」「そんなに落ち込むなよ。さっきのジョーク、結構よかつたじょ、クツクツク」「……」「……」「……」「……え、いいじょ、クツクツク……」「……」「……すみませんでした……」

「あれ？ やらかした？ この場を收めようとしたつもりが、クーラー要らずのクールな部屋を作ってしまった。なんかいろいろ終わつたけど、命題についてはもう終わつていた

だろつ。女は個性、それに気附かねー！

「・・ふふっ」

アレ！？ わつかのがいまさらになってきた？ といふか駄洒落

好き？

彼女の一面がさらには見れた、そつねえれば凍える大火傷をした甲斐
があつたつてもんだね！

2 (後書き)

こんにちわ。

もうお分かりだと思いますが命題に取り組む話では数字、それ以外では話の題名がサブタイトルになつております。

すでにラストまでの流れは決めてあるので、一日一話投稿できると思います。

稚拙な文ですが、どうぞお付き合いください

初めての外デート、場所はもちろん

今日はデートだ。僕と幻の初デート。

一人で会うときは必ず幻の部屋という、インドア派な印象を取り払つてみました。・・・いや、実際はインドア派だけど。僕は読書派だし、幻もゲームとかやるし。・・・本当はアウトドア派だった的な発言をしてすみませんでした！

よし、謝罪はこれくらいでいいだろ？。今僕たちがいるのは、デートの定番（なのか？）、遊園地だ。今日は十月十五日、平日だからに学校をサボったわけではない。というのは、学校の設立記念日なのだ。平日ということはつまり、今日の遊園地はかなり空いている。乗り物に乗り放題だ。普段なら下手をすると何時間も待たなければいけないような乗り物に、五六分待てば乗れるというのはとても気持ちがいい。

一応言つておくけど、今日は命題の日もある。今日の命題は”読書をする意味”だ。僕はもちろん、彼女も本を読むので、この命題はなかなか面白い。今日は僕が答える番なので、帰りの電車でも答えるか。とりあえず今はデートを楽しもう。

「次はアレに乗りましょう、春君」

幻が結構怖めなジェットコースターを指差す（彼女は意外と絶叫物好きだった）。

今日の幻の格好は、動きやすそうなジーンズにランニングシャツ、上は白いカーテイガントを羽織つている。対する僕はジーンズに運動靴、上はジャケットという幻と似たり寄つたりの格好だけど、なんていうか・・・幻のほうが数段目だつて見える。くそ、これが美人補正か・・・神様め、なんて非道なことを。

「何をぼおつとしているの、もしかして・・・怖い？」

「な、何だとー！ 僕がジェットコースター如きに怖がつてているだと。面白いことを言つじやないか。だつたら勝負だ。これから僕と

幻が順番に乗り物を選んでいってそれに乗る、そして先に根を上げたほうの負けだ」

幻の馬鹿にしたような言葉に僕は対抗する。大丈夫、女の子なら誰もが恐れるアレが、ここにある。しかもうわさによるとこの遊園地のそれは、全国で一一を争つ怖さだそうだ。この勝負勝つたな！「ふつ、面白い提案ね。なら、勝負をより面白くするために罰ゲームを設けましょ。罰ゲームは、そうね、勝ったほうが負けたほうに三つ命令できるとおこうのはどうかしら？」

「三つ！？」

ランプの魔人かよ！ しかし確実に勝てるカードを持つ僕としてはここに引き下がる理由はないな。

「いいだろ。受けてたとう」

こうして僕たちの戦いは始まった。

一時間経過。現在僕たちは食べものを食べられる休憩コーナーにいる。ちなみにまだ決着はついていない。

これまでに僕たちが乗った乗り物は、ジェットコースター×三だ。やはり、怖いものというとジェットコースターになってしまふのだろう。僕はそういう系に特に抵抗はないが、こうも連續で乗り続けると、さすがに気持ち悪くなつてくるな。

いいだろ、そろそろ切り札を使うか。時間もプラン通りだ。

「もう暗くなつてきたし、次がラストとだな。僕のとつておきを見せてやる」

別に自分がつくったわけではないけど、少し自慢げに言つてみると

「いいでしょ、それでそのとつておきとは？」

「それはついてからのお楽しみだ」

まだここでは僕の狙いは内緒にしておく。自分の田で直接見たほうが驚きも倍増するつもんどう。

それから、僕たちは目的地にたどり着いた。そこはそう、お化け屋敷だ。

”黒き洞窟” というのがそこの名称だが、これは・・話で聞いて

いた以上の雰囲気だ。怖がりの人ならまず入ろうと思わないな。

僕は幻の反応を確かめようと横を見る。そこには、震えて青ざめている少女がいた。え・・・もしかして怖がりさんなの？

「あの、今ここで負けを認めるなら、入らなくともいいんだけど」

「何を言っているの？ 私が逃げる理由はないわ」

ああ、強がつちゃつてるな。これはもう、入るしかなさそうだ。空いてるだけあり、並んで五分ほどで僕たちの番が来た。彼女は依然として震えているが、逃げるという選択肢はないようだ。ここ、ゴールまで十分かかるらしいけど、何分で根を上げるかな。

僕はため息をつき、彼女とともにに入り口へと向かっていく。

初めての外デート、場所はどちらか（後書き）

ラストの方がミスで抜けてしまっていました。

現在は修正した形になつております。

修正前の状態を読んでくださった方、申し訳ありませんでした。

お化け屋敷から今出てきたところだ。現在、僕はすすり泣いている幻を背負つて遊園地の出口に向かつて歩いている。彼女はなんと、最初の仕掛けでギブアップした。そこからずっとおんぶ状態。お化けの人も氣を使って過度な怖がらせ方はしなかつたが、機械の仕掛けはそんな僕たちにもお構いなしに仕事をしてきた。ぜひ空氣を読める機械を作つてほしい、と切実に思った。

彼女は根を上げてから一度も喋つていない。僕もそんな彼女をいじることはせず、遊園地を出て、駅のホームについた。

「そろそろ落ち着いた？ あそこのベンチに座るうか

やはり駅にもそれほど人がいないので、僕たちは近くのベンチに腰掛けた。

「ありがとう」

素直に礼を言つ彼女。あれほど泣いたことだし、相当疲れたのだろう。

「ええ、もう大丈夫よ。今私をおびえさせているのは、春君に私への三つの命令でどんなことをされるのか、といつことだけだから。先に言つておくけど、あんまりエッチすぎるなのはダメよ。ちよつとなら、まあ、問題ないけど」

「そんなことするか！」

どんな誤解をされているんだ。これはあまりにもひどいんじゃないか。僕が今までそんな想像をさせるようなことをしてきたわけが・

・・いや、意外としてる？

「ふふつ、冗談よ。それより、そろそろ命題について話してもらいましょうか」

命題、なんかすっかり忘れていたが今日は僕が答える番だつたな。今日の命題は”読書をする意味”だ。

「読書をする意味か。これは前に話した”勉強をする意味”と似て

いるね。やつぱり僕の考えも前と同じ、自己形成のためだな。今回の命題のほうがより具体的だけど

”勉強する意味”は僕と幻が初めて語った命題だ。わずか一ヶ月半ほど前の話だけど、もうずいぶん前のことのように感じる。

「本を読むこと、それで得られることはいくつか思いつくけど。まずは言葉、ボキヤブラリー。ボキヤブラリーが多いってのは、話していく面白いといつににつながるし、選べる言葉が多いほうが、自分の思っていること、自分の内にある感情をより伝えられるよね。もちろん持っている言葉が多いことだけが、面白い会話の条件つてわけではないけど、決して小さな要因ではないはずだ」

僕ももう少しボキヤブラリーが多ければ、幻ともっと楽しい会話ができるのかな？

「もうひとつは思想、個性。個人的にはこっちのほうが言葉よりも重要だと思う。それに、これはこの前の”ほかとの差異”ってのも関係するね。評論はもちろん、小説でも作者のあらわしている主人公の考え方、主人公を通して伝わってくる作者の思想、そういうものがあるだろう。それが自分の思想の糧になるんじゃないかなって思う。僕自身もそういう経験があるし、幻だつてあるだろう？読書とは、それに含まれている思想、意見によつて自分の考え方、人間性に厚みを与えていく、そういうものの一つ、それが僕の考え方だ」

僕の考え方。これも考えてみると面白いな。

「僕の考え方ってのも、僕の読んだ本がその形成に大きく関わっているのだから、はたして本当に”僕の”と言つていいのかな？それにその本を書いた作者も、おそらく何かしらの本を読んでそこから何かを得ているだろうから、そうしてどんどんさかのぼつっていくと、どこに行き着くんだろう？古代人かな？」

「もしあなたの思想が、みんなの思想が、その人が読んだ本から感じたことから成り立つていてものだとしても、それを行つたのはあなた自身、その人自身じゃない。だつたらそれはその人のものだわ」

どうか、そう考えることもできるのか。何か、今回は僕が語つて彼女に何かを感じさせる役だつたのに、逆に彼女からまた教えられたな。幻の言葉、これも間違えなく僕の思想を深めてくれているのだろう。

「どこに行き着くのかというのは、どうなんでしょうね？」思想が
人間から人間へ伝わっていくものだとすると、はるか古代に生きて
いた人たちなのかもしれないわね。もしくは、神とか？ だとした
ら、ゴッドジョブね！」

ゴッドジョブ！・・・ グッドジョブ！か。最後に余計なことを言

「たゞ、」のヤクが僕の思想に反映されるのは避けたしな。・・・
「今日は」ここまでにおきましょうか。まだ降りる駅まで三十分

「ねむねむあるわね」

彼女はかなり眠そうだ。もともとインドア派なのに加えて、今日

ははしゃいだり泣いたりとずいぶん体力を使つたから、そろそろ限界だろうでも、たぶん彼女は自分からは寝ない。僕に気を使つて、このまま雑談でもしようとするだろう。だつたら僕にも考えがある。「ところで、僕は三つの命令の一つを使いたいんだけど、いいかな?

彼女は僕の唐突な質問に少し怪訝な顔をする。

相変わらずひどいことを言う幻。そんなに信用ないのかよ・・・

「それわもちろんわかっているよ。僕はいいで二つとも使おうと思へば

卷之三

これから僕のやることを自分で考えてみても、もったいないな
つて思う。

「一つは、僕はさつきから肩が寒いからそれを暖めてほしい。二つ目は暖め方の指定。そのままこっちに倒れてくるようにして。そう、そんな感じ。そして三つ目、そこで動かれると気になるから、寝ていてくれると助かる。降りる駅が着たら教えるから」「

三つの命令で僕は僕に寄りかかって寝る幻を完成させた。彼女はその意図がわかつたようだが、命令なら仕方ないわね、と言つてすやすやと眠つた。

楽しことくぬくしだった今日の外出。外に出かけるのもたまにはいいな、としみじみと想い僕も彼女のほうに寄りかかつた。

夕食会への招待状

今日、僕は幻の家で月に一回行われる夕食会に招待されている。
どうやら、影さんの仕業らしい。”夕食会”という言葉に、なんだ
か壁を感じる。やはり家が屋敷なだけあって、そういう催しがいろ
いろとあるのだろう。

ちなみに今日はおどぎの家族は全員いるとのことだ。幻と幻の両
親、それに影さんとまだ知らない余人のお姉さん。

それにしても、家族に挨拶とか半端じゃなく緊張する。彼女と付
き合っている以上、こんなイベントが発生することは想像できなく
もなかつたけど、それはあくまで想像。実際に起きるとやはり緊張
せずにはいられない。キヤナットヘルプ、ブライニングだな！

・・・失言だったかな？ まあいや、話を戻そう。

僕は今、幻の家の前にいる。現在時刻は午後一時。夕食にはまだ
だいぶ早い時間だが、この時間に呼ばれた。話によると、今回の夕
食会はいつもと違つて参加者は間淵一家と僕だけ、料理は幻のお姉
さんとお母さんの手作りだそうだ（幻は料理がからつきしきれない）
。こんな屋敷に住んでいるだけあって、普段はシェフに作つてもら
うつているらしいが、今回は僕の歓迎の気持ちを込めて手作り料理
を振舞つてくれるらしい。

なんて現状把握をしていると、間淵家の門が開いた。そして中か
ら三人の女性が出てきた。そして僕のほうに歩いてきた。

「こんにちは。あなたが春君ね。私は間淵凪、お母さんつてよんで
いいわよ」

凪さんの年はどう考へても四十近くあるはずだが、三十台、いや
二十台後半と言つても通用する見た目だ。背は幻よりも高い170
センチってところだろうか、雑誌に載つていそうな見事なプロポー
ションを持っている。彼女の表情はどこか、人を安心させるような
ところがあり、優しいお母さんという感じだ。

「へえ、君が春くんか～。思つてたより可愛いじゃん。あたしは長女の間渕光。^{ひがつ}こつちが四女の間渕白。^{まつる}よろしくな！」

今喋つてゐる光さんは幻や凪さんを凌駕するプロポーションと抜群の美貌の持ち主だ。髪は少し赤みがあり肩を超えるぐらいの長さで、ポニーテールにしている。口調が男っぽいかつこいい感じで、それと見た目とのギャップがまたいい。

彼女の後ろでもじもじしているのが白さんか。第一印象はお嬢様。背は150ちょっととの小さめで、ドレスのような服を着ている。髪は金髪のカールだ。おそらく恥ずかしがりやなのだろう。僕と目が合つたとたん真っ赤になつてしまつた。

「ま、白です。よろしくお願ひしますしゅ」

・・・沈黙が訪れた。いい間違えなのかわざとなのか分からないので、とりあえず黙つてみる。

すると、彼女は消え入りそうな声で「よろしく、お願ひします」といい直した。やっぱりいい間違えか。まあ本当は分かつていただ。

「えつと、よろしくお願ひします。三人でお出かけに行つてくれるんですか？」

「いえいえ、あなたも一緒に行くのよ

「そうそう、これから夕食の買出しに行くんだ。一緒に来てくれるだろ？」

夕食の買出し。そこからすでに手作りなのか。

「はい、そういうことなら。店までは歩いていくんですか？」

「いえ、車で行く予定だけど乗り物に酔つちゃう人かしら?」

「あ、いえ、大丈夫です」

会話をしていると家の方から車が走つてきた。僕はあまり車に詳しくないので車種は分からぬが、外車であることだけは確かだ。運転手の方は執事だろうか？

「よし、乗つた乗つた。母さんは助手席であたしたちが後ろな。後ろは狭いから白は春くんのひざの上だな」

「え？ ？」

僕と白さんがシンクロした。
いや、それはさすがに・・・

「あははは、冗談冗談。つめれば三人ぐらい座れるぜ。なんならあ

たしが春くんのひざ上に座つてもいいけど」

「もう、からかうのはよしなさい。大丈夫よ、十分に座れる広さだ
か。」
（氣になるなうもつ一当車を用意するナゾ）

「だ、大丈夫です！」

僕はあわててそう答える。よく見れば三列シートだし、もつ一台

車を用意するなんてそんな贅沢なことは、貧乏性の僕には考えられないことだった。

僕たちは車に乗り込む。

それじゃあ出発!」

光さんの掛け声とともに車が発進した。非常に特徴のあるメンバーをのせて。

そして一時間後。買い物を終えて再び家に帰ってきた。車の中は、そこが車の中と感じさせないような車の中だった。きっとものすごくいい車なのだろう。

「今日買ったものは重ねると危ないから三列目のシートに置こうか」という明らかないたずらによつて、帰り道はいすが二つで乗る人が三人、つまり本当に僕がひざを貸す羽目になりかけたが、トランクという救済によつて僕は無事に三列目に座れた。光さんのいたずら心、半端ないな。

ようやく光さんから解放された僕。車の荷物は家人（メイドだらうか）がやってくれるらしいので、僕たちは家に入った。

「アーティスト一覧」

彼女たちはこれから料理作りを開始するらしく、僕はそのまま幻の部屋に行くように言われた。ちなみに買い物には付き合つたが、何を作るつもりなのかまったく分からなかつた。幻の部屋へはもう何度も来ているので、案内なしでつくことができた。

僕はノックをした。

「幻♪、僕だけど、入るよ

そういうて入ると、中には三人いた。

一人はもちろん幻、あと二人は知らない女性だ。と言つても間違えなく彼女の姉だろう。

「あらもう着いたの。お疲れ様、じゃあ早速だけど参加してくれるかしら」

幻たちはゲームをしていたらしい。そして僕に参加を促した。いや、その前にそこの二人の姉さんを紹介してくれよ！ ほかの二人もそう思つたらしく、僕のほうを向いた。

「その前に自己紹介させてね！ わたし、間淵祭まつり、ヨロシクねっ！」

！

ハイテンションな彼女はスポーツでもやつていそうなさわやか系美少女。髪は茶色で、肩に届かないぐらいのさっぱりした髪型。彼女の例に漏れず見事な体形をしている。

「私は間淵鞠かづな。間淵家の三女よ。春君だっけ？ よろしくね」

もう一人は凛としているお姉さんって感じだ。見た目は幻に似ているけど、幻より背が高い。

これで僕は幻のお父さんを除く全員と顔を合わせたわけか。なんていふか・・キャラ強すぎ！ 家族のうち誰一人として”ノーマル”な人がいない、そんな印象の間淵一家であった。

ゲーム開始から一時間、夕食ができたので僕たちは幻の部屋を後にした。ゲームしていて分かつたことだが、三人ともゲームうますぎっ！明らかにやりなれている感じだつた。

僕たちは居間へ向かつた。今に入るのは初めてだが、これはなんというか、とても大きな円いテーブルがそこにはあつた。家族全員で食べるには明らかに不必要的大きさだ。一人ひとりに十二分なスペースが与えられている。

「おまたせ～」

凪さんが僕たちに座るように促す。椅子は十個。ちょうど一人一席に座るようになつていて、僕の右隣に幻が左隣に白さんが座つた。

「後いなのは、影兄貴と親父だけか。あたしが呼んでくるな！」

そういうて光さんは部屋を後にする。

今、テーブルには七人ついているが、誰も食事をとりにいこうとしない。おそらくメイドか執事が持つてきてくれるのだろう。なので僕も黙つて座つていていた。

一三分後、光さんと影さんとお父さんが居間に入ってきた。

「や、春君」

影さんは氣さくに声をかけてきた。今日は眼鏡をかけている。

「君が十坂春君だね。私は幻の父、間淵啓だ。今日は食事を楽しんでいきなさい」

「はい、よろしくお願ひします」

幻のお父さんは、紳士代表のような紳士だ。身長180という大柄にも関わらず、相手に威圧感を与えない、見た目で判断するべきでないといわれるかもしれないが、それでも一目でしつかりした大人なんだとわかる。

「さあさあ、そろそろ料理を持ってきてもらいましょ～うか」

凪さんがそういつと、奥の厨房から一度に十人もの人が料理を運

んできた。全員メイドだ。本当にいたのか、メイド……
僕の前に料理が次々と並んでいく。何かのコース料理なのだろう
が、手作りでコース料理つて、凪さんすごいな。

そんなことを考えていると、メイドの方に、「お飲み物はいかが
なさいますか?」と聞かれた。こいつは何か力タカナの名前
を言わなければいけないのかと思ったが、幻が普通にお茶を頼んで
いたので僕もそれに倣つた。

それから、招待客の務めであろう、料理についての賞賛を述べた。
「いや、それにしてもすごいですね。コース料理が作れるなんて、
凪さんは料理が得意なんですね」

「いいえ、料理を作ったのは主に白で、私と光は簡単なものを手伝
つただけよ」

そういうわけで、僕は隣の白さんを見る。彼女は恥ずかしそうに、
でも少しうれしそうに微笑んできた。

「そうなんですか。料理のできる女性って素敵ですね!」

そういうと間髪あけず、幻が僕の足を踏んだ(誰にも見えないよ
う)(元)。しまった、彼女は料理ができないのだった。

それを見ていなかつた白さんは、ありがとひ、とせらに赤くなつ
た。

「ははっ、春君、白のことをくじいてやんのー」

光さんが余計なことを言う。何でそんなことを……そんなつもり
じゃなかつたんだ!

ぼくは明らかに不機嫌になつた幻と、僕にほめられて少しうれし
そうな白さんに挟まれて食事を食べた。食事に手をつける前は幻を
起こさせたことを氣かかっていたけど、一口食べてみると、そのあ
まりのおいしさに僕は夢中で食事を食べた。

そして食事終了、僕はいくつかおかわりをさせてもらつた。全員
でじ馳走様の挨拶を終えるとすぐに、幻は僕を部屋に連れて行こう
とした。間瀬一家もそうしなさいといったので僕は挨拶をして今か
ら出ることにした。

「今日は食事に招待してくれてありがとうございました。とてもおいしい料理がたべてうれしいです」
僕は率直な感想を言った。

「満足してもらえてよかったです。食事会は月に一度あるから、君さえよければまた来なさい」

皆さんはそういうてくれた。

「ところで君はもう聞いたかな？ 命題について」

「あ・・はい」

命題について、この家では結婚の条件が家族全員の命題に答えることなのだ。

「そうか。命題については、私からいきなり聞くとこうことはしない。君がもし幻と結婚したいと思ったときは、君からそういうってくれれば私は命題を出そう。だから、そんなに緊張する必要はないよ。ああ、結婚相手については別に幻でなくともかまわないよ」

・・・・・

最後に余計なことを付け足したお父さん。この人も意外といたずら好きなのだろうか。みんなの視線がいっせいに白さんに向かう。

白さんも僕と目が合い、今にも倒れそうなほど真っ赤になった。

「ありがとうございますお父さん、そろそろ私と彼氏の春君は部屋に戻らうと思います」

幻は怒りを隠さうともせずにそう言つて、僕を引っ張つていく。
このあと僕と幻との間で出んな会話があつたかは、言つに及ばないだろう。

それから約一時間、幻から説教されて（おもに白さんのこと）僕は解放された。

最後に彼女は、少し不安そうな、そんな表情で僕に問いかけてきた。

「料理ができない人は嫌い？」

・・・ああ、のことをしていたのか。そんなの、答えは決まってるじゃないか。

「たしかに料理が上手なことは、魅力的なポイントだ。でも、それがすべてじゃない。そうだろう?」

間淵家^{まぶち}での夕食会の一皿後、今日は日曜日。僕は再び幻の部屋に来ている。

そう、今日はおなじみの命題の日だ。それなりの展開にも慣れただろう。

だが、今日はいつもとちょっと違う。具体的に云ふと、いつもより二人多い。

二人。それは間淵家の次女と四女、祭さんと白さんだ。祭さんが、僕が遊びに来たのを見つけて、たまたま家にいた白さんとこの部屋にきたわけだ。机を中心に円く座つて、向かい側に幻、右側と左側にそれぞれ、白さんと祭さんが位置している。ちなみに、三人ともかわいらしい部屋儀を着ている。

祭さんとか、どう見てもアウトドア派なのに、日曜日には家にいるんだな。そういうえば、先日のゲームもかなりの腕前だつたけど、まさかのインドアとアウトドアの両立派か？ そんなバカな……

「はるつちは今日も命題^{まつ}じつごするの？」

はるつちつて……今まで一度も言われたことがない、たとえ思いついても一般的な人ならばまず口にしないような、そんなファンシーな呼び名に少し当惑する。……ファンシーって使い方あつてるつけ？ あと、命題じつごして言つくな。

「そうです。私たちは今から命題じつごなので、『退室ください』幻、お姉さんたちにも容赦ないな。でも確かに、彼女たちがここにいても退屈なだけだらうからな。

「幻ちゃんはつれないなつ！ 邪魔なんてしないからいてもいいでしょ？ お姉さんたちはひまひまなんだから。お願ひ！ 絶対邪魔しないから、いたずらもしないし。ね、白ちゃんも話聞いてたいよねつ？」

「うん・・春さんと幻ちゃんがいいなら

相変わらずのかわいらしさの白やん。年下だつたら白ちゃんって呼びたいかわいさだ。

・・・いや、冗談だけど？

「僕は別にかまわないけど」

ここで出て行けと言つほど氣の強い人間では、僕はない。それは氣が強いといふか、ただひどいだけかもしれないけど。幻も「そこまで言うなら」と、無理に追い出そうとはしなかつた。きっと、普段から中のいい姉妹なのだろう。

「さて、今日は私が答える番ね。命題は”愛情と憎悪”だつたわね」
僕はうなずく。そう、今日は僕が出題者なのだ。

「愛情と憎悪、愛と憎しみ。これらは一本道の端と端のとても遠いところにあるように感じられる言葉ね。でも、だからといってこれらは一方から一方に移らない固まつているものというわけではない。むしろ簡単に入れ替わる、動きを持つたものなの」

「それはテレビポートみたいなものなのかなにや？」

白さんがかんだ。にやつて・・・ナイスだね！！

やはりというか当然というか、白さんは恥ずかしさのあまり、耳まで真つ赤になつた。ああ、これで年上なんて、世の中には不思議なこともあるんだなあ、としみじみと思つた。

「ええ、そう思つて構いません。身近な例で言つと、気になつていた人の悪い一面を見てしまつた時、また、気に入らなかつた人の思ひがけない一面を見た時、愛情と憎悪の入れ代わりが起るでしょう。これは”愛情と憎悪”というより”好きと嫌い”をあらわしているけれど、愛情と憎悪についても同様のことが言えるわよね」
「なるほどあるほど、つまりは、ギャップがミソつてわけだねっ！」

！」

相変わらずハイテンションな祭さん。でもまあ、結構的を射ているな。良くも悪くもギャップが鍵か。祭さんはこう見えても間淵家の一人であるだけあって、こういったことは得意なんだな。ちょっと見直した僕。・・・これもギャップか？

「そうですね。入れ替わり可能とはそういう意味です。ほかには、愛情と憎悪は大きな視点から見れば、”思つ”といつおなじ枠の中に含まれるといつところかしら。」これは別に”愛情と憎悪”に限らないことだけ。ちなみにこのときの対義語は”思わない”にあたる無関心ね。”愛情と憎悪”と言われて思いつくのはこれくらいかしら」

視点の切り替えか。一見対義語に見えるものも、大きくみれば同じカテゴリーに含まれているつてことか。

「なるほど～、幻ちゃんさすがだねつ！ 対義語が仲間に見える、この関係は、名付けて・・・う～ん、何だろう？」

名付けないのかよ！？ シュールなギャグをかましてくれた祭さん。ならば僕が代案を考るしかないな。名付けて、赤白語！・・・いや、赤と白はなんか対極っぽいし、”色”の種類に含まれるからってことなんだけど・・・ダメか。

「う～ん、思いつかないなあ。さすがに赤白語つてのはセンスないしな～」

・・・言わなくて正解だつたな。ほつとする僕。

「ground or sky」

白さんが唐突に代案を出してくれた。しかも・・・ウルトラかっこいい！！

「おお、それで決まりだね！」

祭さんも満足したようだ。白さんはネーミングセンスもあるのか。もうこんな時間だ。白、お腹すいちゃつたから夕飯作つて！！はるひちも食べるよねつ？」

時計を見ると、時刻は十一時半。ちょうど昼時だった。

「じゃあお言葉に甘えて。いいですか、白さん？」

「よ、よろこんで。それで、あの、メニューは何がいいですか？」

「じゃあ、パスタで」

「わ、わかりました。三十分ほどでできるので、それまでお待ちください」

それからちょうど三十分後、僕たちは白さんが料理してくれたパスタを食べた。
味はもちろん。

慣れることは続かない、でも

今日は特に幻^{おとぎ}との予定はない。命題の日でもないし、遊びに行く約束もしていない。つまりは僕の日常だ。・・・。つまらなさそうで悪かったな！ 高校生男子の日常が面白いほうがどうかしてるぜ！ なんて理にかなっていない失言をはいてみる。

土曜日で学校も休みの今日、時刻は午前五時（朝型なのだ）、僕はランニングに出かけようとしている。普段はランニングなどしない僕だが、機能の親の一言でランニングを決心させられた。あの、恐ろしい一言が現状の引き金となつたのだ。

昨日のこと、僕が居間に飲み物を飲みにきたところ、テレビを見ていた母親が僕を見てこう言つた。

「あれ、何かあんた前より丸くなつた？」

これは帰宅部の高校生男子に言つてはならない言葉だ。禁句だろうが！ しかしそういわれて僕は不安に駆られた。ちなみに僕は今まで太つたことがないし、現在も太っていないので、この種の変化にはそれほど敏感ではない。

体格の変化、それが勘違いであることを確かめるために、風呂上りに体重計に乗つてみた。

「まさか、そんなことがあるはずがない。テレビのモデルたちを見た直後に僕を見たからそう思つただけだろう、まったくはた迷惑な」しかし・・・測定結果は僕の不安を確かなものにした。なんと、前に計つたときより三キロ増えていたのだ。

三キロなんて些細なことを、と思うかもしれない。僕も他人の話だつたらそう言つだらう。しかし、僕は最近特に生活習慣を変えたわけではないのだ。特に不摂生な生活をしていたわけではない。つまり、このままだと少しずつでも確実に、体重は上昇の一途をたどることとなるのだ！

ここまで現実を見せつけられて、黙つて引き下がる僕ではない。

体重が増ええたなら、元に戻せばいい。太るのがいやなら、運動すればいい。

と言うわけでランニング。運動部には所属していないけど運動音痴つてわけではないので、途中でへばることはないだろう。いざ行かん！

十五分後、僕は今公園のベンチに座っている。幻と初めてあつた公園。

僕はここで感慨に浸つてているわけではない。へばってしまったのだ！今思えば、出かける前のあの言葉がフラグだったんだな。だとしたら、僕はやるべきことをやつたというわけだ。

・・・。これ以上行つても悲しいだけなので黙つて休もう。

僕がベンチに座つて何となく公園の散歩コースを眺めていると、そこに知つている人が見えた。

身長は165ほど、普段から運動をしているのが見てわかる、きれいな体形だが、同時に魅力的なプロポーションも持ち合わせている。髪は茶色で肩に届くぐらいの長さだが、今は動きやすいように後ろでひとつに結んでいる。彼女は僕に気づいていないようで、そのまま走つていこうとしている。僕は、止める必要はなかつたかもしれないが、声をかけてみる。

「祭さん」

僕の呼びかけに気づいた彼女は、そのままこちらのほうへ走つてくる。僕の正面まで走つてきて、さわやかな笑顔をみせる。

「おっはよ～、はるっち！ 朝からランニングかい？ 今まで走つての見かけたことないけど、いつも走つてるの？」

「いいえ、今日からです。でもそれも今日で終わりそうですが

「男のがそんなに弱気じゃダメだぞ！！」

祭さんは人差し指をたててウイーンクした。こうこう一拳一動がさわやかなんだよなあこの人は。

彼女は見た目はさわやかなまま、でも少し緊張した面持ちで僕の

ほうを向いた。

「ねえ、じゃあ、もしよかつたらなんだけど

彼女は少しもじもじしている。何だろ？、彼女らしくないな。

「はるひちせえよかつたら、その、これから一緒に走らない？」

「これから一緒に走る？」

「うん、あ、嫌ならいいんだけど・・・」

「いえ、僕もそろそろ走れますし、ゆっくりでお願いしますね」

「うんっ！ あ、いや、そうじゃなくて。今日も走るけど、これらもってことで・・・」

そういうことか。正直、願ってもないことだ。一人より誰かとやつたほうが長続きするだろ？。向こうから誘ってくれるなら断る理由はないかな。

「では、これからもよろしくお願ひします」

「本当っ！ よかつた。断られたらちよつとショックだつたよ～

ほつと胸をなでおろして、再び笑顔になる祭さん。

「じゃあ、今日から毎日、朝五時にここに集合だよっ！ それでいいよね？」

「え、毎日ですか？」

意外に多いな、彼女はきっと毎日走っているのだろう。でも僕は週に二三回で十分なんだけどな・・・

「そりだよっ！ こうこうのは毎日やらなことダメだし！ あ、でも、もしかしてだけ、わたしと毎日会つのは嫌？」

少しうるうるした目で上目遣いにそう聞いてくる。うーん、これを断つたら、さすがに人間失格だろ？。

「あまり速く走れませんけど、それでもよかつたら一緒に走させてください」

「うんっ！ ありがと！ 大事なのはスピードじゃなくて継続だし、でも毎日走つてればスタミナもスピードもくよ。だからそんな心配必要ないさ！」

「こと言つてくれるな。そういうわると、やる気もでてくる。

「よしつ、休憩終了。そろそろ走りつか！」

「はい！」

こうして、僕は祭さんと毎日ランニングすることになった。ん

？ これも何かのフラグ？

三十分後。場所は再びさつきの公園のベンチ。

前回はこれで終わり！ つて雰囲気な締め方だつたけど、実はまだ続いているのだ。

ベンチにいるのは、ばててベンチに座り込んでいる僕と、まだまだ走れる感じの祭さん。

こんなにも体力に差があつたのか・・・運動しているとはいえ相手は女性だなんて考えていた自分が恥ずかしい。

「あはは、初日にしてはすごいよつ！ これならすぐに、もつと走れるようになるつて！」

気を使つてくれているのかもしれないけど、そんな雰囲気を一切出さない祭さん。さすがさわやか系美少女と呼ばれることだけはあるな！ まあ僕しか呼んでないけど。

「運動後は水分補給が大切だよつ！ 白ちゃん特製のスポーツドリンク、はるつちにもわけてあげるよ！」

彼女は背負つていたナップサックから水筒を僕に手渡す。でもこれつて、さつきまで祭さんが飲んでたやつじや・・・

「ん？ どうしたの？ もしかして水がいい？ だつたらちょっと待つてて、自販で買つてくるから」

「え、いや、大丈夫です！ いただきます」

そのまま走つていこうとする彼女を止める。さすがにそんなことをさせるわけには行かない。

僕は改めて水筒を見る。こうじうのつて、意識しなければなんてことないし、そんなこと考えていると思われるのも気まずいし。僕は何も気にしていない風を装つてスポーツドリンクを飲む。

「わあ、これつてもしかして、間接チューだね！！」

「ブツ！ 口の中身を吹き出してしまつた。

「わわ、大丈夫！？ ごめんね、冗談だよ冗談。まさか、そんなに

反応するとは思わなかつたよ~」

僕の反応を予想外だと言つ彼女。いや・・・想定の範囲に入れておいてほしかつた。

「明日から、はるつちの分も作つてきてもらひながら。それで許して、ね?」

許すというほど怒つてもないけど、ちょっと仕返しといつか、いたずらがしたくなつてきた。

「・・・・・」

黙つてみる。

「あ、あれ? もしかして怒つてゐ? とつともとつても怒つてい
るのー?」

「・・・・・」

「「」、「めんー、じゃなくて、」「めんなさい」

「・・・・・」

「・・・・・」

まづい、泣かせてしまつた。ちょっと悪ふざけが過ぎたか。
「なんぢやつて、怒つてませんよ」

「ぐすつ、もうつ! はるつちのバカ! !」

「つちが怒らせてしまつた。結構喜怒哀楽の激しい人なんだ。
「すみませんでした」

「本当にどうしようつて思つたんだから! ・・・でもわたしあが
らかつたし、これで一対一だね!」

ランニングに誘つてくれたのと、飲み物をくれたのも考慮すると、
どう考へても一対十ぐらいだけど、それはあえて言わなくてもいい
だろ?。

「ふつ、今日の運動はここまでだね」

「そうですね」

「ねえ、はるつちはいつも幻ちゃんむかわんと命題めいだいでこじれるよね。あれ
つてさ・・・わたしもしてくれるので?」

命題、僕と幻はそれについて毎週語っている。そして命題は、もし僕が間渦家の人間と結婚する際には、とても重要な役割を持っている。

祭さんはよく幻の部屋に来て僕たちの会話を聞いてるので、実際にやつてみたくなつたんだろう。でも、そんなの自分の彼氏とやればいいのに。この人に、まさか彼氏がいないなんてことはないだろうに。

まあ、暇つぶし程度の提案なんだろう。だつたら断る意味もないか。

「ええ、いいですよ。やりましょうか」

「うんうん！　じゃあわたしが出題ね。じゃあね、”どうして運動をすると気持ちいいのか”、今話しあいにぱいつたりの命題だよね！」

運動が気持ち言い理由、か・・・

普段は事前に命題を伝えてあるので十分に考えてから話すことができるけど、今回は下準備が一切ないから、思つたことをそのまま言う形になる。難易度が高い分、自分の本当の意見、飾らない考えが出てくる、おもしろい形式だな。

「ちょっと時間をください、三分でまとめるんで」

「いいよー、三分と言わばじくらでもこいよー、あ、でもこくらでもはダメか、えへへつ」

・・・隣で面白いこといわれると、集中力が途切れ。

「祭さん、目、つぶつてもらえますか？」

「ええ？　な、何でかなつ？」

「お願ひします」

「わ、分かったよ・・・」

素直に目をつぶつた。・・・この人、社会に出たら危険な気がする。

僕はその間に考えをまとめる。

・・・三分経過。彼女は眠ってしまっている。・・・・・で
「ピンするか。

「てい

「うわっ！ あれ、いつの間にか眠っちゃってた・・・

おでこをさすって周りを見渡している。現状把握だろ？

「もうまとまりましたよ。それと、かわいい寝顔でしたよ」

「見たの！？ かわいいって、お姉さんをからかっちゃダメなんだ
からねっ！ もうっ！！」

からかいがいのあるリアクションだ。お姉さん、そう、彼女はこ
う見えても（読んでも？）二十一歳なのだ。

もうちょっとからかってみたい気がするけど、これ以上からかう
ともうきりがないので、そろそろ本題に移る。

「お姉さんが寝ている間に考えはまとまりましたよ

「本当？ 聞かせて聞かせて！！」

“お姉さん”には触れなかつたな。きっと気づかなかつたんだろう。もしくは、気づいてスルーしたのかだけど、・・・、たぶん前者だろう。さつきまでの経験的に。

「それではお聞きください。そうですね、運動というのを具体的に、
登山にたとえてみましょう」

特に登山経験はないけど、ぱつと浮かんだ例がこれだつた。

「山登りは体力面のみを見れば、かなりのエネルギーを消費します
よね。経験者はもちろん、初心者だったら、半端じゃない疲労を伴
う。あえてプラスかマイナスかと言うなら、マイナスと言えるでし
ょ。それにもかかわらず、疲れるにもかかわらず、多くの人が登
山を楽しんでいる。そして、その中には初心者も少なくない」
祭さんは僕の話に耳を傾けている。彼女は運動だけでなく、こう
いったものにも興味を持っているのだ。

「さつき、初心者のほうがより大きな疲労を伴うといいましたけど、
それだけじゃない。初心者は当然ですが経験者ではありません。つ
まり、登山がどの程度疲れるものなのか性格には分かっていない。

どのくらい疲れるのかと言うのは、他人の話や本を読んでも結局のところ、自分でやってみないと分からぬ。それに、経験者にしても、どの程度疲れるのか分かつていても、それは言つてしまえば気休め程度のこと。それが分かつたところで、疲れるものは疲れる。それでも、それなのに、予想される疲労、又は未知の疲労をおしてまで多くのチャレンジャーが挑戦する。それはどうしてなのか?」

「うんうん、どうしてどうして?」

祭さんがわくわくした顔で続きを促してくる。結構聞き上手な祭さん。相手が興味津々だと話し手もやりやすいな。

「どうしてなのか、それは、『ゴールがあるからです』

「」一度区切る。」少しあはは少しもつたまうつたまうが、面白く聞けるだろう。

「『ゴールがある、田舎がある、田標がある。もちろん『ゴール』するまでの過程にも面白いところはたくさんあるだらうナビ、今は『ゴール』に注目してください。登山で頂上まで登つたらどうしますか?」

「うへん、景色を見るかな?」

何かを思い出すよくな顔をしてそう言つ。きっと、過去の登山経験を思い出しているのだろう。なんとなく、山登りしたことありそうだし。

「そうですね、そのとき何を感じますか?」

「ええ? そりや、普段見られないよくな素敵な景色に感動するんじゃないかなあ」

「その感動、つまり『ゴールしたことで得られる達成感、これが途中の辛さを大きく上まつていて。辛さよりも感動が勝る。だから、"気持ちいい"と感じるんだと思います』

達成感、『ゴールの満足、それを得るためにがんばっている。

「今のは『ゴールが比較的"近い"』例でしたけど、普段の運動でも自分の"遠い"目標に一步一步進んでいる。それも達成感の一種と言えるでしょう。その感動が"気持ちいい"に関係しているととれる

でしょう

「そっか～。山登りとかの大きなイベントじゃなくても、日々の運動でも理想の自分にゅっくつただけど、確実に近づいている。だから気持ちいいんだねっ！」

「そうですね。つまりは、運動することで自分の目標、自らが持つ理想に近くなつていく。それが気持ちいいにつながつていく、こんな感じですかね」

まとめてみた。やつぱり事前にゅっくつり考える時間がないと、難しいものだな。登山をマラソンにするぐらいいの心遣いはあつてもよかつたのに。

「なるほどにゃん。やつぱり、はるつちはすごいね！ わたしだつたら、どうして気持ちいいのかだつて？、たくさん動いて汗をかけば、体の空気が入れ替える気がする、それが気持ちいい！ つて言つちやいそうだよ～」

・・・。なんかそつちのほうがしつくつくるのが悔しい。あれだけ長々と語つたのに、そんな一言のほうがふさわしい感じがする。ああ、そうか。問題は長さじやないのか。大切なのは、相手にそうだと思われること。自分の考え方あてに納得してもらつ、それに長さは関係ない、か。

彼女を素直にほめるのは何か悔しいから、最後に少し無駄口を言つてみるか。

「すご～って言つても、祭さんの彼氏ほどではありますよ」

「ん？ 彼氏？ わたし、彼氏とかいないけど？」

あれ、彼氏いないのか。少し意外だ。

「気になる子なら、いるけどねっ！」

笑顔でワインクしてくる。気になる子が、彼女に気に入られているんだから、さぞかし変わつた奴なんだうな。

「ふう、そろそろ帰ろっか！ 今日は楽しかったよ。じゃあ、また

明日ね！ 遅刻したらダメだぞっ！！」

「はい、また明日
別れの挨拶を終えて、彼女は爽やかに走って帰る。僕はゆっくり
と歩いて帰る。

四人でお出かけ

「はつ、はつ、はつはつはつ」

言つておぐが、これはくしゃみ三秒前なんていう、次につながる可能性が皆無な状態ではない。もちろん、僕が否定しているのは、『くしゃみ』というフレーズであり、秒数は問題ない。三秒が一秒になつても、ましてや一秒になつたところで、正解にたどり着くことはない。

僕は今、おそらく皆の想像の通り、息が上がつているのだ。

それはなぜかと言つと……これも用並みな展開だが、サイクリングをしているからだ。

サイクリング。目的地は町外れにあるにある丘。メンバーは、僕、幻、おとぎ 祭さん、まつり そして白さん。

どうしてこんなことになつてしているのか、それには少し説明が要る。しばしお付き合つて。

さかのぼること三日前、僕は幻の家に、月末の計画を立てるために遊びに行つた。月末、僕たちはまだどこかに出かけるつもりだった。

「前回は遊園地だったから、今回は近くの自転車でいける場所がいいわね、祭姉さんもさそつてみようかしら」

幻がそう言い終わるか終わらないうちに、まるでその台詞を待つていたかのようだ、非常に絶妙なタイミングで祭さんが現れた。

「そういうことならお姉ちゃんに任せなさいー。サイクリングだつたらいい場所知つてるからねー！」

胸を張つて自信満々にそう言つた。

「登場するタイミングが良すぎるけど……偶然だよね？」

「じゃあわたしに任せたねー！ その日はぜひせ白ちゃんも暇だらう

から誘つておくよ~」

そう言つてそそくさと去つて行つてしまつた。

僕も幻も、まだ任せるとは言つてなかつたけど・・・

「まあ私たちばやうこりとに詳しくないし、やつてくれるといふならお姉さんに任せましょうか」

それもそ
うか。

さつきはなんとなく」ねてみたが、祭さんは詰つならぬ」ついしたこと�이得意分野だ。彼女ならきつと、楽しいサイクリングを計画してくれるだろう。

そうだ、回想ついでにむりひとつ報酬しておいた。

祭をとむるに田は幻に難生した

私は「朝早く起きれないから」という理由でランニングへの参加は辞退したが。もっとも、彼女はスタイル維持はしっかりできているようだから、やせるための運動は特に必要ないのだろう。それについてはうらやましいと思うけど、おそらく見えないところでなにかしらの努力をしているのだろう。

もしくは、食べても太らないという、特異体質なのかもしれないが・・・たまにそういうことを言つてる人いるんだよね。そんなことあるはずないのに！

・・・少し取り乱して失礼。

まあそういうことで、ランニングは僕と祭さんの一人だけでやつてこる。もう十日ほど続いているが、これは祭さんのおかげとこりのもちりんあるが、継続の秘訣はもうひとつある。

それは、白さんの差し入れのお菓子だ。

やせるために運動してるのー、お菓子食べてちゃだめじやん！
とツッコミを入れてくれた諸君。お菓子の作り手をもう一度確認してみてくれ。そう、白さんだ！

彼女は、砂糖控えめ低カロリーにもかかわらず抜群においしい、商品化すれば間違えなく大ヒットな、そんなお菓子を作ってくれて

いるのだ。

もう何度も彼女には感謝しているが、もう一度改めて御礼を言いたい。

ありがとう、白さん！

という感じなのがお分かり頂けただろうか。要するに白さんのお菓子は最高というわけだ！

・・・訂正。要するに、僕たちは今、祭さん主催のサイクリングに参加しているというわけだ。

それと僕が今ゴールを切望して息を切らしているのは、僕の体力が異常だから、道が険し過ぎるから、などではない。勘違いしないでね！

僕は今、背中に大きな大きなリュックサックを背負っているのだ。中身はピクニックセットと四人分の昼食。ちなみにピクニックセットというあいまいな名称のついたセットが、この重さの主な原因だ。なぜ僕がすべてを持っているのかといふと、それは二、三行の説明ですむ。

「幻ちゃんと白ちゃんは体力的に荷物を運ぶのは辛いから、わたしとはるっちとで分担しようねっ！」

祭さんは僕と半分ずつ運んでくれるつもりだつたろう。彼女の口調からも、それが感じられた。

でも、田代の世話になつていて恩に加えて、今回の計画をしてくれた彼女に、重い荷物を持たせられようか？ いやできない。

という経緯から現在の僕に至るというわけだ。現在の僕の状況を説明しているうちに、やつとゴールが見えてきた。

「はっ、はっ、はっ」

ゴールまであと、三百メートル、一百、百、五十、そして、目的

地にたどり着いた。

「うおお

他の皆がどの辺りにいる確認しようとして、後ろを振り返ったとき、目の前に現れた光景に僕は、柄にもなく目を奪われた。

一面に広がる雲ひとつない空、その画面下側には、紅葉も終わりすでにたくさんの葉を落としている木々。自分の家はあの辺りだろうか？ 僕の住んでいる住宅街が、カラフルな砂がちりばめられているように位置している。あんなに大きな幻の家でさえ、砂粒が小石になつた程度にしか見えない。

僕の住んでいる町も少し足を伸ばせば、こんなにも自然の広がっている土地があつたのか。

しばらくぼつとしていたが、ふと、本来の目的を思い出す。改めて皆を探すと、白さんがゴール三十メートルまで来ていた。

「お疲れ様でした」

「お、お疲れ様です。私の荷物まで運んでいただき、ありがとうございます」

おしとやかにそう言つた。この一言で、じにじにへるまでの僕の疲れがすべてすつと消えた。

言葉による癒しつて、本当にあるんだなあ。

それから僕たちは、昼食を食べるスペースを作り始めた。もちろん休んでいてください」と言つたけど、根がまっすぐな彼女は一緒に手伝ってくれた。

一人で荷物を座りやすい場所まで運んで、そしてその中からブルーシートではない、もつと高級そうな何かを出した。

何だろ？ これは・・・？

この柔らかな肌触りの正体が気になつたが、あえて聞かなかつた。聞いてしまえば、僕のような一般人は恐れ多くて座ることなどできないだろうから。

かくして、座れる空間を作り終えた。

「少し休憩しましょうか

「そうですね。一人が来るまで休んでましょ。」

僕はシートに横になる。白さんも服がしわにならないように気をつけながら座った。

「疲れましたね」

「そうですね。白さんは普段、運動とかするんですか？」

「いいえ、どちらかというと、家の中にいるほうが好きですので」

「そうなんですか。僕もどちらかというとインドアですね」

こんな感じの雑談をして、一人の到着を待つた。

三分後。あいも変わらず白さんと雑談をしていると、後ろのほうからさわやかな声が聞こえてきた。

「ふう、到着！ 運動は気持ちいねっ！ 幻ちゃんは、ばくちやつたかな？」

声のした方を見ると一人の人影、こちらに手を振っている祭さんと、最後の力を振り絞り、もう一步も動けないという感じの幻が到着したところだった。

すべての力を出し切った幻は、祭さんの肩を借りて、シートまで向かってくる。

「ひどい目にあつたわ。こんなところ、軽いノリで来ていいところではなかつたわね」

シートに着くなりそう言つて、寝転がつてしまつた。そうとう疲れただ。昼食の準備ができるまでは休ませてもいいだろ。

「じゃあわたしたちで昼食の準備しちゃおつか！ 今日のお弁当も白ちゃんが作つてくれたんだよ！」

白さんの弁当、これは間違えなく極上の品だわ。

「ありがとうござります、白さん」

「い、いえ。お料理好きなんで・・・」

料理好きでこの性格、おまけにお嬢様な美人とくれば、どれだけもてるのだろうか。ちょっと気になるけど、白さんにそんなことを聞いても、いたずらに場を面白くするだけだろ。白いからお世

話になつている僕の中には、そんな選択肢はない。

「準備はこれでオッケーですね。おーい、幻、準備できたぞ」

一度寝転がつてから身動きひとつしていらない幻に声をかけると、彼女はすぐに起きた。どうやら眠りてはいなかつたらしい。どうか、外で居眠りしてしまつのは祭さんぐらいか。

シートの上に並んでいるのは、様々なサンディイッチにお菓子のクッキー。どれもとてもおいしそうだ。

「これで準備万端だねっ！ それではお手を合わせて、いただきます！」

いただきます、祭わんの命令とともに昼食が始まった。

メインテーマ

「「」馳走様でした！」

「いえいえ、お粗末をまでした」

昼食終了。

全員自分の分を残さずに食べきった。これは当然の結果だらう、白さんの料理を残す輩がいたとしたら、そいつには味覚がないとか考えられないな！

「ふう、満腹満腹大満足だねっ！」「飯も食べたし、体力も回復したよね？ そろそろ遊ぼうよ！」

そう言つて、祭さんは荷物の中からフリスビーを一つ出した。

・・・。こんなものまで持つてきていたのか。通りで重いわけだ。「一つ持つてきたから、一人一組になつてキャッチフリスビーやろうよー。」

「楽しそうね。でも、フリスビーなんて家にあつたかしら？」

「フリスビーは買つてきたんだよ！ それじゃあチーム決めよっか。わたしと幻ちゃん、はるつちと白けちゃんでいいよね！」

おそらく到着順だらう。文句を言つべきところではないので、皆がうなずく。

僕は白さんとか。彼女がどの程度運動できるのかわからないから、とりあえず軽くやつてみよう。

「よ、よろしく、お願ひします」

「そうだ、言い忘れていたけど、このゲームには特別ルールがあります！」

特別ルール？ まあ確かに、ただフリスビーを投げ合つての意味がないし、そういうものがあつた方が盛り上がるかもしれない。

こんなところにまで粋な細工をしてくるとは、さすがは祭さん。

「なんと、なんとなんと！ フリスビーをとれなかつた方は、相手

に犬、メイド、妹のどれかになつて次にどちらかが失敗するまでなりきること！ それと、はるつちは男の子だから、お兄ちゃん、執事、カエルのどれかね！」

祭さんを除く全員がずつこけた。な、何だつて！？

「異論はわたしが認めません！ ジャあ開始！！」

年長者の強制開始しやがつた。年功序列制、こんなところにも潜んでいたのか・・・

幻と白さんは、ルールの撤回をあきらめているようだ。

きつと家族間では日常茶飯事な無茶振りなのだろう。ならば僕も一人に倣つて従うとしよう。

混乱のあまり、カエルという突つ込み待ちをスルーしてしまつた。でも、これくらいのミスは許してほしい。

「じゃあ、とりあえずゅつくり投げるんで。まずは腕慣らしからにしましょ！」

「は、はい。どうぞ」

一投目、僕がなせる番だ。まさか始めから失敗するわけには行かない、最初なのだから確實に取れるように投げよう。

僕はできるだけ力を抜いて、万が一にも取れないなんてことがないよう、ゆつくりと、相手が一步も動かなくていいように、そんな気持ちをこめて投げた。

フリスビーのほうも空氣を読んだらしく、僕の狙い通り、顔の前に手を出せばそれだけで取れるような軌道を描いて白さんに向かつていった。

そして・・・万が一がおきた。

「いたつ！」

理想の軌道で進んでいったそれは、そのまま、彼女の顔面に激突した。

「あ

やはりというか、セオリー通りというか、彼女は運動音痴だった。

「だ、大丈夫ですか？」

「へ、平氣です」

鼻に当たったのだろう、彼女は涙ぐんで、それでも僕を心配させないように、微笑んでそう言った。

・・・今僕に、半端じゃない罪悪感がのしかかっている。

「白ちゃんアウト！！ 罰ゲームを忘れちゃダメだよ～」

「のミスをもみ消してしまおつかと思つたけれど、それは祭さんによつて阻まれた。

退路を断たれた白さん。そして、彼女が口を動かす！！

「申し訳ございません、『主人しゃま』

メイドとか語尾かみの混合技！ 言葉だけで吹つ飛ばされそうになつた。

彼女は真つ赤になりながらも、実によどみなくそう言った。

・・・きっと普段から罰ゲームと称して、間渕家で愛でられているのだろう。

「そ、それでは、今度は「こちらから投げますね」

ひゅつ。

キヤツチはあんなに残念な感じだったのに、投げるのはそれなりだった。

・・・この勝負、もう展開が見えたな。

三十分後。僕たちは再びシートに座つている。

ゲームのその後の展開を、ざつくりと説明しておこう。

ゲームの終盤は彼女も多少取れるようになつていて、僕は終始ノーミスだったので、罰ゲームは彼女のみが受けていた。

それに、彼女も最初こそ恥ずかしがっていたものの、途中からは彼女の演劇スイツチがはいつたらしく、ドキッとするワードがいくつも飛び出してきた（彼女は実は、料理だけでなく、演劇もできるのだ！）。

すべてを紹介して、彼女の魅力を知つてもらいたいところだが、

そんなことをすれば万単位の文字をお読みいただくことになる。それは、これらは、これらとしても避けたいので、一部抜粋といつところに落ち着かせてもらおう。

「お兄ちゃん、とつてとつて！」

「こつちに投げてほしいワソ」

「あー、申し訳ございません」

「べつに、とつてくれてもうれしくないんだからねー…」

「きやうーん」

以下略。

そして、僕の心を幸せにしてくれた白ちゃんはゲーム終了後、スイツチが切れて急に恥ずかしさを取り戻して、どこかへ走り去ってしまった。

「春君、あなたがルールにかこつけて白姉さんをあんなにいじめるなんて…・・・正直引いているわ」

「はるつちひどかったよ！ 悪魔だつたねつ…！」

僕は現在、一人からお叱りを受けている。どうにも納得できないけど。

だつてさ、そんなのつてないよな！

しかしそれを口にすることはできないので、謹んで説教を受けていた。

それからさらに五分たつて、白ちゃんがもどってきた。目が少し赤くなっている。

「大丈夫だつた？ お姉ちゃんがちゃんと言つておいたからね！」

いや、本を正せばあなたのせいなんですけど…・・・

「大丈夫、それにゲームだつたんだから。春さん、勝手に走つていつてごめんなさい。いやな気分になつたでしょーう？」

「い、いえ。そんなことありませんよ。」しかしながら、何かすみませんでした」

「うんうん、悪いと思つたら素直に謝る。それが大事だねっ！」

完全に天然百パーーセントの祭さん。でも、この場にいる中で一番ひどいのは、祭さんと一緒にさんざん僕を叱つた、幻だらう。策士幻！ なんか強そうだな。

ともかくにも、こりつして僕への言われなきいじめも終わつた。

それはよかつた。本当に。

さて、一件落着したところで、今日のメインイベントに移りましょうか

幻が促す。

メインテーマ。

今日の本題。

ここまで自転車で來たことや、自然の中での昼食、それに先ほどのフリースビーは、言つならば序章。メインは別にあるのだ。

「そうだね、そろそろ始めよっか！ わたしもちゃんと考えてきたよ！」

「私も、大丈夫です」

皆準備はしてきたようだ。当然だが、僕もそれを怠つていない。

「それでは、はじめましょうか。四題命題」

四題命題、これが本田のメインイベントだ。
とりあえず、軽く説明しておこう。

四題命題とは、命題を一人ひとつ考えて、それをカードに書く。全員が各自の書いたカードを持つて円形に座る。そしてカードを隣の人に回していく。十分に回したらシャツフル終了。自分の手元に来た命題について十分の思考時間を設けて、その後開始。カードシャツフルの号令役から時計回りに担当の命題について答える。

これは、この前祭さんと命題の話をしたときに思いついた方法だ。事前の準備なしでやることで、脚色していない生の意見が出てくる。ちなみに四というはこの場に四人いるからそういう名付けただけで、その時その時によって数字は変動する。

こんな感じかな。まあここで説明を聞くより、実際に見たほうが早いだらうってことで、そろそろ始めよう。

「それでは、カードをシャツフルしましちゃうか。終わりの合図は私が出すわ」

幻が号令役を買って出た。普段はそこまで積極的ではないけど、ことが命題名だけあってわくわくしているのだろう。かくいう僕も、初めての経験に少しだけキドキしている。

「それでは始めましょう」

号令とともに自分の右隣にカードをまわしていく。ちなみに現在の並び方は、僕から見て右が幻、左が白さん、正面にいるのが祭さんだ。つまり、答える順番は、幻、僕、白さん、祭さんとなる。

「もうそろそろいいでしょ」

シャツフルを始めてから一分たつて幻は終わりを告げた。

そしてそれぞれが手元のカードを確認。ここで自分の書いたカードがきたらもう一度やり直しながら、今回はうまくいったようだ。僕の元に来たカードは、「それぞれの常識の違い」だ。ちなみに僕が書いたのは「自由とは何か」。誰の元へ言ったのかはわからないけど、ぜひ意見を聞いてみたい命題だ。

今は思考時間だ。前回の教訓から、さすがに十分はないともめられないということから設けられた時間。それに、祭さんと田さんは初心者なのだから、これくらいの時間がちょうどいいだろう。僕も手元の命題に考えをめぐらす。

「それぞれの常識の違い」か。とりあえず、常識とは何か、どうやってそれを獲得するのか、つてところから入っていこうかな。それから、その違いがもたらすこと、どうやってそれを解決するのか、なんてところまで突つ込めば万々歳だけど、それは欲張りかな？限られた時間で考えられるところまで考えて、それをまとめよう。

十分後。思考時間終了。

僕は何とか自分でしつくり来るぐらいにはまとめられた。前回は三分だったからなあ、より過酷な条件で経験しているので、それが役に立つたのかもしれない。

「それじゃあ始めましょうか。私に来た命題は『本音と建前』、なかなか興味深い命題だわ」

本音と建前か。

それは僕の出した命題とは違つから、白さんか祭さんのものだろう。だとすると・・・二人のことを初心者なんてなめるべきではないな。命題の題名を聞いただけでも、その人の感性は多少なりとも伝わってくる。

考えてみれば彼女らは間淵家の次女と四女。命題については幻以

上に触れているのだ。この場で一番の初心者は、僕じゃないか。

「本音と建前、まずはどんなときに本音を、どんなときに建前を使

つていてるのか考えてみましょ。そうすると、ほとんどの場面で、私たちは本音ではなく建前を使っていることが想像できるのじゃないかしら。私の考えを言つと、会話の九十九パーセントは建前からできているわ」

「いきなり大胆な仮説。でも確かに、僕たちはいつ、本音を言つているんだろう？」

「ここで誤解してほしくないのは、建前というのは悪いものではないということ。好きでもないものを好きといつたり、つまらないものを面白いと笑つたり、建前と聞くとそういうものが悪い浮かぶでしょう。建前というのは自分の感情を押し殺した虚構であるように思ひがちだけど、それが悪であるとは限らないのよ」

彼女はここで一回お茶を飲む。その間、話すものは誰もない。きつと皆が「本音と建前」について考えているのだろう。

命題は、答える側だけが考えるというのではなく、聞いている側も自分なりに考える。

普段は自分の考えた命題についての意見を聞いているからけど、今回は他人の命題を他人が答えている。

だから、自分もその場で考えざるを得ない。他人の意見を聞くには、ベースとなる自分の意見がないと話にならない。それこそ会話にならない。

だから皆考える。幻の話を理解するために。それもこの形式の醍醐味だろ。

のども潤し終わり、彼女は再び口を開く。

「私の言つ建前というのは、一言で言えば架け橋。人と人が円滑にコミュニケーションできるようにするための潤滑油。誰もが点前を忘れて本音を言い合う世界を想像してみて」

建前のない世界。聞こえはいいけれど、それは本能の世界だ。

おぞましい、なんでものじゃ言い表せない世界だ。

「建前というのが悪だけじゃないことがわかつたでしょう。本音というのが善だけではないことがわかつたでしょう。これなら社会は

建前であふれていることも飲み込めるんじゃないかしら。でもここ
でひとつ問題が発生

ピッと指を立てる。

「建前は悪だけじゃない、でもそれは善でもない。どう飾ったところで、どんなに言いつくりつたところで、建前は建前。建前は社会に必要不可欠、なければ会話ができない。だけどそれはつまり、私たちは建前の世界で生きているということ。そんな世界で、いつ、誰に本音を話せるのか、本音で話せるのか」

本音がないと世界は成立しない。でも、だからって本音はどこで
も言えないのか？

虚構だけの世界で、嘘が本当に、本音が建前の世界で生きな
ればいけないのか？

それが、生きるためのルールだとでも言つのか？

それは。
あまりにもつらい。
あまりにも悲しい。

それとも、本音と建前を意識しなければ、そんなことを考えな
れば、思考をとめれば、生きていけるのだろうか？

でも、それは本当に生きているといえるのだろうか・・・

「まだ話は終わっていないわ。話の途中で勝手に結論を下すのはやめ
て頂戴。人の話は最後まで聞くものよ」

幻が少し怒った。

周りを見ると二人とも暗い顔をしている。きっと僕も、同じ顔を
しているのだろう。

そうだった、話はまだ終わってなかつた。

九十九パーセントの建前。だったら、残りの一パーセントは？

「社会で生きていくためには建前が必要。でもそれ以外では？ た
とえば家族だつたら？ 恋人だつたら？ 本音をいえるんじゃない

？」

家族、恋人、本音を言える仲。

そうだ、僕は今ここでなら、この人たちとなら、本音で会話して
いたじゃないか！

家族となら、建前なしで接していただじゃないか！

「本音を言える関係になるには、たくさんの時間が必要、多くの会話が必要。でも、それさえクリアできれば、本音を言えるはず。もちろんすべて本音というわけにはいかないわ。でも、少なくとも言いたいことを曲げることは、思つてもないことを言つことは、必要ないわ」

建前の世界の中でも、本音で話せる人がいる。そうだ、そうじやないか！

「全員と、自分の関わっている全員と本音で接することは無理でも、誰一人とも建前でしか話せないわけではない。それだけで、救われるものじゃない？」

考えてみれば、命題だつて本音を語ること。自分の意見を述べること。

それができる人同士は、きっと本音で話せるんだろう。

「いやー一発目から心に残る話だつたね！ ブラボー幻ちゃん！」

祭さんが歓声とともに拍手をする。僕と由さんも拍手をする。

「お疲れ様、お菓子食べる？」

由さんは務めを果たした幻に癒しのマドレーヌを渡す。終わつたらもう戻るシステムなのだろうか。だとすると、僕の番が始まる間から、終わりが待ち遠しく感じる。

「さてさて、次はお待ちかね、我らがスターのはるっちですっ！」

いつたい君はどんな本音を聞かせてくれるのかなっーー！」

ハードルを上げてくる祭さん。彼女は天然だから、別にハードルを上げている自覚はないのだろう。

きっと、この場を盛り上げるためにやつているのだろうが、忘れ

てはならない、彼女は今回の大トリ。そのあたりが、自分に何倍にもなつて帰つてくることにまだ気づいていない。

「それじゃあ次は僕の番ですね。力及ばずながら、精一杯努めさせていただきます！」

祭さんの本音に乗つて、僕も本音で話すとするかー！

6 (因題命題その一) (後書き)

ここから因題命題の始まりです。
あまり堅苦しくならないように、命題以外も交えていこうと思います。

四題命題、一番手は僕だ。

「僕のところに来た命題は『それぞれの常識の違い』。常識の違いか・・・」

頭の中で整理した内容を再確認。大丈夫、バツチリだ。

「そもそも常識とは何か？ これは物事を判断するときのものさし。一人一人が持っている自己判断のふるい。そう考えてくればいい。まず最初に言いたいことは、常識とは天から降つてきたものじゃあない」

さつきの幻のよう^{おとぎ}に、結論から言つてみる。

自分で言つてみるとわかるけど、この方法は、この手法は緊張する。自分の考えに自信がないなら絶対に使つてはいけない業だ。みなの注目を集められるけど、その分失敗は許されない。

こんな方法をそれとなく使うなんて、さすがは幻だな！

念のため三人の反応を見る。出だしはまずまずつてところか。

ここからの肉付けで良し悪しが決まる。

「常識、個人の倫理觀つていうのは、その人が生まれてから教わったこと、経験したこと、その他諸々の後天的なものから成り立つている。親のしつけ、子供のときに読んだ本、最近見た映画、友達との会話、他にもいろいろなものが組み合わさつて、それができている。それは神様から授けられてものなんかじゃない。生まれたと同時にもらつた出生お祝いの品でもない。自分で、自分自身が生まれてからこれまでにやつてきた努力の積み重ね、成功と失敗の盛り合せ、それが今自分の持つている常識の糧となつているんだ」

先天的でなく後天的。

才能でなく努力。

個人の常識はそうやって、時間をかけて積み上げられたものだ。

「そして、それは今、このときも変化している。一箇所にじつとし

ているんぢやなくて、あちらこちらへと絶えず動いてる。三年前の自分と今の自分ぢや、手持ちも常識はまるつきり違う。昨日の僕と今日の僕ですら小さくとも、間違えなく変化している。それが進化なのか退化なのか、はたまた横つ飛びなのかはわからないけど、確実に変わっている。そう、常識とは天からのギフトでないだけではなく、がしつとした固体でもないんだ。先天的なものであり、流動的なものであるんだ

「完成なんてない。明日も明後日も、十年後も二十年後も、生きてる限り自分の常識は、個人の価値観は変わり続けるのだ。常に動き続けるっていうと、魚の、あれ、何だっけ？　・　・　そいつを、カツオだっけ。なんかそれみたいだね！」

停滞は死！　つて感じ？

・　・　うんちくすらまともに言えない自分つて・　・　

事前の準備なしだとこいつとこひでぼろが出来るな。まあ、地の文だからいいか。・　・　いいのか？

あ、僕が黙り込んでいる間に、皆がこっちを向いてる。次の言葉への期待が高まっている！

言葉と言葉の間の空白つて、話してる側からはこんな風に感じるのか。だとしたら、さつきの幻の『お茶を飲む』とか、もう別次元の話だな。

異世界の住人！　いや、ただ言つて見たかつただけで何のフラグでもないけど。

皆の期待につぶされる前にそろそろ話を再開しよう。

「だから、だからこそ違いが生じる。ひとつひとつがお手製で、材料も加工方法も違つて、その上ずっと動き続けるものだからこそ、違いが生まれる」

たまたま発言者の主張みたいなところでよかつた。あれだけもつたいぶつて（そんなつもりはなかつたけど、そう取られただろう）、もしさつきの言葉がどうでもいい所の話だつたら、それこそカツオの件とかだつたら、確実に終つてたな・　・

とりあえず僕にはまだ、味な演出は使えないってことだ、同じ失敗を繰り返さないように、もう本題に戻る。

「家族兄弟ですら異なる倫理観を持つているのだから、学校の友達とか、会社の同僚とかならなおさらだろう。生まれも違えば暮らしも違う、そんな人同士が同じ常識を持つていろいろの方が無理な話だ。そうだろう?」

一人っ子で学生の僕が、兄弟や同僚とか言つてみた。でも、あくまで想像だけれど、それは間違つていないだろう。

「さすがに、命は大事とか、人を殺してはいけない、みたいな大きな常識はどこでも教わるだろうから、誰の中にもあるだろう。でも、卵にはケチャップ! とか、ツンキヤラは最後にはデレなればいけない! とかの常識は、その人の育ち次第、読んでいる本の傾向次第で、誰もが共有しているものじゃない。そういうところで違いが生まれている。国の風習が違えば、前に言つた二つも決して共通の常識ではないしね」

女の子にツンデレの話とかしてしまったけど、この一家はわりと幅広い『常識』を持ち合わせてるので、特に変な顔はされなかつた。この常識は共有していたようだ!

「だから、常識の違いは必ず生じるものなんだ。それで、問題はそのこと、『常識が異なるなんて常識』という常識を皆が共有しているわけじゃないってことだ」

なんだかまどろっこしい言い方になってしまったけど、ここまで読み続けてくれている読者(いるのか? いると思おう!)なら理解してくれつるだろう。一応語り部の義務としてやっておくけど、わかりやすく言えば、違いを認識していない人もいるということだ。わかり易かったかな?

「常識の違いを認めなければ衝突や誤解が生まれる、相手に自分の常識を押し付ければ、争いが生まれる。進行の違いから起きた戦争なんて、歴史を紐解けば例を挙げるに事欠かないだろう」

世界史でそういう類のものを習つた気がするけど、名前は思い出

せない。

受験生の僕、ピンチ！ 「冗談じゃなくて本当に」！ ！

「だから、違いを認める」と、常識の差異も常識の内つていえるようになること。これが大事だね。以上で僕の発表を終わりにします！」

ふう、語りきった、今日は今まで一番語ったな。

「常識の違い、これって言われてみればそつかつて納得できるけど、自分から、そだ！ つていう風には思いつけないよね！ ロロンブスの卵的見たいな感じ？」

言われてみれば当たり前、でもそれを思いつくことは話が別。

いい比喩を使うな、ナイスチョイス、まつり祭さん！

「お疲れ様でした。お飲み物はいかがですかや？ ・・・いかがですか？」

相変わらずの語尾がみ。これは彼女にとつての常識なのだろうか

？ 恥ずかしがつてるし違うか・・

「ありがとうございます。じゃあ水をいただけますか？」

「えつ？ あの・・すみません、お茶しか持ってきてません・・

嫌ならコンビニまでいきますが」

「すみません間違えました。僕は今お茶が飲みたかったんだ！ キ

ヤンプにはお茶！ それがじょしきですよねつ！ ！」

あわてて訂正する僕。

コンビニで・・とりあえずここからの見当たらぬけど。何キロ先にあるんだろう？

キヤンプではお茶が彼女たちの常識なんだろう。僕は水派だけど。まあ、違いを認めるつてことが大事だつてさつき言つたばかりだし、僕もそれに従おう。お茶も嫌いつてわけじゃないし。なんか自家製つぽいから間違えなくおいしいし。

「春君、面白い意見だつたわ。私も違いを認める寛容な心をもつ持つていいわ」

もう持つている！ ？ この話を聞いてとかじやなくて！ ？

僕の話をほめてるふりして、最後は自分褒めに落ち着くのかよ・・・

相変わらずの幻に少し笑つてしまつ。

「それじゃあ次はお待ちかね、私の妹にして幻ちゃんのお姉さん、春君にとつては専用コックの白ちゃんの番です。用意はいいですか？ アーコーレディー？ ヤー！！」

自分で答えちゃうのかよ！ あと、専用コックじゃない！

一度に二つもボケを出されたので、普通なツッコミになつてしまつた。ゴメン！

それにしても、またハードルあげるのか・・・自分の番にはどうするんだろう。

自分にも厳しく、のスタンスでいくのだろうか、それとも・・・まあそのときは僕が代行しよう。

あれ、地味に緊張が高まるし。といつかこれに白さんが、僕の知る限りダントツ一番の恥ずかしがりやさんが絶えられるのだろうか。そつと、隣を見てみると・・・固まっていた。緊張を通り越して固まっていた。

なんてことを！ 姉妹なんだからこいつなることぐらいわかつていたろうに。

すると、幻が白さんの耳に何かを吹き込む。数秒後、白さんは一度目をつぶつた。そして、目を開けたとき、彼女の緊張は完全におさまっていた。

・・・何をしたんだろう？ 僕は隣に戻ってきた幻に聞いてみる。「ああ、ちょっと役者のスイッチを入れてきたのよ」なるほど・・これは僕も今日知ったことだが、彼女は意外といつか、想定外というか、演技派なのだ。

恥ずかしがりやを克服するために手に入れたスキルだそうだ。ものすごい荒療治だとおもつたけど。

「わかりました。次は私、間淵家が四女、間淵白の意見をお聞きください」

・ 何役なのだろう。高貴なお嬢様つて感じだけど。
でもそんなことより、白さんの命題の話を聞くのは初めてだ。どう
れほどのものなのかもとても気にならぬ。

「それではしばらくの間、お付き合いください」
彼女の担当する命題は、僕の出題か？ それとも・・・

7 (四題命題やのい) (後書き)

まだ続かねえよ
あと一題ーー！

白さんの演技している役は、高貴な雰囲気を漂わせるお嬢様、彼女の「デフォから恥ずかしがりやを引いた、会話には適した人格だろう。

何か物足りない気がするが、四題命題を円滑に進めるためには致し方ない、謹んで我慢しよう。

「さて、私のお話する命題は『自由とは何か』ですわ。ふふつ、答えがいのある命題ですね」

口調がガチお嬢様になっている。

「、これはっ！ 新たなキャラ、だと・・・

こんな隠し技まで持っていたとは。恐るべし、白さん！

「自由、日常会話でよく使われる、比較的なじみのある言葉ですが、それは何を意味しているのでしょうか？ いきなり結論を言つてしまふのではつまらないですし、何より説得力がありませんわ。ですので、少し寄り道をしながらいきたいと思います」

結論にたどり着くまでの寄り道、今までに使ったことも使われたこともない手法だ。

いきなり道の展開・・・お手並み拝見、いやー指導をいただこう。命題においては確実に彼女のほうが先輩だし、学ばせてもらう気持ちで聞こう。

「まずどうこう時に不自由と感じるのか、というのが妥当ですわね。好きなことができないとか、思い通りに行かないみたいな子供じみたことは言わないで下さいね。それは自由はないというよりは力がない、不自由というより無能というべきものなのだから」

ふふつ、と笑う白さん。

- ・・・そういうことは言わない約束だつー。そこは建前使わないとつー！
- とこりか、何このブラックキャラーー？

自由というより黒だけぞこれは短絡的か、名付けて暗黒姫でどうで
しょうか？微妙か・・・定評のダメ名付け。

それにしても完全に役になりきっている・・・正直ちょっと怖い。これが地とこう説もあるが、それは考えないことにしよう。

「不自由を感じる時、それは自由を認識した時。何かを認識するためには、その反対に位置するものも知らないと不可能。この場合は自由と不自由でしょう。人は本来不自由な生き物であり、自由を知つたとき、己の不自由を同時に思い知るというのは私の持論です。そこから堕落するか、自由を目指すかはその人次第ですね」

持論の宣言、これをされると聞き手としては相手の自身を感じられるから話を聞く気になる、続きを気になる。だけど僕が話してなら、こんな大胆なことはできないなあ・・・

「これは別に僕がチキンなんじゃなくて、暗黒姫が勇者過ぎるだけなんだからねっ！！

暗黒かつ姫かつ勇者とか、RPGに出てきたらびっくりのマルチポジションだな。

苦情殺到間違えなし！

「さて、そろそろ自由とは何か？ といつ命題に進みましょう。自由についての言葉通りの意味を言つうのでは意味がないので、少し違つた視点から見てみましょう」

確かに、「自由とは、縛られていないことですわ」とか言われたら、正直がつかりだ。ここまで引っ張つてそれ！ とか、そんなのいわれなくとも知つてるよ！ なんて台詞が飛び出すこと間違えなしだ。この当たり前は、『クロンブスの卵』を持ち出してもカバーしきれないな。

「自由とは、一段仕掛けのからくり箱なのですよ

・・・個性的過ぎる比喩、これは、何を意味しているのだろうか？ 続きを聞かないことにはさっぱり分からぬ。

「一段仕掛けというのは、文字通り、一つの扉を開ける必要があるところのことですわ。まず一段目、これは開くというより開け放し

になつています。それは自由といふ言葉を知ること。この扉を開けていない人はおそらく皆無でしょう。そのほとんどがここで終わっているのも事実ですが

「ここで終わつていい? といつことはまだ続きがあるのか?

「そして一段目、これは自由について考え、不自由について考えた末に、自分の不自由さ、世界の不自由さを知ること。そしてそれでもなお、自由を追求する人、そんな人だけ見える隠し扉があるのですわ。それが一段目の扉ということです」

扉の奥にある扉。

真実の奥に隠れた真実。

マトリヨーシカ。

・・・最後のも中身に中身が入つてゐて感じで、ほら、・・・、すみません蛇足でした。

雰囲気壊して「メンなさい! ! これで満足か?

「でもよく考えてみれば、一段といつのは私がたどり着いた扉の数というだけ。一段あるなら三段四段ともっとたくさんあると考えるのが妥当ですかね。それなら、一段構えといつよりは、人間試しとでもしたほうがいいかもせんね」

見る人によつてどこまで見えるかが異なる、人間試しとは言い得て妙な表現だな。

僕はどこまで見えているのだろう、幻はどこまで、祭さんだったらどこまでたどり着いているのだろう。

「以上が『自由とは何か』に対する私の考え方ですわ。結局の所、まだ分からぬといつのが現時点での結論なのでしきうか」

僕みたいな初心者からすると、問には何らかの答えを出してみたい、出さなければいけないと思つてしまつけど、今回のような考えもあるのか。自分なりの考え方で無理やりなことを言つよつもよつぽど、命題に対して誠実な人だからこそできることだらう。

「お疲れ様! サスガは私のお姉さまといつといつですね」

あれ、幻のやつ、またしても自分褒め! ?

その言葉を素直に受け取つたらしい白さんは、純粹な笑顔で賞賛へのお礼を言つている。

ピュアだなあ・・・純粹無垢とは、彼女が生まれることを予期した預言者が、その時にそれを表す言葉に惑わないよう」と、先に作つておいてくれたものなのだろう。

ちなみに命題の結論を言つたといひで役者モードは終了して、元の白さんに戻つた。

素へ戻つたときの白さんは、さつきまで意氣揚々と話していた自分が思い出して、少し赤面した。

やつぱりこっちの方がしつくりくるな！ 黒よりも白、これが彼女、白さんだわ！」

「これで三人目も終わり、白ちゃんお疲れさまつ！」

さてさて、もはやおなじみになつてきた祭さんのハードル上げ。まさか彼女ともあろう方が自分にだけ甘く行くなんてことは無いと信じているけど、もしも、もしももしも、仮の話だけど、彼女が自分の命題に集中していくそれをうつかり忘れていたりしたら、その時は僕がしつかりと代行してあげよう。

忘れちゃつたのなら仕方が無いしねつ！

「それでは、この長きにわたつた四題命題も残すところ最後の一人となりました。最後の一人、大トリをやらせていただくのは、このわたし、間渾祭でありますっ！ 一回一回、三回とわたしの妹とランニングパートナーが活躍を見せてくれました。わたしも先の三回ですばらしい意見を述べてくれた三人に恥じないような、そんな考えを発表したいと思いますので、どうぞご期待ください！！ その御期待をに沿うだけではなく、上回れるように、力をつくさせていただきますっ！！！ イホーイッ！！！」

・・・自分にもしつかりと仕事をした祭さん。ビッククリマークが四つ並ぶほどのはじけっぷり、流石としか言いようが無い。天然もここまできると、もうワシランク上位の存在だろう。

何かもう、尊敬に値する人だな。疑つたりして、マジすんません
したつ！！

幻と白さんは、いつも事だぐらいに、お菓子を食べながら見て
いる。

人間、慣れとはすごいものなんだなあ、この光景を見て、そう思
つた。

まあ、いろいろ思つていろいろはあるけど、ついに四題命題も次が最
後。

彼女の担当する命題が何なのか、まだ僕は知らない。今日の最後
を飾る命題とは、いつたいどんなものなのだろうか。

期待と期待もうひとつ期待を胸に持つて、彼女の口が開くのを、
言葉を発するのを待つ。

四題小説も残すといひあと一つ。最後の話は祭さん。

白さん同様、祭さんの命題を聞くのも今日が初めてだ。単なる序列で言えば、祭さんは幻や白さんよりも上。

でもその理由でいくと光さんが一位つになるけど……。それはどうなんだろう?

「つに私の出番ですっ! 出番なのです……わたしはね、三人の命題を聞いて、早く自分もやりたいなつ! 話を聞いてほしいなつ! つて、ずっと楽しみにしていたのですっ……! 始まり早々、いや、まだ始まつてもないけど……とにかくのつけからノリノリの祭さん。

普通なら、そんなに興奮したら途中で疲れちゃうよ、とか言いたくなるけど、相手は祭さん。

彼女には、田の運動で培つてきた無尽蔵のスタミナがあるので、そんな心配は無駄なのだ! えっへん!

まあ、僕が威張れることでもないけど。

「えつとね、わたしの考察した命題はね、『カリスマとは何か』だ

よー」

・・・カリスマとは何かだつて? そんなもの、十分の思考時間で自分の意見を言えるほどにまとめられるのだろうか? 少なくとも僕には不可能だ。たとえその猶予が一十分に延びたといひで、その確信は覆らないだろう。

できない確信といひのもの、情けない話だけど……。

それでも、それとも、彼女ならそれができるといひのだろうか?

祭さんには可能だといひのだろうか?

そうなら、そうだとしたら、彼女は飛び抜けすぎでいる。

僕はともかく幻や白さんのいるステージとは、一線を画している。

僕は彼女の言葉を待つ。
期待と恐れを持つて。

「カリスマっていうのはさ、一言で簡単に言つちゃえばさ、人を引き付けるポイント、つまりは魅力だよね！だから、『カリスマとは何か』を『魅力とは何か』に変えて考えてみよー！ オー！！」
カリスマと魅力。確かにそれらは、同類というか、入れ替えても意味が伝わるほどにはリンクしている。

命題を自分の考えやすい物に変える、取つ掛かりが見えなければ自分が移動する。

時間が少ないからといって焦らず、闇雲に取り組むのではなく、全体を見通して、どのように進めば近道になるかを考える。

命題の変形、位置の変換、それは確かに効率的である。

でも、わずか時間しか与えられないのに、そんなことを考える余裕があるうか？ そんなに正しくいられようか？

一刻一刻と迫つてくるタイムアップにひるんで、我先にと近くにいる取り掛かりに走つてしまわないと、言えるだろうか？

それは、そんなことは、命題に慣れすぎるとほどになれていなければ無理だ。

幾度となく考え方抜いた人間でないと不可能だ。
凡人には不可能だ。

つまり、彼女は、一線の向こう側、熟練者の一員なのだ。
最も大トリに相応しい人だつたのだ。

「魅力とは何なんだろうって考えるには、まずは自分がどんな人に魅力を感じるのか考えることから始めてみよつか！ これが第一歩だねつ！」

これまでのことは一歩にも含まれない、彼女にとつてはスタート前の深呼吸、单なる前準備と同じレベルの話だったのか。ますます凄さが際立つてくる。

「わたしが魅力を感じる人はね、そうだなあ。頭がよくていてそれを鼻にかけない、そんな人かな！ お勉強ができるもそれは数ある個性のひとつ、そういう人に憧れちゃうかも。白ちゃんはどんな人に魅力を感じるかな？」

ほかの人に話を振ることはもちろんルール違反じゃない。むしろ、自分以外の人の意見を取り入れるという、命題を考えるにおいては有効な手段だろう。

問題は、自分の意見の発表に集中している一方で、それをやってみせるほどの余裕があるかどうか。

ちなみに、祭さん以外のメンバーはそれをやらなかつた。できなかつたのかはわからないけど、やらなかつた。
さらに言えば、僕はできなかつた。

「えつと・・・自分に自信を持つていて、それでいて人の話も聞いてくれる人、です」

「うんうん、続いて幻ちゃんとはるっちもお願い！」

「私は、そうですね、ゆるぎない自分を持つている人には惹かれるかもしだせん」

「僕は、どうだろう・・・。文武両道な人というか、オールラウンドーに魅力を感じます」

四人それぞれの、魅力を感じる人について聞いてみると、結構バラバラっていうのが正直な感想だな。

何に魅力を感じるかつてのは、人によつてこんなに違うもののか。

「皆答えてくれてありがとね！ これでわかったと思うけど、どんな人に魅力を感じるのかってのはあんまり一貫性がないよね。強いて言えば、すごいっ！！ ってことくらいかな。どうしてそうなるのかっていうとそれは、人は、自分の理想を体現している人に憧れるからだって思うのです！」

自分の目標を達成している人がいたら、その人のことをすごいと思う、魅力を感じて、憧れる。

それがカリスマ。

「でも理想ってのは、叶わないからこそ、現実になりえないからこそ理想であるわけです！ それに、皆が憧れるには、皆の理想を満たしていないといけないといつてことになっちゃう。これは、ちょっと無理だよね？」

不可能と想定されているものを達成する。それもひとつだけでなくいくつも。

それは、マンガの世界、空想の話だろう。現実にはありえない。「それでも実際に、カリスマを持つている！ このひとはすごいっ！！」って言われている人は存在するよね。それはどうして？」

確かに、よくテレビとかでカリスマって紹介されている人がいるけど、その人たち全員が達成不可能な理想の体現をやつて見せたとは思えない。

「それはね、そういう人たちには魅せる力があるからだよ」

魅せる力、それはどういうものなんだろう。

「もちろん、努力による実力がないとただの大口のペテンシになっちゃう。だからそういうのはあるんだろうけど、それはあくまで必要条件。それだけじゃ足りない、不足です！ それで、そこに足されるべきものは、自分を理想だと思わせる力だと思うんだ！」

自分を理想だと思わせる力、正直まだよくわからない。

「それは平たく言つちゃえば、演技力とでも言つのかな。人にそうと思わせるように振舞うこと。聞こえは悪いけど、これはぜんぜん悪いことじやないし、すごいすぎるぐらいすごいことだよね！！」

演技とか言わると何か”嘘”のみたいなイメージをもつけ、それは違うってことなのか。

「それをやること、何よりも自信が必要！ 自らを信じる自信が、自らの力を信じる自信が、自分がカリスマを持っているところの自信が」

「カリスマとはそれを演じる自信。能力を持っている上で、それを演じるための、不敵すぎるぐらい素敵な自信が必要。・・・えっと、こんな感じでどうかな？」

正直、まだ整理できていない。彼女が言つた事を理解しきれていないう自分がいる。

今僕が感じているのは、彼女のカリスマ性。人を引き込む力。これも、彼女の自信でみたまるものなのだろうか。自信があるからこそ、引き付けることができる。

「みんな、そんな難しい顔しないでっ！ わかり難かったかな？ 今日はもう終わりにしちよ。」
「ううう」とは夜布団に入つてから、ゆっくりと時間をかけて考えればいいんだからさつ・・・

今この場でこれ以上考えても、ますますわからなくなるだけな気もする。祭さんの言つとおり、リラックスした状態で少しずつ考えることにしよう。

「それにしても疲れ切ったね！ 一日に四題もの命題について考えるなんて、ピクニックでもなきゃやつてられないよ！ 何かお菓子食べたいな、白ちゃん、チョコレートとかって持つてきてるよね？ 疲れた頭にはチョコレートが一番！ 一番はかりとどうかな？」

あれだけ語り倒してもまだそんなにしゃべる元気があるのか。

これぞカリスマ！

それからは普通のピクニックの様に、お菓子を食べたり、他愛も

なご会話をしたりで夕方までくつろいだ。

「そろそろ帰る時間ね。日が暮れてからの坂道は危ないから、そろそろ帰りましょう」

あと一時間もしたら田が沈んでしまいそうな赤い空を見て、幻はそう言つた。

「そ、そうですね。ではそろそろ片付けましょうか」

「そうだね、帰りは下り道だからそんなに疲れはしないけど、暗くなつてからは危ないからねつ！…」

「それじゃあ、帰りますか」

四題命題、由さんの思考、祭さんの手法、今日また由さんのことを学んだ。

『本音と建前』、『それぞれの常識の違い』、『自由とは何か』、そして『カリスマとは何か』。これらの命題からもたくさんのこと学んだ。

でも、一番の収穫は、僕がまだまだアマチュアなんんだと思い知つたこと。まだまだ、彼女たちのステージまでたどりつけない。そんな苦い自覚を胸に抱き、カリスマを持つ彼女たちとともに、いつもの町へ、日常へ帰つていいく。

9 (四題命題その四) (後書き)

これで四題命題は終わりです。

次回からは、またストーリー編を少し多めで投稿したいと思います。

最後まで読んでくださった方、ありがとうございます。

主導権、何それ？

午前九時三分前。僕はもはやおなじみとなつた公園で、あのを待つてゐる。

ちなみに、夜中に降つた雨のせいで今朝のランニングは中止だつたので、今日はまだ、あの人があつていい。

十一月も中、ころになり、少しずつ冬が近づいてきている。こうしてじつと立つてゐると、体中でそれを感じる。

少し冷たくなつてゐる手をこすりながら、どんなものがいいかなと考えてゐると、待ち人が來た。

「お待たせ！」時間内に來たつもりだつたけど、もしかして遅れちゃつた？

「いいえ、ぴつたり時間通りですよ、^{まつり}祭さん」

待ち人とは祭さんのことだつたのだ。白いサルエルパンツに黒色の暖かそうなコート、道でそれ違つたら思わず振り向いてしまいそうな、普段の印象とは違つたおしゃれな服装だつた。

「それじゃあ行こうか！」

僕たちがこれから行くところ、それは駅前に先月できたショッピングモールだ。今いる公園からでも、歩いて二十分程度なので、僕たちは自転車でなく徒歩で行くことにした。

ショッピングモールに行くのは、当たり前だけどウインドウショッピングをするためではない。目的は僕のランニング用の靴を買うこと。それにどうして彼女がいるのかと云ふと、僕はそういつた靴を買ったことがないので、祭さんに一緒に來てくれるよう頼んだからだ。彼女は「はるつちとお買い物、楽しそうー」と言つて快く引き受けてくれた。

「のままショッピングモールへ行つて、無事にランシューを買つて、祭さんにはアイスでもご馳走して、そんな平凡ながらも楽しい

お出かけになるはずだった。

しかし実際はそううまくはいかない。といつか、そんな日常めいたことが物語に登場するはずがない。徒步開始三分後、まだ出発したばかりに、祭さんが何てことない風に、口を開いた。このノーマリイベントをアブノーマルにひっくり返してしまつぱいの台詞を。

「やうえばや、今日わたしあるうちのお買い物に付き合つてあげてるじゃない。それで、はるひやはわたしに何をしてくれるのかな？」

「ん？ いまなんて？」

彼女はそのかわいらしさに瞳で、とてもわくわくしながら、そう聞いてくる。

これは、アイスをおいとむとか、そんなありきたりなものじやあ満足してくれない顔だ。むしろ怒るかもしれない。

・・・。どうじよ。

「何をしてくるのかな？？」

この場合もつともふさわしこのは、彼女を怒らせなこもので、かつ本当にほやらなくともいこことだ。はるひやめじゅーいー！

とか言われるものが望ましこ。

「・・・どうしたの？」

「僕のこれから書つことがあまつにこじとなので、溜めが必要なんです」

「ええ！ それはすばらしくね！… わくわく

まずい、とつさに書つた悪手で事態をますます悪くしている。これ以上黙つていても、現状が良くなることはないか。

しかし、僕のひらめいたアイディアは今のところ一つ。そしてそれは、思いつくと同時に「ミニ箱行き撃つた代物だ。でも、背に腹は変えられないか・・・

「祭さん！…」

「な、何でありますか！？」

「僕と、一日デートしましょ」「…………」

「え、えええええ、ええーー。」

あれ、何か思つてた反応と違つ。それもだいぶ。

彼女は耳まで真つ赤になつて、口をパクパクさせ、白皙とのよつだつた。いや、このじつはやかめつけやかぶりはそれすら凌駕している。

「でーと？ でーとつてあの『デート』？ わ、わわわわ

「あの、嫌だつたら違うのにしますけど」

「違うのつー それで、それがいいかなつーーー 一日デート、楽し

そうだよーーー」

そりか？ セツとは思えないけど……

「デートに決まりー そつしょつ！ デートつていうなら、敬語は禁止だよつーー 破つたら罰ゲームだからねーー セレと呼び方も、今日は春くんと祭ちゃんだよーー デートなんだからねーー」

テンショングリオクターブぐらうい上がつた祭さん、いや祭ちゃんだけ。これはこまさら撤回できる雰囲気じやない。

かといつて、配達ですかと従えるほどのワソクのものでもない。

無理かもしれないけど、一応交渉してみよつ。

「えつ？ いや、それはさすがに・・・祭ちゃんといつのは、それにため口も、その、年上の方に失礼じやないかと・・・」

「敬意を示すつてのは、さんを付けたり敬語を使うことだけが正解じやないんだよつー その人がいいつて言つてゐのこ、無理やり逆らおうとするのは、それこそ無礼なんだよー 無礼はるつちだよーーー！」

「何だ、その理論は？」

その人がやつてほしい」とするものが礼儀……なのか？

そこまで断言されると、むしろやつちのまつが正しこよつな気がしてきた。

やつだ、一日ぐらじ、遊びに付き合つてもここじやないか！

それに、そうくるならこっちにも攻撃方法がある。

彼女はこの前、彼氏はいなって言っていた。あの口ぶりからすると、恐らく昔にもいなかった。気になる子とはどうなったか分からぬけど、休日に僕にかまつてるぐらいだから、うまくはいっていなのだろう。つまり、彼女はデート経験なんてないのだ。

それなら、田代から幻に鍛えられている僕のほうが経験量は上なはず。ということは、今日は彼女をからかい放題なのだ。彼女にうらみなんてのは全くないけど、からかえる時にはからかっておく。それが僕のポリシーなのだ。

「じゃあデートにしようか。祭ちゃん、手、つなげよう。

異性との手つなぎ、僕は確かにこれで悶絶した。

ならば、彼女もきっと慌てふためくはず！！

「うへん、それだとばれちゃうかもしれないし、こっちの方がいいよ！」

そう言つて、彼女は僕と腕を組んだ。

「んんっ！！」

当たつてる！！

彼女の決して小さくない、むしろ大きいほどの豊満のアレが、

当たつている！！

ちなみに道は全く込んでいない！！

「わわ、どうしたの！？ 頬、すごく赤いよ？ 熱があるのかも！」

そのまま彼女の顔が僕に接近。

これは・・・おでことおでこのやつ！！（動搖のあまり過去最低のネーミングをしてしまつたけど、今はそんな場合じゃない）

マズい、これはマズいぞ！

とつさに判断で僕は、彼女の両頬を手のひらで挟んだ。

そして・・・そのまま引つ張つた。

「うへー！？ ほ、ほうひはのはな？？」

「あ、ゴ、ゴメンなさいーー！」

僕はあわてて指を離す。

」の指には今もなお、あの見た目よりもずっとやわらかい、マシコマロとでも形容すべき、ふにゅっとした感触が残っている。これが、僕と祭ちゃんの初体験となつた。

・・・いや、ほっぺたですけど？

「びっくりしたよ～。わたし、男の子にこんなにこぶ触られたの、初めて・・・」

繰り返しますが、これはほっぺたの話ですよ？

彼女は僕につねられて赤くなつた頬をさすつていて。

「ところで、さつきも、ゴメンなさいっていったよね？」

急に雰囲気が変わる。決して声をあらうげているわけでもないし、怒つた顔をしているわけでもない。むしろ微笑んでいるぐらいだ。だけどわかる。彼女は、怒つている。

つねつたことには気にしていなかつたようだから、怒りの対象は「ゴメンなさい」か？

「最初に、敬語は禁止だよつて、言わなかつたつけ？」

「言つてた様な・・・」

「言つたよね」

「うん、言つてたね」

言つてました、と言つてやつになつたけど、今そんなことをしたら

何が起きることか・・・

「ゴメンなさいって、敬語じゃなーい？」

「え、いや

「違うの？」

違わないけど！ そうだけれども！

それでも、無理やりにでも敬語じゃなかつたことにして、敬

語を隠蔽しないと、何かが危ない！！

「あれは僕が小学校一年生ぐらいのころだつたかな。僕は当時はかわいい小さな子供で、親にお願いして動物園に連れて行ってもらつたんだ。僕はそこでサイを見た。サイを見るのはそのときが初めてだつた。でもサイってなんとなくじみだよね、だから僕はそれをよ

く見ずにカンガルー「一ナーハと走つていつてしまつたんだ。でもそれつて、かわいそつだろ、サイだつて生き物なのに、無視されるのは悲しかつただろう。それをさつき急に思い出し、『『めんな、サイ』つて思わぬ言つてしまつた。事の真相は、つまりはそういうことだつたんだよ』

「……どうだ、『まかせたか？』

「……」

「……、そだつたの？ わたし、てつきり自分に言われたことだつて思つちやつて、疑つたりして『ゴメンねつ！ わたしつて最悪だね……よく聞きもしないで春くんを責めたりして。春くん、もうわたしとお買い物に行く気、なくしちやつた？ そだとしても、わたしさ誤ることしかできないな……でも、ほんどうごめんねつ！』

「え？ えつと、分かつてくれればいいんだ、僕も紛らわしい言い方をしちやつたし。でもそだつて分かつてくれたならそれだけで十分だよ」

「……なんだらう、胸の奥をギリギリと痛めつけるものは。

「これが罪悪感？ これが良心の呵責？

「こんなことならいつそのこと、敬語使いました！ スミマセンでした！」 つて白状したほうが良かつたな……

「そいいえ、罰ゲームつてなんだつたの？」

「相手に好きなことを一つしてもらつてやつだつたんだけ、わたしは家を買つてもらおうかなつて思つてたんだ。一人暮らししてみたいし」

「……」

「あつぶねえ……もう少しで破産するところだつた。

「どうかそれつて、罰ゲームの度を軽く越していいる氣がするんだけど。

彼女は常識人だつて思つていたけど、金銭感覚は破綻しているよう

だ。

まあ、お嬢様だしなあ。

「そつか、残念だったね」

「つづん、春くんが約束を守ってくれたことが分かったし、そっちのほうが良かつたよ」

ものすごいわやかなことを言つてゐる。だめだ、気にしちゃ負けなやつだ。

「じゃあ誤解もとけたことだし、目的地へ向かおう。腕組んでいいよね？」

「うん・・・」

再び腕を組む僕たち。僕はもうそれに逆らわない。下手に逆らつて家とか交わされる羽田になつたら、もういろいろ終わるし。

とりあえず今分かっていることは、主導権は完全に祭ちゃんに握られたつてことだ。

僕が手綱を握れる、そつ思つていた時期が僕にもあつたとぞ…。

予想外はつきもの

今現在、僕の前には、ここに来る前には想像だにしなかつた光景が流れている。

何なんだ、これは?
どうしてこんなことに?

さまざまな疑問が僕の頭で、浮かんではまだ解決しないままに次に疑問に押しやられていった。

次から次へ湧き出る疑問、そのどれ一つにも答えを見出せない。彼女は、そんな僕の心情にまるで気づいていなく、今もこちらへさわやかな笑顔を見てくれる。

きっと、彼女はただ楽しんでいるだけなのだろう。そしてそれは確かに悪いことでもないのだろう。

ただ、僕にはついていけないだけで、僕には慣れていない出来事

なだけで、僕とは次元の違う世界の話だというだけで。

誰にも迷惑をかけていないし、もちろん法律やらなにやらの、社会のルールにも引っかからない。

ただひとえに僕の世界の、人間の小ささが、事を大げさに見せているだけなのかもしれない。

それでもやつぱり、目の前の現象は、僕のような人間には、異常としか言いようがない。

僕たちは当初の予定通り、ショッピングモールにたどり着いた。ここまでよかつた、予定通りのバツチリだ。途中にほんのちょ

つとだけ些細なこともあつたりしたけど、それを織り込んでよくできているほうだと思つ。

「H.I.J.がショッピングモールが。想像してたよりも大きいんだね。それで、靴屋はH.I.J.にあるんだろう？」

「あそこに大きな地図があるよー。あそこで調べてみましょーう！…」
祭さんの提案通り、入り口付近に設置されている地図を見に行つた。

「靴屋は一階にあるんだね。後は食事できるとH.I.J.とかショッピングモール。祭ちゃんはどこか見たい」といふある。

「はい！ わたしここ行きたいな！…」

彼女の指差した場所を見ると、そこは『服屋通り』と書いてある。名前の通り、さまざまなブランドの店が集まって一つのエリアをつくっているらしい。そのエリアは一階にあり、ここからそれほど遠くない。

「じゃあ行つてみようよ」

「うん！ 春くんに服見てもらこたいし…！」

「うつ言われたら、かわいい女の子に（年上だけど）頼りにされたら、誰だって断らないだろ？ それにこちらとしては買い物に付き合つてもらつている身なのだから、それぐらいの寄り道は認めるのが筋つてものだろう。

「うん、構わないよ。女の子の服つてあんまりよく知らないから、役に立てるかはわからないけど」

「春くんが似合つて思つた服なら、それが一番の服なんだよ！…」「うーん、それは違うと思つけど？ もしそうだつたなら、僕はファンションの仕事に就くべきだろ？」

この場合は、祭ちゃんにとつて一番の服なのだろうか。一番かどうかは例の“気になる子”の好みで判断するのが普通な気がするけど。一緒に買い物するほどの仲までは進展していないのかな。彼女が誘つて断る男なんて存在しないと思うけど…まあそれは彼女

の問題だから、僕があれこれ言つことでもないか。

「それじゃあ行こう、服探しの旅に！」

「祭ちゃん、服屋通りはあっちだよ・・・」

ため息をつきながらもこの時はまだ、これから起じる「」とをこれ
ぱつちも予想していなかつた。

「まずはここのお店に入ろうよーーー！」

まず？ ああ、ノットオシャレな僕には信じられないことだけど、オシャレな人は一度の買い物でいくつもの店をはしごするつて、聞いたことがあるな。彼女はスポーツ少女でかつオシャレガールでもあるから、お店はしじなんて普通のことなんだろう。

「はやくはやくう！」

「はいはい、わかつてるよ」

店は女性服専門店だけど、中には男性もそこそこいる。彼女はすでに見に来ているようだ。

祭ちゃんはどこに行つたのだろうと探していると、彼女はすでに何枚か服を持つていて。

「春くーん、こつちこつち！ 服持つてくれるとうれしいな！」

彼女のさりげなくもない『服持つて催促』をうけて、僕は差し出された服を受け取る。

「えへへ、ありがとね！」

お礼を言しながら、次々と服を選んでいく。選ばれた服にはあまり一貫性がないけど、どの服もそれなりにかわいい。どうやらファッショングセンスは確かなようだ。

「すみません、試着したいのですけど、いいですか？」

「はい、試着室はこちらになります」

服も十分に選び終え、店員に試着室へ案内してもらつ。ちなみに僕が現在手にしている服は計十五着。ちらりと周りを見てみても、どの人も三着から六着程度しか手にしていない。

普段から服をかうオシャレさんたちから見ても十五着といつのは異常なのだ。さつきからたくさんの人からじろじろ見られる。

「ひからでじうど。何か御用がありましたらお呼び下さい」

実際に丁寧な口調でそう告げる。きっと店を潤してくれるお金持ちだと思つてゐるのだ。

まあ、祭ちゃんはお金持ちだけだ。

「それじゃあ試着タイムだね！ どの服が似合つてるかちゃんと見てね！」

そう言つてカーテンを開める。数秒後には中から「ゴソゴソ」と音が。・・・

待つこと一、三分。お待たせと言つて彼女はカーテンを開く。

「どうかな？ 結構かわいいって思つたんだけど」

中からは胸元にレースのついたワンピースを着た女の子が現れた。正直、想像以上にかわらしい。

今日着てきた服とはタイプが違つたから、似合うのかな？ なんて思つてたけど、そんな心配は無用だつたようだ。

忘れがちだけど、彼女は元からかなりかわいらしい。それに加えて、プロポーションもかなりのものなのだ。

「・・・・」

「ど、どうかな？」

「似合うんじゃないかな？」

「そう？ ありがとう！ ！」

素直にかわいいといつのは恥ずかしいので、少し濁してそう答えた。

「それじゃあ、次の服にすぐ着替えるから、待つてね！」

ここにいたつてもまだ、かわいい女の子がかわいい服を着るのを見つけるだけなら、むしろこっちがうれしいぐらいだな、なんて考えていた。

一時間後。

「これとこれも下さい！」

依然として買い物をしている。彼女は次々と服を買つている。僕は少し疲れてきたけど、女の子の買い物はこんなものなんだろう、と我慢していた。

一時間後。

ここが冒頭のシーン。シーンというか、僕の思考だけ。ちなみに現在状況は、五軒目の店で服を買い終わったところだ。彼女はすでに十着以上の服を買つている。どうやら本当に気に入つた服しか買わないようだ。

「もう結構買つちゃつたなあ。にもつもいっぱいになつちやつたね」「もうそろそろいいんじやない」

本当にもう終わりにして欲しい。そう願いながら提案してみた。

「そうかなあ？ もうちょっと買つてもいい気もするけど」

まずい、これ以上は僕のヒットポイントが持たない。どうにかしないと・・・

「祭ちゃん」

「ん？ なに？」

「服を買う、自分を着飾るものを買う。それは確かにいいことだ。服は人の外見を着飾つてるだけだっていう人もいるかも知れないけど、それは違う、服はそれを選んだ人の内面も表しているんだ。つまり服とは、その人の外見と内面をあらわしてしまつ、だからそれに気を使うことはいいことだ。だけど、今祭ちゃんに本当に必要なのはそれじゃない。そういうの？」

「いま必要なもの？ それって、なにかな？」

「それは、昼食だ！！」

「え？ ご飯？？」

「そう、服はあくまで自分を飾るもの。つまり、服を着る人、祭ち

やん自身が万全の状態じやないとその効果も十分に發揮できない。

「いま、お腹がすいているだろ?」

「あ、確かにしている。服選びに夢中になつてたからぜんぜん気づいてなかつたよ!」

「ということは、次はどこに行けばいいのかな?」

「『飯だねつ!』

「……」

やつた。何とか『飯に誘導できた。

これ以上の疲労は僕を爆発へ導くかもしだれなかつたから(嘘)、本当によかつた。

「じゃあ『飯にしようか!』でもちょっとだけ待つてね、荷物取りに来てもらひつちやうから」

荷物?

そういえば僕は今、かなりとまでは言わなくとも、そこそこの量の荷物を持っている。

でも、取りに来てもらひつて、どうこいつことだろ?・

彼女は携帯電話を取り出して、電話をかけた。

「あ、もしもし。荷物を取りに来てもらえますか? あ、はい、今いる所は・・・」

電話相手に現在位置を伝え電話を切つた。

「三分で来るつて! ちょっとトイレに行つてきていいかな?」

「あ、うん」

トイレに行つてしまつた。ということは、僕が荷物を渡せばいいのだろうか?

誰が来るのかわからないから緊張するな・・・

三分後。彼女はまだトイレから戻つてきていない。

そして、僕の前に一人のメイドが立つていて。

「お久しごりです、春様。祭様のお荷物は私が家に運んでおきます」

「あ、はあ・・・」

突然のメイドに対応できるほどに僕のレベルは高くない。じぶんもどろな返事をして、なんとかこの場をやり過ごす。

「それでは、お嬢様との『トーク、お楽しみください』

きれいなお辞儀をして、彼女は去っていく。

ほかの人からトークとかいわれると、少し恥ずかしいな……

「お待たせ！ メイドさんに荷物渡してくれてありがと」
メイドさんが去つてから、メイドの語源を考えているうちに彼女が戻ってきた。

語源はわからなかつたけど、たぶん外国語だ。う。 そうあいまいな結論に落ち着いておこづ。

帰つたら調べよつと想ひながら、おもろく忘れてしまつていいだらう。

「それじゃあ、待ちに待つたご飯にレッシィ『トーク！』

待ちに待つたのは僕だけだ。まあ無駄口はたたかいでおこづ。これじゃあ靴屋までたどりつけるかなあ、なんて思つたりもするけど、とつあえず昼食だ。

これからは憂いよりも今食べることを優先して、レストランへ向かう。

しようがないよ、だつて人じやん？

幸運は生まれつか?

僕たちの当初の目的、『ランニングシューズを買つ』は驚くほどあっけなく終わった。

時間にしてわずか十五分。祭りちゃんの”ついで”のお買い物の何分の一だろうとも思わなくもないけど、僕の想像を絶する幸運を経験した身としては、そんな小さなことを言うつもりはない。

ここからは、僕の幸運自慢になってしまつけど、お付き合い願いたい。

「靴屋さんはここだね！」

昼食も食べ終わり、現在時刻は一時十二分。本当は靴を買つてから昼食を食べ、そのあとはショッピングモール内をふらふらするつもりだったけど、まあこれもこれでいいだろう。少なくとも靴は買えそうだし。

「春くんは靴をいくつ買つの？」

「ひとつだよつ！…」

ブルジョアと一般庶民の会話は、時々かみ合わなくなる。それがまた、面白かつたりもするんだけど。

「それじゃあ、春くんのお気に召すよつな、そんな素敵シューズを探し出そう！…」

そう高らかに宣言して、靴屋さんに入つていく。

靴屋さん、”さん”なんてついていると、なんだか狭い場所でひつそりとやつていて、お客様はみな常連客つて風なものを想像してしまうかもしねないけど、実際はそんなことはない。むしろ真逆といつても過言ではない。

正式名称は『ハピネス』で、看板には『靴はあなたを素敵な場所

へ導く『なんて洒落たことが書いてある、置いてある靴も買いに来る客も従業員さえも、皆が総じてお洒落なストアだ。

「」では、さまざまなブランドの革靴、スニーカー、ウォーキングシューズがあり、スポーツ用のシューズなんかも豊富なジャンルをそろえている。もちろん、お田舎のランニングシューズもある。

こんなたいそうな店を”さん”なんてつけて呼んでいる祭ちゃんのセンスは、やっぱりどこかずれている。

「これとかいんじゃない？」

祭ちゃんはさっそく一足の靴を持ってきてくれた。まだ入店してから何分もたっていないけど、祭ちゃんのオシャレ嗅覚はすでに獲物を捕らえていた。

さきほどは彼女のセンスがずれていると言ったけど、なぜかファッショングループに関しては例外なのだ。分野別ナンセンス（？）という奇妙なスキルの彼女の魅力のひとつだつたりする。

「これこれどうかなつ？」

僕に手渡してくれた靴を見る。それは一つ田にして、カラーもフオームも僕の好みな、直球真ん中ドストライクなシューズだった。

「」、これは・・・

驚いてみせる。みせるというか、素直に驚かされた。

「格好いいデザインだよね！」

念のため、サイズを確認してみる。

「えっと、これがサイズかな？」

何度も確認しても、サイズはぴったりだ。

イカした靴だけどちょっと大きいじゃん！！ 見たいな落ちを恐れていたけど、どうやら今回はイタズラの神様のお田にぼしがあったようだ。イタズラの神様に田をつけられている僕としてはうれしい限りだ。

「これってどこにあつたの？」

「 いじりじりじり！」

そう。僕にはまだ確認しなければいけないことが一つある。それは・・・

「 ここにおいてあつたんだよ！」

彼女の指差すところは、ランシュー・ニアのお買い得ゾーン。ここにはセールになっているものがあつた。セールゾーンに張つてある広告を見る。

『衝撃の大特価！！ ハピネスの創設者の誕生日記念で幻の九十パーセントオフ！ 対象商品はここ、注目の品ゾーンのみ！ 早い者勝ちです！！』

・・・。創設者サンクス！！ ハッピーバースデー！！！

商品がいくら気に入つても、最後の一つの閑門を潜り抜けられなければそれを得ることはできない。その閑門とは、そう、値段だ。こんなことを言つとなんだか小さな人間だと思われるかもしれないけど、値段つてのは重要だ。

なんたつて、このナイスな靴との出会いをラッキーイベントにするか、はたまた笑い話にするかは、この靴の値段、プライスが握つていたのだから。

「 どうかな？ もうとつと違つのも見てみる？ とりあえず、その靴はもどしてくるね！」

僕の靴を受け取ろうとする彼女の手を、僕は空いている手で受けた、そのまま握手した。

「 え？ ど、どうしたのかな？ 急に握手なんて・・・」

「 いや、これにしよう。これに決めた！！」

「 ん？ これつて？」

「 僕が今、手にしているものさ！」

「 わわ、それつて・・・ いいいつたい何に決めたのかな？」

「 これは、僕が貰い受ける！！」

「 ええ？？ そ、そんないきなり・・・」

いきなりつて・・・靴を買うのに時間が必要なのだらうか？まあ、ここはもつともな理由でも言って、さっさと買ってしまおう。

「確かに出会ったのはついたさだ。だけど、僕はこれを一目見てほしいと思つたんだ！」

「ほしい？？・・・。ってあれ？ つこせつときっ。」

「正確には五分前だけど」

「？？？ 何の話しているの？」

「もちろん、このランシューさー！」

とたんに、さつきから赤かつた彼女が、耳の先まで真っ赤になつた。

どうしたんだろう？

「あれ？ どうかしたの？」

「へ？ あ、ううん。なんでもないよつ！！」

あからさまに何かをごまかしているけど、本人がなんでもないつて言うなら、下手に聞かない方がいいのかもしれない。

「それじゃあこれで決まりつてことで」

「う、うん！ 即断即決、男前だねつ！！」

僕は最後のセール品であつたこの靴を持つて、会計まで行く。今の気持ちは、ハッピーの一言に尽きる。

「お会計は一千百円になります」

本来なら一万千円！ ほほ二万円引き！！

少し冷静さを取り戻した頭は、この店の経営を心配し始めたけど、きつとトップの人間が、そんなことどうでもいいレベルのお金持ちなんだろうなあ、なんて思つておこづ。

「本日商品をお買い上いただいた方には、クジを引いていただいております。よろしかつたら彼女さん、いかがですか？」

「クジ？ 面白そう！ 春くん、私が引いちゃつていいかなつ？？」

「うん」

「こいともさ！」

よく考えてみれば、僕にこんな幸運が訪れるはずがない。ということが、これは祭ちゃんの幸運が引き起こしたものだらう。だつたくじを引く権利は祭ちゃんにあるし、あわよくば何かいい商品でも引き当ってくれるかのしれない。その確率は間違えなく僕よりは高いだらう。

「えへと・・・これここでうかなかー！」

中から三角に閉じられた紙を引いた。店員さんに手渡して、確認してもうひつ。

「あー、い、一等ですー！　店内の商品どれでも一つ、無料で差し上げますー！」

「わあいー！　じやあじやあ、春くんが買った靴と同じのをもらひつかなつーー！」

・・・。わすがとしか言こよつがないな。

一千円ちょっとで一万円台の靴を一足。これを幸運といわすして何が幸運なのだらうー！

「えへへ、ねそらこの靴だねーー！」

じつして僕の靴選びは予想以上の安値で終わつた。

ありがとう、創設者の人！　ありがとう祭ちゃん！　ありがとうイタズラの神様！

今、僕の心中は、さまざまなものへの感謝でいっぱいだつた。

「次はどうに行こつか。それともまだよつと早いけれど、帰っちゃう？」

「あ、せひひとつこながつてよー。わたし、行ってみたことこりがあるのーー。」

「へえ、じやあそこに行こつか。ちなみに、どこに行きたいの？」

「えつとねえ、ゲームセンターなのだーー！」

ゲームセンターか。そつこえは祭ちゃんはゲームの上手だったからな。なまじお嬢様なだけに、そつこつとこには行ったことがないのかもしねない。

「ゲームセンターは一度外に出てから、別の入り口ではいるみたいだね。じゃあ出発！」

「オー！！！ あ、その前にけつと待つて」

「彼女は形態を取り出す。どうやら再びメイドわんを呼んだようだ。荷物はないほうが遊びやすこもんねー！」

「はあ・・・」

まあ、もう驚くのはやめよう。

疲れるだけだし。

何の特もないし。

リアクション放棄！！

・・・まあうそだけど。そんなことをしたら、僕の存在意義がなくなるからねっ！！

リアクションが存在意義な僕つて・・・。

そんなこと言つてゐる間に、メイドさんも到着。

「かしこまりました、お嬢様」

いかにもメイドっぽいことを言つて、再びどこかへ去つていく。どこで待機しているのだろうか。

「それじゃあ気を取り直して、レッジゴーー！」

彼女の号令で、次なる目的地に向かつた。

ゲームセンター、祭ちゃんの幸運のおかげで約二万円の得をした僕は（彼女は一足の靴を無料で得たが）、ここで代金をすべて請け負うこととした。まあ一人でゲーセンに行つたところで二万円も使うはずがないのだから、ここで支出をかんがみて十分得をしているのだけれど。

ゲームセンターでは、神プレイと称されるほどにテクニックに長けている人の周りには、いかなる場合でもギャラリーがつくものである。僕自身も上手な人を見かければ思わず足を止めてしまつし、その手さばきに見入ってしまうことだつてある。

このような現象は、別に僕に特有なものではないし、言つてみれば当たり前のこと、わざわざ言つほどのことでもなかつただろう。ただひとつ、ここで認識しておいてもらいたい。多くのギャラリーがそうであるように、僕は常に『見ている』側で、『見られている』側になつたことなんて一度たりとも無いということだ。

「スゲー、あいつらこれで何人抜きだ？」

「兄ちゃんのほうはそうでもないけど、あの姉ちゃんは相当の腕だ

名人だぜ」「ああ、見かけない顔だけど、ありやきつとどこかのゲーセンの有名人だぜ」

僕たちは格闘ゲームをやつている。一対一のタッグマッチ方式のよくあるゲームだ。どこにゲーセンにもおいてあるもので、僕自身もプレイ経験はある。

「次のチャレンジャーは誰だ？」

「あ、あいつらはメテオロックじゃねえか

「ついにプロ同士の戦いか！」

現在三十九連勝中。ゲーセンに入つてから一時間経過、使用金額

は百円。

「兄ちゃん、そこは防御防御！」

「とつあえずアンタは生き延びておけ、姉ちゃんはやひやひ相手を
〇するぞ！」

「つおおお、また勝利かよ、これで四十連勝だぜ」

連勝記録がまたひとつ延びた。そろそろ状況は理解してもらえた
だろ？ 田の心理描写に移り他のだけど、いいかな？

何だこれ！？ 何だこれ！？ 何だこれ！？

どうしてこんな状況に？

まあ？ 連発してみたけれど、実際のところ、この原因はとてもシ
ンプルだ。

祭ちゃんが神プレイヤーでした！ これだけだ。

彼女のテクニックは僕の不手際を補つても余りあるものだったた
め、僕たちはワンコインで一時間も遊び続けている。そしてそのテ
クニックは、周囲にギャラリーを形成してしまっている。

この感覚、皆に見られている中で連戦連勝を重ねた時に感じるこ
の感覚、僕は今日はじめて経験するものだが、これは思っていた以
上に緊張する。確かに僕が見られているわけではない、それは重々
承知している。皆の関心は祭りちゃんであり、僕はその隣にいる人
間程度にしか見られないだろうが、それでも緊張するものは緊
張する。もしかしたら、他人の力で、祭りちゃんの力で連戦連勝を
しているこの背徳感、居心地の悪さが『緊張』の正体なのかもしれ
ないが。

なんと言つてもいいが、とにかく僕はそろそろ限界だ。この居心
地の悪さにはもう耐えられない。この空間に、い続けたくない。

「祭ちゃん、そろそろ終わりにしない？」

「あれれ？ 楽しいのに、もう飽きちゃったかな？」

「そうだね、そろそろ違うゲームをやろうよ」

「うん、わかった！？」

聞き分けよく従つてくれる彼女。自分が注目されているにもかかわらず、それをあつさりと放棄する。いや、もしかしたら注目されていふことすら氣にしていないのかもしね。相変わらずの器の大きただ。

「えへ、皆さん。応援ありがとうございました！ 私たちはもう疲れちゃつたので終わりにします！ もうならへ」

ギャラリーに挨拶をする。111まで注目されてしまえば、終えるのも一苦労かもしれないな。

「えへもう終わり？」

「もつとやつてきなよ～」

案の定、まだ終わるな攻撃が来た。どう切り抜けようか・・・
「シャラッ！ 今日はもう疲れ切つたから終わりなの・・・」

・・・。何てことを。

ギャラリーの中には柄の悪いお兄さんもいたりするのだから、そういうことは避けてほしかつたのに。そしてやはり、イカツイお兄さんが一人、こちらに近づいてくる。この状況、どうすればいいんだ？

「いい加減にしろ！」

怒鳴つた。一同がしーんとする。

あれ？ 怒るられちゃつた？

「ゲームはやりたいやつがやる、やめたいやつはやめる、それがルールだろ？ お前らのわがままでこの人たちに迷惑かけるんじゃねえ！」

・・・じつやら怒られているのは、終わるな攻撃をしかけたお兄ちゃんたちだつたようだ。彼らは、山さんすみませんした！ と先ほどのお兄さんに謝つてゐる。

「まったく、氣をつけろよ！ お一人さん、こここの者が迷惑かけてどうもすみませんでした。連中も悪氣があつてやつたわけじゃないつてことは、わかつてください」

「いいよん、気にしてないし！ ！」

まるで極道のような展開に怖気づく」となぐ、さわやかに返事をする祭さん。度胸の大きさといつか肝の太さといつか、やつぱりすごいな。

「それじゃあ行こうか、春くん！」

「ああ・・・」

何事もなかつたかのように出しよつとする。

「また来てください、姉さん！」

「お疲れさまつした！ 姉さん！」

「そつちの兄ちゃんもまあまあだつたぜ！」

山さん一同はさまざま声をかけてくれた。祭ちゃんが敬語で、しかも姉さんなんて呼ばれているのはちょっと笑える。

ゲームセンターを後にして僕たちは喫茶店に入った。中はカラフルな色合いで、若い女の子やカップルが多く席を占めている。

僕たちは一番奥のテーブル席を用意された。店員さんにカップチーノとモカを頼んでひとまず落ち着いた。

「ふう、何か面白い人たちはかりだつたね」

「そうだね、姉さん」

「姉さんつて、からかわないで！ 兄ちゃん！」

二人は大笑いする。チチ任侠にもあの時は緊張したけど、今思うと笑えてくる。山さんは皆のリーダーだったのだろうか。

それから、店員さんが飲み物を持ってきた。僕は普段喫茶店に入らないので、これらの飲み物良し悪しはいまいちわからないけど、たぶん普通つてやつだ。

飲み物を一口飲んでからはじめらぐ、今日のこと、今までのこと、他愛もないこと、いろいろとしゃべつた。祭さんとの会話は面白いので知らず知らず時間が過ぎていった。

おしゃべりにも一区切りついて、彼女は座つたまま背伸びをした。

これまでの会話に終止符を打つよう、大きく大きく、背伸びをした。

そして、両手を広げた状態で口を開いた。

「ふう、今日の『デート』もこれで終わりかな」
祭さんが手をパチンとたたく。まるで魔法が解ける合図かのよう
に、これで終わりだというよう。

「『デート』はるっちは楽しかった？　わたしは結構楽しかっ
たよ！」

いきなりのことに対し驚いているけど、終わりといつたら終わり
なのだ。それに順応しよう。

「僕も楽しかったですよ。祭ちゃん、あ、すみません、祭さんの意
外な一面もいろいろ見れましたし」

魔法は解けたのだから、彼女はもう祭さんなのだ。

「えへへ、そういうてくれるとうれしいにゃ」

彼女は飲み物を少し飲んで、それからまた口を開く。

「ところで、さ、ちょっと聞いておきたいことがあるんだけど・・・

「？ええ、いいですけど」

「はるっちはてさ、わたしのこと嫌いかな？」

「えっ？ぜんぜんそんなこないんですけど、そんな風に思わせるこ
としましたか？」

「ううん、ただ聞いてみただけ。聞いてみないとわからないことつ
てあるかもだし。じゃあさ」

彼女はそこでいったん口を止める。

「その前に、店出よっか」

僕たちのカップにはもう何も入っていない。今出るのは、状況と
しては自然だけど、会話としては不自然だった。

店を後にして、彼女は歩き続けた。僕もその後をついていく。
二人の間に会話はない。何となく話しかけられなかつた。

「うん、ここでお話しようか！」

そこは、あの公園だった。僕たちが毎日ランニングを行つていて、今日も集合場所にした公園だ。

彼女は公園の端にある、屋根つきの休憩場所に向かつていった。時刻は午後六時、もう十分に暗いので、そこには誰もいなかつた。

彼女はテーブルを挟んで、僕の向かい側に座つた。ここからだと、暗さのせいでも彼女の顔がよく見えない。そんな中で会話は始まつた。

「それじゃあ、さつきの続きをだけ、はるつちはわたしのこと、好き？」

「んー・・・えっと、好きですよ。祭さんと話していると面白いし、

毎日お世話になつていてるし

そんな当たり前のことをして聞くのだろう。嫌いな人と好き好んでかかわるほどに、僕は変わつた人間ではないのに。

「そつか・・・そういう好きかあ・・・」

彼女の表情はよく見えない。

「じゃあさ、わたしたち、これからも友達かな？」

「ええ、当たり前じゃないですか、そんなこと」

僕は笑つてみせる。彼女の表情は見えないけど、きっと笑つているだろう。

「・・・うん、わかった。これからも友達、だね」

彼女席を移動する。僕の隣へと席を替えた。ここからならと、彼女の表情はよく見える。

彼女の表情は微笑だ。しかし、その奥に何かがあるような、そんな微笑に見える。

「一分だけ、いいかな」

彼女は僕に全体重を任せて、寄りかかつてくる。僕に抱きついている上体だ。

正面と正面からの抱擁、僕は驚きながらも、何かを口にしようとした。しかし、それはできなかつた。

彼女は泣いていた。僕に泣いているのを気づかれないように、声

を抑えて、しかしそれでも僕には聞こえてしまった。
どうして泣いているのかはわからない。だけど、そんな彼女を引き離そうとは思わなかつた。

そして、彼女は僕から離れた。

「えへへ、ごめんね。昨日読んだ本のラストを思い出したら、なんか涙が出てきちゃつた。でももう大丈夫だよっ！ 間渦祭、元気だけがとりえの女の子、もう回復したのでありますっ！－！」

いつも通りのさわやかな笑顔。いつも通りだからこそ、逆に気になる。

彼女の言つていることはたぶん違う。彼女の泣いた理由はわからないけど、きっとそんなことではないだろつ。それでも、ここは彼女の言葉を信じておいたほうがいいのか。

「ああ、なんか心の中のもやもやしたものがすつきつしたよ。そろそろ帰ろっか！」

祭さんは立ち上がつた。僕も立ち上がる。

「それえじやあ、また明日ねっ！－！」

陽気に手を振つて、彼女は走つて去つていいく。僕もそれを見送つてから、ゆっくりと歩いて帰つていく。

無視する彼女の攻略法

今日は隣町の図書館まで散歩だ。徒歩一時間、自転車を使えばもつと早くいけるけど、あえて歩くことに意義がある。歩いていくことで普段見えない風景が見えてきたりする。それに、誰かと一緒に行くときは、歩いて行く方が会話とかもしやすいしね。

「あー、えっと、それにしてもいい天気だね！」

「・・・・・

「いい天気の日に散歩をすると、体の中の空気が入れ替わる感じがするよね！」

「・・・・・

「今日は付き合つてもらつて悪いね。疲れたりしてない？ 少し休む？」

「・・・・・

「・・・・・。先ほどから一人会話が続いている。ここまで無視されると、むしろすがすがしいぐらいだ。

当然だけど僕は今、二人で歩いている。決して一人演技ではない！久しぶりに一人で話したいと思って昨日の夜に連絡したんだけど、返信は空メールだった。それをどう受け取ればいいのかわからなかつたけど、とりあえず集合時間と場所を送つておいた。

そして今日の朝、一応集合場所に行つてみたら彼女が来ていた。こないかと思ったよ、って感じで話しかけたらなんと、無視されてしまつた。

どうして無視されているのかは、思い当たることがひとつあったので怒るわけにもいかず、どうにもこうにも状態になつた。

とりあえず彼女が僕についてくる意思があるのかを確かめるために、イエスならジャンプ、ノーならステイつて言つてみたら、ぴょんぴょんとジャンプしてくれた。どうやらジェスチャーはしてくれたようだつた。

無言でジャンプをしているのはそつとソーシャルだつたけど、そんなことをいじつても仕方がないので、イエスの意思を受け取り、図書館へ出発することにした。

それから現在に至るまで彼女は一言も発していないのだ。いないのだ・・・。

彼女を反応させる方法はあるにはあるんだけど、できればそれは最後までとつておきたい。なんか恥ずかしいし。

「そういえば、光さんって画家なんだつて？ あの人、ぜんぜんそんな雰囲気じやなかつたけど、人は見かけによらないんだねえ」

「・・・」

「画家にアスリート、後は料理人兼演劇役者、お父さんが作家でお母さんはその読者とアドバイザー、本当にいろんな分野に精通した家族だよね。あと知らないのは鞆さんか、あの人も何かやつているの？」

「・・・」

『・・・』の数が減つて『・・・』沈黙の反応さえ少なくなつているのか！？ このままではまずい、だけど、まだあの手は使いたくないなあ。

「最近はあんまりあつてなかつたけど、何かおもしろいこととかあつた？ 僕はこの間、駅前に新しくできたショッピングモールに祭さんといつてきたんだけど、もうあそこには行つた？ もし行つてなかつたら、映画とか見に行かない？」

「・・・」

なんか変な風になつてる！？ ロロンだつけ？ どうこう意味で使つているの？

ていうか、会話で質問を無視されると地味に傷つくな・・・。僕のガツツもそろそろ限界だ。

いや、負けるな、僕！ ここで負けたら終わりだぞ！

「そういえば、読書つて結構してたよね？ 最近はどんな本読んでるの？ 僕は白カバ派にはまつてゐるんだけど。あの時代の小説つて、

今とはぜんぜん違う背景で書かれているのに結構共感できたりするよね。時代は変わつても人の心は変わらないってことなのかな??」

「

ついに無反応!? 無反応って・・・。そんなシユールな返し手があつたとは。もはや返してすらないけど。

それに白樺しらかばと白カバのボケも完全にスルーされていりし・・・。

何かこれじゃあ僕がただの馬鹿みたいじゃないか。

もう彼女の耳に僕の言葉が届いているのかすら疑問だ。相手の話すら聞かないとは、これ以上ない必殺技だな・・・。

当たり前だけど、会話って相手の話を聞かないと成立しないんだよね。

といつことは、もし彼女が本当に僕の話を聞いていないとしたら、これは会話と呼べないのか? それなら何だろう、何ていうものなんだろう・・・。独り言?

それに勇気を出してハテナ×2なんて荒業を使つたのにそれについての言及も一切なし、まさに鉄壁の無視だな。

しかたない、ここまで来たら、奥の手を使うしかないか・・・。

本当に嫌なんだけど・・・。

「そういえばこの間、一週間前だったかな・・・、まあそれぐらいの最近の話なんだけど、夕食に家族で寿司を食べにいつたんだよ。僕と母さんと親父で出かけるのは月に一度の外食ぐらいなんだけど。そこでさ、すごいシユールな体験をしたんだよね」

一応彼女の反応を見てみる。

・・・。話を聞いているのかいののか、全然分からぬ・・・。

まあいい、聞いていると願つて話を続けよう。

「夕食時の寿司屋つてさ、三十分とか一時間とか、それぐらい待つじゃん? その日もいつもどおりの込み具合で、十名様でお待ちの磯野様」とか、そんなアナウンスを聞きながら待つてたんだよ。それで、シユールな体験つてのがこの後に起きたんだけど・・・。続きを聞きたい? イエスならスキップ、ノーなら一時停止でお願いし

ます！』

僕が『ま』の文字を言い切る前には彼女はスキップをしていた。
意思表示早っ！！

高校生の女の子がスキップしている絵は、・・・・・、かわいい！！
これは『女子高生』だからではなく、『彼女』だからかも知れないけど。まあ、そこはあいまいにぼかしておこう。

なんていつている間に、彼女がどんどんスキップで進んでしまっている！！スキップと徒步つて、こんなに速度が違ったのか・・・。
「あ、もうわかったからいいよ！ とまって～」

僕はあわてて彼女のところまで走つていく。ていうか、意思表示するならもう話しちゃえればいいじゃん！ つておもうのは僕だけでしょうか。賛同者は拳手をプリーズ！！

・・・・・はい、ゼロ人・・・・。

まあ、彼女を攻め落とすのももうすぐ。今僕がほしいのは、見知らぬあなたの拳手じゃなくて、彼女の返事なんだから、全然傷ついてなんかしてないんだからねっ！！ 男ツンデレはいらないか・・・。

そろそろ本題に戻るつ、もすでに若干手遅れだけど、このネタはオチを引っ張れるほどに面白いものでもないし。引っ張れば引っ張るほどハードルがあがっていくのがこの世の真理。

「僕は次々と呼ばれていく名前を、知り合いがいるかなあと想いながら聞いていたんだよ。なにしろこの辺じゃ何個もない寿司屋だしね。友達一家が来ても不思議じゃないし。そして桜さん一家が呼ばれた次に、それが起こったんだ。あー、『ほんごほん、『三名でお待ちのお客様、いらっしゃいますか？』、もう一度言おうか『三名でお待ちのお客様、いらっしゃいますか？』つて店員さんが言つたんだ」

その店員さんの声を真似て言つてみた。我ながらなかなか似ていたと思う。

「だいたいそうじゃん！！ うちとかもそうだし、何その待ち順無

視の呼び方！！ そこにいた皆がそう心の中で叫んだろうね、いや間違えなく。まあ当然誰一人として立ち上がらなかつたね。普通のひとならそうするよね。でも、店員の人ときたらまた性慾りもなく『お客様はいらっしゃいませんか？』なんていつているんだよ。います！ ここに並んでいる人皆お客様です！！ 僕とかもそうです！！！ そう言いたかった。そんなことを思つてているとさ、おもむろに二人のお客さんが立ち上がつたんだよ。そして、店員さんに何かを話していたんだ。皆がそのやり取りに注目していた。そして一、二分かな、店員さんがいきなり顔を真つ赤にして、こう言つたんだ。『失礼しました。三名でお待ちの、御客様、他の三名でお待ちのお客様はもうしばらくお待ちください』ってさ

・・・。どうだ、一般の人には、ん？ つてなる様なこのネタ。しかし相手が彼女の場合、これは特殊効果を持つのだ。

「・・・、フツ、フフ、読み間違えか！」

彼女は僕に突つ込みを入れた。ついに入ってくれた。

「ふう、やつと話してくれたね。幻

そう、もうだいぶ前に分かつていたと思うけど、本日の散歩相手は僕の彼女、間渕幻まぶきだつたのだ。

無視する彼女の攻略法（後書き）

ここから第三章です。第一章は導入。第一章が間淵家の掘り下げプラス祭編でした。

第三章ではまだ触れられていない彼女や影さんも登場するかもです。

最後まで読んでくださった方、どうもありがとうございました。
次話は週末投稿予定です。

スキルアップ

「ふふふ、たすがは春君。私に見込まれかけたことだけはあるわ」「まだ見込まれてないの！？」

それもショックだけど、あのつまらない話を賞賛されるのは何か嫌だ。馬鹿にされているような気がするから。

「さて、ヒロインのお姉さんとばかりイチャイチャしていた春君、図書館までは後何分かしら？」

「その、聞く人に誤解を与える呼称はやめろお！　僕をダメな奴キャラにしようとする気か」

あと、自分のことヒロイン言つたな。聞いてるこいつが恥ずかしくなつてくる。

「あらあら、これは失礼。こんな呼び方じゃあ、この話から読み始める人に間違つた印象を与えてしまわね。私としたことが……。まあ失敗は誰にでもあるし、それを次に生かすことが大事よね」「んんん。素直に間違え（本当はそこそこ正解）を認めてくれたのは助かつたけど、『失敗は成功の元』タイプの言葉を自分で言つのはアレだなあ……、言い訳じみて聞こえる。自分のミスに自分で

「ドンマイツ！」つて言つちやつやつみたいな。

「それじゃあ、間渦幻の姉、間渦祭まつりと、買い物と称して遊んでいた十坂春君。図書館まではあとどれくらいかしら」「…………あと五分くらいかな」

「だめだ。幻、しばらく見ない間にパワーアップしている……。

「これはもう、正面から戦うのはあきらめよつ。裏から隙を狙つて・・・つて、僕がコスイキャラになつてる！！

「これも彼女の罠か。だとしたら恐ろしい策士振りだ。戦略ゲームにでもはまつたのだろうか。

「そう、下手に抵抗しないのはなかなかね。それが正解な場合もあるわ。それじゃあ、これから私の姉、間渦さや靴とちょっとしたあれこ

れがありそうな春君。図書館の用事が終わったら、ビリするつもりなの？」

「フラグ立てた！？」

もしくは鞆さん（あの人のことはあまりよく知らないけど）とのデート的な展開を先につぶしたのか？ 身内にネタをつぶされるとは・・・。

「ああ、えっと、ビリじょうつか。とりあえず、昼食はビリかで済ませたいね」

「もしくは、昼食は私の家でつて手もあるわ。そうすれば、あなたも白姉さんとおしゃべり出来るだらうし、おこしごい飯も食べられるし、いいこと沢山じやない？」

「ヒロイン以外のキャラとばかり遊んでもらえませんでした！ もう許してください！」

腰を直角に曲げるような礼。こんな謝り方、今まで決行したことなんてないし、おそらくこれからもないだろ。

「ふんっ、そんな簡単に許してもらえるとでも思つているの？ あなた、もし三人で無人島に行って、自分だけ無視され続けたらどういう気持ちになるかしら？」

「えっと、傷つきます・・・」

「その傷の一十パーセント落ちが、私の今の心情よ

「・・・うん？」

二十パーセント落ちつて・・・。自分の心情を正確に表現したつもりなのだろうか。そもそも無人島での傷つてのが、あいまい極まりないんだけど。

「・・・何よ？」

「いや、えっと・・・」

「とにかく、あなたは私に取り返しのつかない傷をつけたの

「はあ・・・」

「責任、取つてよね・・・」

「何か雰囲気変わった！？」

自ら空氣をやわらげてくれたのか？ いかにもラブコメっぽいその台詞、現実世界で恥ずかしげもなく言える人間がいたとは……。「で、責任とつてくれるの？」

「あ、えっと……、僕にできる範囲でなら……」

「じゃあ、……、ん」

「ん？」

彼女は手を、僕の方へ差し出してきた。何だらつ？ 仲直りの握手か？

「まったく、察しが悪いのは病気なのかしら？」
ちょっと待つて、シンキング中。

・・・

・・・・・

・・・む、何かひらめいた！ かも？

これ以上待たせるのは得策じゃない。これでいくしかないっ……！

「お手をこちらへ」

「ん」

彼女の手を取つて、そしてその手を持ち上げる。そのまま僕の顔の前まで持ち上げて、そのきれいな手の甲に、キスをした。

「・・・はい？」

「これが、僕の気持ちさ」

「・・・普通は手をつなぐ、でしようが……」

「あれ？」

あ、ちょっとタイム。あれ、やつちやつたー？ 顔がどんどんあつくなつてきた。そうか、冷静に考えてみれば、彼女の手を握つてそのまま歩き出すつてのが正解だつたか……。昨日読んだ本の影響が出てしまつた……！

「でも、キスもちょっとよかつたわよ……」

「え？ ごめん、よく聞こえなかつた。もう一度言つてくれる？」「……でも、菊もちょっとよかつたわよ……、つて言つたの

「よ

「何その脈絡のない感想発表！？ 何で今いつたの？」

それに、さつきと何かが変わっているような気が・・・。いや、なんとなくだけど。

「小さなことを気にしないでくれる？ これだから は困るわ

「の中がなんだか気になるけど、それを聞いたら『小さなことを気にするな』ってループするつもりだろ」

幻との会話でレベルアップしている僕には、そんなまやかしは効かないぜつ！－！

「えつ・・・・。ひどいっ！－！ 春君、私をそんな風に思つていたの・・・」

突然モードが変わった幻。あれ？ 何か、本氣で傷ついているんだけど・・・。さつきまで、皮肉のやりあいみたいのをやつてたじやん！

僕のほうをキッとにらんで、田にまうつすら涙を浮かべている幻が、そこにいた。もしかして深読みしきた・・・。」の状況、一気に切り開かないとマズい展開になるかも。

「・・・おどきせい！－！」

「何よ、ひとでなし」

・・・・。どうやら、しばらく見ていない間に演劇スキルを身につけたようだつた。チャンチャララーン。

師匠はたぶん田さん。あの人も結構家にいるもんなあ・・・。

「あら、いつの間にか図書館に着いていたよつね。それじゃあ中に入りましょうか」

本当にいつの間にか、目的地に到達していた。

・・・・。何だらう、このぐだぐだ感は・・・・・。

行きと帰りがほぼすべて

『図書館の用事』なんていつても、所詮借りた本を返して借りたい本を探して借りる、あえて言うなら本探し가一番の難関だけれども、それも予約をしてしまえばクリアする些細な問題だ。

そう、これは図書館と自宅の位置関係にも作用されるけど、一般的に言つてしまえば、『図書館に行く』において最も時間を要するのは、『図書館へ行くこと』なのだ。メインは『本』であつても、一番の苦労どこのは『そこまで行く』ということ。

つまり何が言いたいのかというと、僕たちの現在位置について。僕の用事は、もちろん図書館での事務作業などといった管理者側のものではなくて、本の貸し借りといった客的なもの。いや、この場合は本の借り借りとでも言つのだらうか・・・。

まあとにかく冒頭の通り、僕の用事もあつてという間とはいからくとも、都道府県の名前をすべて思い出して書くぐらいの時間ですんしました。

あれだけ引っ張った図書館には一切触れずに、それならいつたいお前はどこにいるのか！ そんな問い合わせがあったとして、・・・、あつたとするよ。

僕は、というより僕と幻は現在、間淵家に到着したところだ。図書館の近くには、高校生が遊べるような施設もたいてなかつたので、またしても約一時間の散歩を経て、やつと今、幻の家にたどり着いたのだ。往復に約一時間、図書館内に約三十分。・・・・・、
疲れた。

「ああやつと着いたのね。まるで一時間ほど歩いたのじゃないかつてへりこ、体中に疲労がたまっているわ

「それは運動不足だね。僕は十分走つたぐらいしか疲れなかつたよ」
六十歩行と十分間走、どちらがより疲れるのかは定かではない
けど、それを今から解き明かそう！　と思う気持ちが全く生まれな

い程度には疲れている。

「とりあえず家に入りましょうか。広い家ですが、嫉妬しないでね」「おいおい、僕をその程度の男だと思っているのかい？ 本当に広くあるべきなのは、家なんかじゃなくて心だつてことを幼少期から悟っていたこの僕が、そんな瑣末なことを気にするはずがないだろう？」

「本当に心が広い人はそんなことは言わないわ」

バッタもんは黙つてなさい、と幻。

しかし、無駄口の応酬もこの疲労状態じやあいまいちキレイがない。とりあえず間渾家で休ませてもらおう。

「ただいま帰りました」

「お邪魔します」

きれいに掃除されたきれいな玄関。『履物の乱れは心の乱れ』なんて言葉はよく聞くけど、その格言を信じるならば、この家の住人心はこの上なく清らかなのだろう。

自分たちははいていた靴もきちんと整頓して、居間へと歩いていく。

「あれ？ 白姉さんがいない。こんなことはいつ以来かしら・・・、珍しいこともあるものね」

「いやいや、白さんにだつてプライベートはあるんだから、家にいなくたつて珍しくはないだろ？」

確かに、僕が遊びに来るときにも、白さんは大抵家にいる。ちなみに光さんと鞘さんはめったに見かけない。ここは彼女らにとつても自宅なのだから、まさか帰つてこないことはないだろ？が。僕がお邪魔している時間よりも遅くにいつも帰宅しているのだろう。

「どうやらみんなどこかへ出かけてしまつているようね」

「ふうん。そんなこともあるんだな」

「私たち、ふたりだけね・・・」

「何で過ちを犯すモードー？」

「今日、親遅くまで帰つてこないんだ・・・」

「連発！？」

「大丈夫、緊張、してないから・・・」

「なんの話でしようか！！」

三連発・・・そういうえば演技スキルも身につけたんだっけ、台詞だけじゃなく、表情や口調、それに仕草もプラスされていて、こっちが緊張してしまってほどの腕前だ。

「まあ、冗談は置いておいて」

あ、元に戻った。

「とりあえず、お風呂どじ飯、どっちがいい？」

「へ？」

「それとも、わ・

「お風呂がいいです！」

彼女の台詞を最後まで言わせずに、かなり食い気味で言った。いいフレーズ阻止！

「そう、じゃあお風呂を掃除して、沸かしてきてもいいえる？ 私が昼食を作つておくわ」

・・・ああ、そういう意味だったのか。「お風呂どじ飯、どっちの準備をしたい？」という意味だったことにこもせらる氣づく。とか、これは気づくほうがあかしいと思つけど。

「それじゃあ、お願ひね」

彼女は風呂の位置と（屋敷なので道を聞かないとたどり着けない）掃除方法を聞いて、風呂へ向かうことにして。掃除方法を聞く限り、風呂も一般とはかけ離れたつくりになつていてるようだつた。

あれ、そういえば、幻つて料理できなかつたような・・・。

・・・・・・

仕方ないか。女の子に、料理代わつて！ なんていえるはずがないし。そもそも僕自身も料理はそれほどの腕前ではないし。愛情さえあれば何とかなるだろう、とあきらめるしかないな。

幻の手作りランチ、こんな唐突にそれが訪れてくるとは、予想だにしなかつた。

まあ、僕は任された風呂掃除をさっせと終わらせて、できるだけ早く料理の”手伝い”にいけるようになよ。そうしようついでに

どれが嘘！？

「・・・わお」

やはりこの家の風呂は、風呂といつよりは浴場というような、どちらも同じ意味なのだけれど、要するに大きかった。個人の持ち物がこんなに大きい必要があるのかは甚だ謎だけど、予想通りの規模だった。

しかし、僕が感嘆の声を上げたのは、別に風呂が大きかったからではない。いや、それにも驚きはしたけれど、それは時系列的に過去の出来事だ。

僕は現在、大きな風呂を掃除中、ではない。掃除はもう終えて、再び居間に戻ったところだ。おじき幻がどんな有機物を生成しているか、なんて思いながら居間に戻ってきたところというわけだ。

そして、僕が今驚いているのは、その手作り料理。

「どうかしら？ まだまだ白姉さんのようにほつまくいかないけど、一応口には入れられるかしら？」

そこにあつたのは、カルボナーラとマルゲリータ。パスタとピッタ。

『そんなの、誰でも作れるじゃん なに驚いてんの？』とか思つたあなた、どうか誤解しないでほしい。僕は別に、イタリア料理が物珍しいわけではない。大してリツチな家庭ではないが、それくらいのものは食べたことはある。

僕が驚いている理由はほかにある。料理における要素は？ 完成品、食材、調味料、料理道具、盛り付け、取り皿。それも確かに大事な要素だけど、もつと単純な、シンプルな答えがあるだろう？ そう、シェフだ。

驚愕の理由は、このありふれた料理を『幻が』作ったこと、作れていることなのだ。

「ああ、えっと、料理得意だったつけ？」

「得意が苦手かと聞かれれば、余計なお世話よ、と答えるわ

「イエス、オア、ノーでお願いします！」

「ふん、それはわかつていいでしょう。でも最近、白姉さんに料理を教えてもらつていたのよ。どつかの誰かさんが『料理作れる娘つて、最高だよね！』なんて言つていたから、ちょっと練つてみたのよ」

「ああ、結構前の、夕食会のときだっけ？ 確か白さんに向けていつたはずだけど・・・。というか、その前に、言いたいことがある。『そんな言い方は、断じてしていいない！』

「人権侵害とはこのことか！」

「あら？ あなたは千里眼でも持つていいの？ その言葉を私に言った人が誰だかわかるなんて、なんだか監視されているみたいで怖いわ・・・。それとも、まさか自分が言つたことだとでも思ったの？ ・・・うわあ

「・・・くう」

「なんて、『冗談よ。私があなた以外の男の人と話すことなんて、あるわけないじやない。いいえ、あなた以外の人間と会話をすることなんて、あるはずがないわ』

「スケールでかすぎつ！！」

「しかも、明らかに嘘を・・・。嘘というか、戯言にもなつていな

い。

「いいえ、本当よ。だつて私、自分と春君以外を人間と認めていいもの」

「その生き様はちつともかつこよくない、今すぐやめろおお」
「そんな人間、それこそ人間枠から除外されるわ。

「くすつ、『冗談よ。そんなこと信じているなんて、いろいろ大丈夫？』

「・・・」

いや、最初のほうは嘘だと思っていたけど、だんだん本当にそんなことを思つていていたのかと思つたよ・・・。勘違いでよ

かつた・・・。

「それより、どうかしら?」

それは、おそらく料理についてだらう。うん、これは素直にすごいと思つ。

「正直、びっくりしたよ。これは平均どころか、それ以上だよ」

「そうね。白姉さんは、どうやら教える才能もあつたようね」

ああ、短期間でこのレベルまで達したのは、幻の隠れたセンスのおかげかもしないけど、インストラクターの腕前も確実に作用しているだろう。

白せん、何気にオールラウンダーだな。あ、フリスビーは苦手だつたつけ。

「それでは、冷めないうちにいただきましょつか。ちなみに食後は『行動の責任は誰のものか?』についての討論をやるから、軽く考えておいてね。春君も命題になれてきたようだし、これからは質問に答えていく形で進めていくから」

「え?『漫画を読むのは無駄なことなのか』じゃなかつたつけ?」

昨日のメールには確かに書いてあつたけど

「あれは冗談よ」

「そこも冗談!?」

なんか、幻が『信じてはいけないキャラ』に変貌しつつあるんだけど・・・。

「どうして嘘なんてつくんだよ」

「だって、・・・、好きだから・・・」

「うつ・・・、って話がすり替わつていい!」

「言つたでしょ? あなたは大分命題になれたよつだから、次のステップに移ると。これからは事前の準備もなしよ」

「だったら、嘘の命題を送る必要はなかつただろ? 命題形式を変えるつて、メールすればすむんだから・・・」

「『あなたの命題ランクが上がつたので、これから命題のレベルもアップします』なんてメールが着たらイラツとしない?」

「イラシとするナビや・・・、それは文面の問題だろ？ はあ、もういいよ。こんなことで文句言つてたら、ランチが冷めちゃうし」「どうやら精神ランクも上がつたようね」

「イラシ・・・」

はあ、いちいち反応しているとこちが疲れてくる。でも、突つ込み役が僕しかいないし、これはもはや宿命なのか・・・。

「ふう、わかつたわ。これからは大事なことは電話で事前に伝えることにするわ」

「わかつてくれてよかつた。あと、『ふう』がなければもつとよかつた」

「それじゃあ、本当にそろそろこただきましょ。それではお手を合わせて」

言つたいことはこりこりあるけど、今は幻が作ってくれた手料理を食べることにしよう。言つたいこともその後言つけど・・・

僕も彼女に倣つて両手を合わせる。それでは食事の礼儀を。

「『いただきます』」

「「」おひそつをまでした」

幻の手作り料理の味、単純な料理としては可もなく不可もなくだつたが、幻のもともとの料理能力、それをかんがみればその評価はかなり違つてくる。なんて、偉そうに批評家ぶつてないで正直な感想を述べよう。

「おいしくいただきました」

「そう、それはよかつたわ」

幻は、自分のと僕の皿をまとめて流しへ持つていいこうとする。

「ああ、後片付けは僕がやるから、少し休んでよ」

「いいえ、春君だって風呂掃除をしてくれたわけだし、これは私がやるわ」

「じゃあ、ふたりで片付けようか。僕が食器を洗うから、幻はそれを拭いてよ」

「・・・わかつたわ、そうしてもらいましょう」

僕がやる！ って主張しても、幻はきっと自分の意見を曲げない。だつたら折衷案、二人の意見を取り入れたものが最適だ。

「それにも料理、本当に上達したよね。たぶん僕より幻のほうがうまいよ」

あまり公表していないけど、僕もそれなりに料理ができるのだ。まあ、『それなり』は超えない程度だけだ。

「私が両目を開ければ、こんなものよ」

「本領発揮つ！？」

なら料理ができないのも仕方がない。といふか、それ以外のことがでている時点でかなりすごいだろ。それと、もしかしたら気づいていないのかもしれないけど、目、割と開けてたよ。

僕は食器をスポンジで洗つて、それを彼女に渡す。彼女はそれを受け取つてふきんで拭いて、食器棚に戻す。こうこう『家庭』の仕

事を彼女とやるのは、なんだか、悪い気はしないな。

「これで最後だね」

最後に一人分の箸を洗つて、幻に手渡した。

「そうね、おつかれさま。飲み物いれるから、居間に戻つてて

「了解」

先に戻るよう促されて、居間にある上質そうなソファに座ることにした。

ふう、これでひと段落。飲み物でももらつて、少しくつぶやく。そして、その後には・・・。『行動の責任は誰のものか?』、それについては考えさせられることいろいろとあるけど、それよりも、命題形式の変更。会話をしながら命題をといていくことなのだろうか。

思えば、僕たちはいつも、どちらかが出題してどちらかが答えるといった、一方通行とまではいかなくて、ほぼどちらかが語り通す形式をとってきた。そう表現すると、なんだかそれが悪いことのように見えるけど、それは言うなれば発表、別に悪いことはない。

でも、今回からは発表が討論になる。それはつまり、会話をしながら同時に考え方もあるということだ。考えるセンスはもちろん、考え方をまとめる瞬発力が重視される。それも、話をしながら話を聞きながらの思考、当然集中力も落ちる。

この前のピクニックでの四題命題のさらに難易度が上がつたもの、と考えればいいのだろう。

「お待たせ。紅茶でいいかしら?」

幻が紅茶セットを持つてキッチンから戻つてきた。ここに座つてからまだ一分もたつてない気がしていただけれど、どうやらかなり考え込んでいたらしい。

「うん、ありがと」

「これくらい、土下座には及ばないわ

・・そりや及ばないだろう。

幻は僕の隣に座つた。ほかにもいくらでも座れる場所はあるのに、

それにこれから『命題』をするんだから対面しているほうが話しゃ
すいのに、隣に座った。それもピッタリと。

「こんなことでいまさら緊張なんてしないけど、心がまったく反応
しなかつたと言えば嘘になる。」

「さて、それじゃあ始めましょっ」

紅茶を入れながら、開始を宣言した。久方ぶりの命題の始まり。

「『行動の責任は誰のもの?』これが今回の命題。この命題は少し
曖昧だから、まずは具体例から入りましょうか」

確かに、僕が今回一番悩んだことは、命題の曖昧さ。いや、今ま
でも十分曖昧だったけれど、時間は与えられていた。厳格な定義は
なされていなくても、そこからオリジナルを考える猶予は与えられ
ていた。だから曲がりなりにも討論、いや演説は成り立っていた。

しかし、今回は下準備がない。オリジナルを考える時間がない以
上、具体例という導きがあるととても助かる。もちろん、土下座す
るほどではないけれど。

「たとえば、ある少年が万引きをしたとします」

「・・・、なんか嫌なたとえだな。でもこんな例を使うからには、
それなりの理由があるのだろ?」

「万引き、彼は万引きをしてしまった。このとき、この万引きの責
任は誰にあると思つ?」

第一に思いつくようなことは大体間違つてくるとこうけれど、そ
して今回もやはり間違つてているのだけれど、僕はつい反射的に答え
てしまつた。

「そりや、万引きをしたその子じゃない?」

「そう。でも、もしその子が万引きを悪いことだと知らなかつたと
したら?」

「・・・、それを教えた親が悪い、かな?」

たつた数秒で意見が変わつてしまつたけど、もしその子が悪を悪
と知らないのだったら、それを教えた親に非がある
と思う。」

「じゃあ、その子が万引きを誰かに強要されたいたとしたら？」

「強要した奴も悪いけれど、それに従つたつて言うのも・・・」

「なんだかよくわからなくなってきた。それに、誰が悪いなんて考

えるのは浅ましいことのようと思えてきた・・・。

「この具体例における行動とは『万引き』ね。その責任は誰にあるのかについて考えてみたけれど、その子の状況によって、また私たちの考え方によって、その責任者はこうこうと変わってしまうものね」

「いろいろと、本当にいろいろと変わつていく。逆に、その万引きの責任がない人がいよいよ氣がしてきた。」

「極論を言つてしまえば、その子供とかかわったことのある人には皆、責任があるといえるわね。その子とかかわった時に、万引きがいけないことだって教えることが本当にできなかつたのか、そう考えればね。そしてそのかかわった人にかかわった人にも責任があるといつても過言ではないわ。その人に、万引きが悪いことだつて子供に教えるべきだと教えていなかつたのだから。少なくとも、その子の背景を作つた人間は皆、責任者ね」

かなりスケールの大きな話になつてきたけど、屁理屈が許されるのなら、そうとも言える。

「さらによれば、その盗まれた商品、それが魅力的だつたことにも責任を見出せるわ。まあ、それを製作した方々は『とんだとばつちりだ!』といつと思うけど。とんだとばつちり、ふふふ」

「・・・。雰囲気がぶち壊しだ。もう慣れたけど。」

「でも、その万引きについて、本当に皆に責任があるのか?」

「そんなのは、所詮屁理屈じやないか。言いがかりといつてもいい。」

「ないわね」

「ないのかよ!」

さつきの持論はどうした! その発言の責任は自分にはないって

言つのか??

「落ち着いて、さつきのは少し大げさに言つただけよ」

「少し、じゃなかつたけどな」

「それならあなたに質問するわ。少年の万引きについて、その責任は誰にまであって、誰からはないの？」

「ううん。そう言わると難しい……。

「うん、その子供とその両親。いや、親に限らず、その子供を道徳的に導くべき人にも？」

「それって、つまりは社会。そしてその構成員、つまり皆つてことじゃないかしら？」

「あ・・・」

あれ？ 皆に責任があるといつのはいいすぎだ！ だなんて言っておいて、結局たどり着く結論が『皆』か・・・。

「そう、結局皆なのよ」

皆。僕や幻や、僕らの家族や、知っている人や知らない人、皆。今回の命題で結局何が言いたいのかと云うと、それは決して、皆が悪い！ なんて、そこから何も得られない事実ではないわ。私が言いたいのは、『責任がない人なんていない』ということなのよ。誰もが責任者、つまり無責任者ゼロ。やっぱり大げさに聞こえるけど、僕自身もその結論に達してしまった以上、大げさ大げさなんて言つまい。事実を受け止めよう。

「責任がない人はいない、それがどんなことでも。それが私の言いたいことよ」

僕はよく、そんなの僕には関係ない！ なんて心の中でつぶやいているけど、そんなことはない！ ということなのか。どんなことであれ、無責任でいてはいけない、いけない。

「一応ちゃんと結論をつけておきましょ。『行動の責任は誰のもの？』それは『誰も』。『誰も』はイントネーションで意味が変わる、対極の意味を持つ言葉。あなたは『誰も』をどう読むかしら？ ・・・。結論なんてとっくについているのに、あえてまとめなさいた理由はそれか。

最後までギヤグみたいで、なんだかしまらないけど、その読み方

•
•
•
•
•

「あれ、ここは・・・」

あれれ?

あれれ?

あれれれりえ、あ、かんじやつた。

なんてぼけている場合じゃない! あいにくだけど、今の僕にはそんなギャグをやつしている余裕はない。いや本当にー。

現在パーク中。えっと、とりあえず、僕はさつきまで何をしていたんだっけ・・・確か、ベッドで本を読んでたかな・・・。自室で読書にいそしんでいたはずのリーダー（読む人）こと僕が、どうしてこんなところに?..

って、あれあれといつまで言つっていても仕方がない。もしかしたらあるかもしないけど、迷える子羊に救いの手が差し伸べられるかもしれないけど、ここは自分で動くところだらう。

『不測の事態に陥つたときにも己を見失わない』、それは僕にはまだまだ無理なようだ。でも、いまからでも、『しばらくしたら落ち着いた』にランクダウンするけど、現状を見つめてみよう、自分で。

「ふう、このデッキリにもそこそこアクションしてあげたし、もういいかな。や、そろそろアクションに移ろう

誰に言つわけでもないけれど、とりあえず僕は言い訳じみたことを言つてみた。

さてさて、こういうのは5W1Hであらわせばいいのかな? いや、『どこ』だけを説明すれば十分だらう。少なくとも、僕の取り乱し荷も納得してくれるだらう。

おつと、その前に腰を落ち着かせてもらえるかな? あのふかふ

かしそうないすにでも座らせてもらおう。

ん、よし。なかなかのいすだ。これで本当に落ち着くことができ
た。それじゃあ、話を戻そうか。

「図書館つ！」

え？ よく聞こえなかつた？ それは失礼、それじゃあもう一度。

「ライブラリイイ！..！」

どうだ、図書館だ！ ライブラリーだ！ 驚きだあ！！

それも、そんじょそこらの図書館じゃない。いや、いつの間に
か図書館にいる時点すでに驚きだけれど、その図書館もまた、驚
きに値する異常さなのだ。

県立図書館、僕が今までに行つたことのあるもつとも大きな図書
館だけど、それでよつやく『』の広さ、本の多さを伝える物差
しになる程度。

バームクーヘン状のフロア、そのカーブに沿うように、何列もの
本棚がそびえている。ここからだと断定はできないけれど、おそらく
このフロアを一周、この大きな本棚が設置されているのだろう。
そして、ここは四階、・・・、四階だ。情報のソースはたまたま
目に付いたプレート。とりあえず信じて間違いないだろう。つまり、
この規模のフロアが下にあと三つ（一階は受付やらないやら打とし
てもあと二つ）、そして上にもいくつか・・・。

中央が吹き抜けになつてるので、ここからは何回にもわたつて
背お膳と並んでいる本が見える。

まさに本の館。

どうだ？ これなら驚いても仕方がないだろう？ むしろ、数分
のあたふたで落ち着くことができた、そのことを評価してもらいた
い。

なんて調子に乗つてみたり。

「それは言い過ぎね。すぐに落ち着いたことを評価？ 五十歩百歩、知らないかしら？」

突然、何の前触れもなく僕のひざの上に、幻が現れた。

「うおおー！」

驚いた！ これはリアクションしてやつたわけではなく、本当に心のそこから驚いた。

「大丈夫？ まさかそこまで驚くなんて・・・」

幻が少し引いている。まるで予想外だつたとでも言わんばかりに。

「いや、さつきの叫びは妥当だよ」

・・・ そうだよね？ だつて、突然現れたし・・・。

「そう、春君はそんなことで驚くのね。なら、普段の生活も、あなたにとつてはビックリの連続なのかしら？ こんなこと、毎日腐るほどおきていいでしょ？」

「そんな日常、御免蒙る！－」

どこの日常だよ。

「ふつ、まあいいわ」

「何に対しての笑い！？」

僕の肝の小ささか？ でも、あれって・・・、普通は驚く、よね？

そもそも普通なんて独断以外の何者でもないけれど、そんな屁理屈はおいておこつ。

「それにしても、どうしてこんなところに・・・」

落ち着いたといつても、僕が、僕たちがここにいるのかが判明し

たわけではない。むしろ、冷静になつたことでの謎がより日に付くようになった。

不可解が不可解なまま残つていると氣味が悪い。

「『どうしてここにいるか?』それは重要なことではないわ

・・・そうかな?

「大事なのはここで何をするか? もつとも、そんなことは決まりきっているけれど

・・・そう?

「まさか、本がたくさんあるから読書でも始めるつてわけ?」「いいえ、でも『本』に着目してるのはグッズね

グッズをいただいた。わあい。

「今ここでやるべきこと、それは命題よ!」

まあ、やう言ひことはなんとなくわかつていたよ。でも、今やるべきことはそれではないだらつ・・・。

場所は変わって、一階のロビー。一階のあゆみビル上が吹き抜けになつてゐるといふ、そこは憩いの場として用意されたスペースのようだ。

当然ながら、僕たちは別々のこすに腰を下ろす。

「さて、それでは命題をはじめましょうか

命題、今ここでやるべきことではない。それは明らかだ。

でも、幻の一言によつてそれが現在の最優先事項となつた。

『命題が終わつたら、ここから出ましょうか。出口ならむつき見つけてきたから』

・・・、命題が終わつたら出る、逆に言えば、命題が終わるまでは出ない。

そんな脅迫まがいのことをされて、僕は命題に付き合はざるを得なくなつた。

まあ、命題に興味がないわけではないし、幻と語りたい命題がひ

とつあるじ。この場所にぴったりな、うつむつけの命題が。

「『本を読むとは何か』、家で本を読んでいてふと思つたんだ」
そう、ここに来る前、まだ僕が自室にいたときにそんなことを思つていた。

そうしたら、いつの間にかほんの館にいるんだから、いやはや驚きだ。

「このシチュエーションにぴったりの命題ね。それに画面や丑うだわ、今日はそれにしましょ」「う」
えつと、僕が質問をしながら命題をといていくんだっけ？ これつて、出題側も意外と難しいな。幻は軽々とやつていたからその難易度に気がつかなかつた。

今回の命題は僕の立案。つまり事前の思考タイムはあつた。
でも、こくらこくちに多少の『下準備』があるからといって、僕のすることはいわば『導き』。されるほうは助かるけれど、するほうは助ける役だ。難しくないわけがない。

まあそれでも、それをやらなくちゃいけないんだけど。やる前から泣き言は格好悪いな、とりあえずチャレンジだ。

「僕も君も読書はするほうだろ。それも生活のサイクルに含まれてりるほどじ」「たまに

「そうね、読書は毎日してるわ」

「そうすると、これまでにそれなりの量を読んできたわけだよね」

「まあ、そうね」

「その中の、どれくらいの内容を覚えている？」

「・・・どうかしら？」

「題名だけなら？」

「きっと忘れてしまつたのもあるわね」

「そつだらう、僕もそうだ題名だけならまだしも、その中身、内容まで聞かれると、それほど説明できないと想つ

「でも、そういうものでしょ？　すべてを暗記しているなんて、そんな人はいたとしても間違えなく少数派だわ」

「僕もそれには同意だよ。人は忘れる、それはいいことでも悪いことでもあるんだから」

忘れる、これについても対話してみたいけれど、今は今の命題に集中。

「忘れてしまった本、誰にだつてあるであらうその本。僕たちはその本を、『読んだ』って言えるのかな？」

「・・・なるほどね」

どうやら言いたいことが伝わったらしい。さすが幻。

「昔読んだ本の内容を忘れてしまった。それは事実。なら、今が昔になったとき、たとえば二十年後、今読んでいる本の内容を忘れていたとしたら、僕たちは今、本を読んでいるといえうるのかな」

今読んでいる本、それも永遠に記憶の中に鮮明に残るわけではない。本の内容を忘れてしまったなら、その本を読んだとはいえない。だったら、未来を見据えてみれば、僕たちは本を読んでいるのだろうか？　ただ眺めているだけなのだろうか？

「そうね、私は『読んでいる』と思うわ」

まっすぐと僕のほうを見て、そういった。言いたいことの出だしを見つけたようだ。後はその道をたどつていくだけ。

「そもそも私は、『本を読む』ことは『内容を覚える』ことではないと思うの」

まずは僕の考えの否定から。僕は本の内容を忘れたら、その本を読んでいないことになるといったけれど、そしてそれを半ば当然のように考えていたけれど、その前提が幻とは違うのか。

「『本を読む』ことは『本から何かを読む』こと」

本から読む、何を？

「その本を読んで何かを感じること。愛とは何か、人の心の汚さ、本当にある善意、そんな、作品を通して考えさせられるあれこれを。

そして、それらを自分の中に取り入れること。受け入れるのではなくて、取り入れること。信じるのではなくて、それを知ること。数ある考えのひとつとして、決してそれを盲目的に信じるのではなくて

「それが『本を読む』こと」

「そう、それが私の思ひ、『本を読む』といつこと」

なるほど、その本を読んで感じたこと、考えさせられたこと。自分分を変えてくれる、変えてしまうもの。本に影響をされること、それが本を読むこと。

「たとえ、細かな内容を忘れてしまったとしても、そのときに感じたことは、あのときに思つたことは、このときに知ることは、自分の中に残つて、『わたし』の一部になる」

「『ぼく』の一部に」

「だから、いうなれば、『本を読む』ことは『わたししつくつ』ということね」

「『わたしつくつ』か。なんかいい言葉だね」

「そうね、われながら相変わらずの良命名だわ

・・・。それは違う。

「さて」

幻が立ち上がる。今日の命題はこれで終わり、その合図。

僕も立ち上がった。さて、これで帰宅か。そういえば、結局ここはどこなんだろつ。それと、ここにある本つて、読んでもいいのかな?

これだけの量の本は、僕を少なからず興奮させている。もしかして、間渕家の持ち物なのだろうか、だったら何冊か借りたいな。ちよつと幻に尋ねてみようかな。

「こんな素敵な命題をくれた春君には、『お礼』をあげます」

僕が今まさに幻に話しかけようとした時、不意に、何の脈絡もな

くせういって、僕に抱きついた。

「はは？」

急に抱きつかれると、わすがにドキッとする。

「いいえ、田をつぶつて」

『ね礼』とやらはどりやら別のものらしー、なんて考えていると、幻の顔が、口が、近づいてくる。

「い、これは……。

幻との出会いから早四ヶ月、12月も中旬に入り、寒さにも慣れきた今日この頃、じゃなくて！ そんな手紙の決まり文句じゃなくて、口はアレなのか？ 僕の計画が完璧に崩されてしまうけど、ここアレなのか？ そんな唐突な、いや、でもそういうもののか？

幻が寸前のところで止まる、田をつぶつていってもわかるほどに近づいて、そしてそこで停止した。

ここからは僕の役目なのか？ そうだら、だいたい、女のこの方からアレをするのは、一回田は僕のほうからしたという、そんな気持ちを感じて、受け入れてくれたのだろうか。だとしたらありがとう！

僕は勇気を振り絞つて顔を近づける。当然初体験だ、緊張もするわ。笑うなよ。

でも、それは幻も同じ。いや、幻が初体験かどうかはわからないけれど、この状況で緊張しないはずがない。はず。

でも、半端なく緊張している、このままだと息が荒くなってしまいそうだ。それはさすがにまずいだろう。なんとか一度落ち着かないと。

そうだ、リラックスのために、一度だけ目を開けて、幻の顔を見てみよう、きっと真っ赤に染まっているはずっ！ それを見れば僕

も落ち着ける。

そんなどうでもいい好奇心から、僕は眼を開いてみた。ゆっくりと、少しづつ・・・。

「あれ？」

真っ白だ。予想していた色ではなく、真っ白だ。
というか・・・というか、とういか、といつか！！

天井だ。

僕の目に映ったのは、自室の真っ白な天井。他人に見せてても何の遜色もない、立派な天井だった。

・・・・・。
・・・・・。
・・・・・。

「夢？」

1-1 (後書き)

投稿に間を空けてしまってすみません^ ^ ;
今回は一話に区切らなかとも思いましたが、一話にまとめました。

最後まで読んでくださった方、ありがとうございます。よかったです、これからも頑張ります!!

「ほんとにすみません」

本日、十一月二十日。後三日で学校も終業式を向かえるこの頃。そういえば、学校での出来事についてまったく語っていないなあ。・・とこまやらながら思つ。

学校、スクール、ハイスクール。呼び名は何でもいいが、とにかくそこでの日々について、あまりにも語っていない。それこそ、僕の日常にそれが含まれていないと思われても仕方がないくらいに。誰にも日常があるみたい、この僕にも日常がある。ないとは言わせない、ある！

日常。朝起きて、学校へ行って（途中で幻と合流）、授業を受けて、下校して（ここも幻と）、帰宅して、勉強して、読書して、命題について考え、寝る。そしてまたはじめからのサイクル。

ところで、今の『日常』の中に『食事』が含まれていないからといつて、当然だけど、僕は食事をしていないわけではない。そんなわけはない。当然食べる。皆が食べるよう、僕だって食べる、『人間』なのだから。

ほかにも、風呂に入っているとは言ってないけど、風呂にも入っているし、究極的に言えば、息をしているとは言ってないけど、息だつてしている。

おひおこ、そんな『当たり前』のこと、そんな『当然』のこと、ちいぢ言つなよ！ そう思つかもしれない。だが、それでいい。僕の発言の狙いは、そう思つてもうつことなのだから。

まあ、そう思つてもうつのはあくまで取っ掛かりだけど。

取っ掛かりの次、それは思い出してもらひこと。知つてもううな
んてあつかましいことは言えない、ただすでに皆が知つていること
を、僕にも適応してもらひこと。

それは何かつて？

それは、『僕の語つたこと』と『僕の日常』は、合同ではない、
イコールではないということ。それらは決して統合関係なんかじや
ないってこと。

『僕の日常』をすべて、『僕が語つたこと』から知ることは不可
能。『僕の語つたこと』だけが『僕の日常』とすることも不可能。
それが思い出してもらいたいことだ。

そう、僕は『学校へ行く』ことを語つていなければ、だからと
いつて『学校へ行く』といつことがない、学校に行つていなければ
じゃない。

まあ、『学校へ行く』といつていいからといって、学校に行つ
てこるとことになるわけじゃないけれど。とにかく、（語つて
いない＝やっていない）の等式は成り立たないといふこと。そういう
うことだ――！

・・・・・たかが僕が学校へ行つてることを知つてもううな
ために、どれだけしゃべっているんだろう。こういつのを口下手と
いうのか。

いや、一応話せて入るのだから、口下手じゃなくて話下手か。
話下手・・・それって最悪のスキルじゃないか・・・・・。

主人公が話下手、これだけ聞くと、ちょっとシユールで面白そう
だけど、『話下手な彼と対人下手の彼女の命題「メティ』なんてあ
つたら目を留めてしまうかもだけど、絶対に序盤からイライラする
よな・・・。

僕は今までみんなにこんな不快を『えていたのか・・・、みんな、

そーりー。

うん、僕なりに誠意を見せて謝つたことだし、そろそろ思考終了。僕が学校に行っていることもわかつてもうえただろうし、僕が話下手なことは田を瞑つてもうつとして、そろそろ本題に戻ろつ。話下手ながらも、ちぐはぐながらも。

「おひ、おひでじやん！」

冒頭の僕の挨拶、そこから話はそれにそれてしまつたけど、軌道は修正されたよ！ 今のはそれへの返事だね！

「お久しぶりです、光さん」

僕は今、間淵家の玄関にいる。玄関が開いていたので挨拶をしてみたところ、光さんが出てきてくれたわけだ。

開けつ放し。といつても、間淵家には門があつて、そこからも歩くといえるほどの距離を歩くこの家に、たとえ家へのドアが開いていたからといって侵入するような、そんな肝の太いこそ泥はないだろうから、決して無用心になるわけではない。

僕が今日この時間に来ることは伝えていたので、勝手に入つてね～という歓迎のしるしだつたんだろう。その気遣いも、僕の小心スキルによって台無しにされたわけだが。

そんな僕に対して、間淵家の歓迎スタイルに応えられなかつた僕に対して、光さんは笑顔で話しかけてきた。

「まああがりなよ。時間を守れるあたしや春くんと違つて、うちの連中はまだ準備が済んでないようだし。まったく時間も守れない人間が、何を守れるんだか・・・」

意味深なことを言いながら中に入るように促していく。・・・な

んだが今の光さん発信フレーズについても考えてみたいけど、ここは自重しておこいつ。話下手だしね！……。

「じゃあ・・・おじやましまーす」

もはや親しみ深い家となつた間淵家に入る。

「とりあえず居間いこうか。^{まじゅう}白も準備は終わつてたし、お茶でも入れてくれるだろ」

自分で入れるつもりはないのか……まあ、光さんはお世辞にも家事が似合うなんていえないけど……。そういう人がやるとギヤップ萌えがうまれるんだけどなあ……。

なんてことはこれっぽっちも思つてないよ。ないとモモー！

「さて、居間には今、何人いまそかり~つと。お~、春くんはもう来たぞ」

居間に入つて、僕の来訪を知らせた。ちなみにそこにいたのは白さん、お母さん、お父さん。

「こ~、こんにちやは・・・、こんにちは」

「あら~もう時間だつたかしら。こめんなさいね、幻と祭がまだおわつてないみたいなのよ」

「まったく、時間も守れない人間は何一つ守れないというのに……。すまないね春君。一人の準備が終わるまで、少し待つてくれるかな？」

「あ、はい」

今のお父さんの言葉……なるほど、さつきの光さん名言の元ネタはお父さんだったのか。

光さんも、僕が気づいたことに気づいたらしく、珍しく頬を赤く染めている。確かに恥ずかしいよな……。

「あ、こちらにどうぞ。今、緑茶を入れますので。それとも何が、別のものがいいですか？」

「緑茶を、お願ひします」

喫茶店の店員よろしく、滑らかに注文を聞いてきた白さん。さす

がに今のはかまなかつたか。

一人はまだ準備中か。そんなにいろいろ用意する必要はないと思うけどなあ。

あ、そういうば京の行事についてまだ行つていなかつたつける
これは失礼。

それでは言わせていただけり、今日は待ちに待つた、とても楽し
みなその行事とは。

『

舞台変わる

「お待たせっ！！ ありや？ はるっちも着いてたんだ！ おはよっ！」

白也さんが出してくれた飲み物も残すと、さああと一口といつ時、二人が居間へやつてきた。

「こんにちは、祭さん……」

まずは元気な声の主に挨拶。ちなみに現在時刻、十一時半で、おはようの時刻はとっくに過ぎていいわけだけど……。そのあたりは価値観の違いなのかな。とりあえず、こちらは昼用の『こんにちは』で返しておいた。

「幻も、こんにちは。なんか結構時間がかかつてたみたいだけど……、もう準備は終わつたの？」

そしてもう一人、僕の同級生であり、今年の夏に初対面で命題を吹っかけてきた変人であり、僕の恋人である間淵家が未女幻。恋人、そうきちんと確認したことはなかつたけれど、ここまできてただの友達だと思われていた、なんて顛末はないだろう。それはギヤグを通り越して、もはや読者への冒涜だ。ましてや今日の僕の計画は、そこがあいまいなところを明確にするものだといえども、さうだけれど、彼女が彼女でないと、僕がただの奇人変人、かなり痛い人になってしまつ。

「ええ春くん。『機嫌麗しゅう』

『機嫌麗しゅう』。まあそれも挨拶だけれど、僕の脳内にも挨拶力テゴリーに含まれているけれど、僕はそのフレーズを使用する人間を初めて見た。まあ彼女の場合、お嬢様、ではあるからそれを使うに値するのかもしれないが、始めの会話ぐらいふざけないでほしいと思つ僕であつた。

「どうやらこれで全員そろったようね。時間は・・・予定より少し早いくらいかしら。まだだいぶ余裕があるわね。でも、向こうでドタバタして疲れるのも嫌だし、早めの出発としましょうか。皆、異存はないかしら?」

そろそろ出発じろか? なんて思つていたとき、そんな声が聞こえてきた。声の主のほうを、いやもつ既に正体はわかつているのだけれど、それでも万が一の聞き違いの可能性を排除すべく、振り向いた。

皆の指揮をとつてるのは、やはり幻だ。まるでそれがそうあるのが当然であるかのような、不自然な感を一切与えないうな、そんなリードだつた。僕たちを待たせたことなんてなかつたかのように、一切悪びれることなく出発を促した。

「いや、いやいやいや。幻、進行の主導権を握りつとする前に、いろいろ言つことがあるだろ?」

怒つていなによ。怒つてているわけじゃがない。感情的にならないで理性的にいじつ。怒るのはあまつまくない。でも、僕が何か言いたくなる、その気持ちはわかつてくれるだろ? いや、

遅れたこと謝れし! とか言つキャラつて、ほほ確実にセコいやつだと認識される。もしくはストーリーにおけるリアクション役。あとは、正常ぶつて周りの人間の面白さの引き立てる役とか。それは語尾がなんであつても、おそらく変わらないだろ?。

そう、『謝れフレーズ』は百パーセントで発言者のランクを下げる、鉄板ワードなのね!。

そんなフラグを踏むのは面白くない。僕こそ今までの自虐的趣味はないことだし。

まあ、とはいっても悪いものは悪いわけで、だからそれとなく『

『言つことはないか？』なんていてみたんだけど。悪を良しとするのは、幻のためにもよくないしねつ！

そんな僕のへっぴり腰主張でも、幻ならきつと氣づくだろう。そして謝るだろう。なんだかさつきから謝る謝るばっかり言つている気がするけど、そんな疑いもかき消してくれるような、満点の返答をしてくれるだろう。

まあ満点は言い過ぎかもしないけれど、九十点は取つてくれるだろう。なんて批評家ぶつてみる僕。

「言つこと……えっと…………。あら、私としたことが……うつかりしていたわ」

よかつた、幻が空氣の読める女の子で。これが話の通じないような間抜けだったら、さらに『謝れ』に近いことを言わされて、つまりは地雷の近くまで進まされて、僕がセロにやつにならざるを得なかつたところだ。

「言い忘れていたけれど、私、この前の試験は学年一位だったわ」

「ええ？ 幻ちゃんまた一位取つちゃつたの？ ゆうじいねつー」「勉強は得意だもんなあ。ま、あたしの血族なだけはあるな

・・・。百一十点づつ……

ダメだ。彼女のほうが一步も一步も上手だった。

こんなときのために隠してあつた懐刀『学年一位』、そしてそれに反応する姉一人。完全に計算されつくしている。

僕の謝罪要求プレッシャーを感じていなことはまずありえないから、それを避けるために、自分が謝らないためのとんちだろう。そんなに頭をひらめかせて、そこまでして謝りたくないか？ と思つてしまつが、僕の想像を超えるパフォーマンスを見てくれた

「こうことで、今回五百一十点をつけさせていただきました。

彼女のところを探点することで、なんとなく僕のほうが上みたい
なオーラをだしておいて、心を落ちつけようとする僕。

「そうだな。そろそろ出発してもいい頃合だろう。だがその前に、
幻、約束の時間を守れなかつたことを春君に謝りなさい。私たちに
はいい。もちろん遅刻自体は許すべき行為ではないが、私たちは家
族だから、お前と祭が遅れることは想像に易かつた。それを踏まえ
ての行動をしていたのだからそれほど迷惑はかかっていない。だが
春君には謝りなさい。たとえどんな理由があつたところで、彼の貴
重な時間を無駄にしてしまつたのだから、そういうところはきちんと
としておきなさい。今後のためにもね」

「・・・はい」

父親の威厳。

僕のこじやくな変化球にうまく対応してしてやつたりのところと
回避不可の直球が飛んできた。

なるほど、謝罪要求でもこの品位を落とさない、そんなやり方も
あつたのか。まあこんなかつこよすぎる台詞が似合つ程度の品を持
つた人間にしか使えようがないけど・・・。なんだか格の差がはつ
きりとを見せられたな。

「春くん。待たせてしまつてごめんなさい。それと猪口才な攻撃を
華麗によけてしまつてごめんなさい。・・・許して、くれる?」

僕の方へ歩み寄つてきて、いすに座つていた僕の元へ、方ひざを
立ててがんと両手を取り、うるつとした目で上目使いにそう聞い
てきた。

ドキンときた。

かなり芝居がかつた動作だが、幻のような美人がこれをやると、
正直かなりこたえる。明らかに失礼なフレーズや不自然な振る舞い

に目がいかなくなるほど、彼女の瞳に吸い込まれしまつほどの、そんな魅力を持つていた。

それを客観的に描写できている時点で、僕の心にもいくらかの余裕はあるのだろうけれど、心臓の鼓動、思考の停止具合、どんなに強がつてもいつもどおりとはいえない。

「一言でいなか一言で許してしまいたい、そんな風に思わされたけれど、ここで許してしまえばこれから先、同じような手口で言いくるめられてしまう気がする。ここはちゃんと考えて行動すべきだ。それこそ、今後のためにも。

僕は取られた手を握り返し、自分が立ちあがるとともに彼女も立たせて、その魅惑的な瞳、田と田を合わせてやつしく微笑むようにして言葉を紡いだ。

「当たり前だろ。僕は君が好きなんだから。たとえ幻を待っている時でも、それが無駄な時間だなんてことはない。僕はそう思っているんだから」

そういうて、軽く彼女を抱き寄せる。

策には策を技には技を、そういう思惑もあるけれど、僕のこの言葉に嘘偽りはない。それは確かだ。

僕の言葉の効果はどうか。抱擁をといて、彼女の反応を待つ。

・・・。ふしゅー。

彼女はまるで音を立てるように、顔が真っ赤に染まった。

そういえば、今まで彼女が僕に演技がかつた振る舞いをしたことによくあつたけれど、僕が彼女にそれをしておそらく初めてだつた。幻、不意の出来事に意外と耐性がないのかもしれないな。

「どうか、僕も自分の台詞を反芻して、だんだん恥ずかしくなってきたんだけど。恥ずかしつ！！」

そんな甘い（のか？）言葉を返して、その気恥ずかしさも少し落ち着いたところで、僕は今、一人きりじゃないことを思い出させられた。忘れていたほうがどうかしていたと思つかもしれないが、彼女の言葉、それに対する僕の言葉、僕の頭はそれがけに集中して、それ以外をシャットアウトしてしまっていたようだ。

僕を現実に引き戻したのは、幻の肩越しにいた、にやけ顔の光さんだ。彼女のにやけ具合が目に入つた瞬間、僕は幻にも劣らず真つ赤になつた。

「いやー、お熱いことで。すごいもん見せてもらつたぜ」

「うわっ、幻ちゃん真つ赤だよ！ はるつちにほれちゃつたかな？」

「ラブラブですね・・・」

「あらあら、愛は人を盲目にするつて言つたけど、春君も意外と大胆なのね」

「これなら今後も安心だな。幻を君に頼んでもいいよつだ
・・・。とりあえず、いいですか？」

「うわあああ！！！ 恥つ！！ 恥かしつ！！！」

なんてことをやつてしまつたんだ！ 幻の部屋で一人きりならいざ知らず、ここは彼女の家の居間。彼女の父母、ついでに姉が三人。ほぼ全員集合状態でやつてしまつた！！

やつぱり慣れないことはしてはいけないということなのか？ だとしても、それを悟るための教訓だとしても、これはあんまりだ！ あまりにもひどいよ！

今の僕には、行動の責任ぐらい自分で持つべしとか、そんな戯言

を言つている余裕はない。まったくない。

かなり恥ずかしい目にあつてしまつた。幻はどうしているかと、再び目を向けてみると、彼女は僕に微笑んでいた。周りなど意に介さず、ギャラリーには目もくれず。

「春くん、ありがとう」

そして、今度は彼女の方が抱擁をしてきた。

「このタイミングでっ！？　この場面でっ！？　この状況でっ！？　回りを気にしないといつても、限度があるだらう。いや本当に！　僕を抱擁する幻、それを温かい目で見守る幻一家。　まるで悪夢だ。

さつきは気づかなかつたけれど、これだけ密着していると、その、なんというか、やわらかい感触が伝わつてきたりしているのだが、僕はこの状況でそれを喜べるほどにたがが外れた人間ではない。気恥ずかしさよりも、気まずさが何倍も勝つていて。ああ、何でこんなことに・・・。

「さて、一人の問題も解決したようだし、そろそろ出発しよう」

改めて、少々の「じたごた」を終えて、幻パパが出発を促した。やはりこういつのは、一家の大黒柱の役目だらう。先ほどの痛手も、幻が台詞を奪つたことに起因するのか・・・、というか痛手を受けたのは僕だけだけど・・・。

そういえば、僕たちの目的地はまだ触れていなかつたつけ？　触れていなかつたな。

でも、今日は散々ひどい目にあつたし、なんだか素直に話す気にはなれないな、なんて意地悪なことを考えてみる。

よし、今回も恒例のアレで終わらせよう。僕の恥ずかしいシーンをこれでもかつてほど見たんだがら、それくらいは我慢してくれるだろう、僕のハつ当たりのために！！

んん、ゴホン。僕たちのこれから赴く場所、糺余曲折をこえてついに進みだす僕らが向かう先。

それは　。

「うー、これ出来ぐ、レジジーナーーー。」

・・・。祭さん・・・。

旋律。僕はこの日、旋律を覚えた。

何十人の人が指揮者の指揮のもとで、ひとつの作品をつくつていいく。形は残らない、それでも心に、客席で聞いている観客の心に、少なくとも僕の心には確かに形を持つて残つた。

これまで数え切れないほどの人が、それこそ星の数にも劣らない数の人たちが、その生涯を音楽とともに生きてきた、そしてこれらももつと多くの人が音楽に魅了されていく、その音楽の持つ力、神秘的な何か、そのほんの一部を垣間見たような気がした。

すごい。

とても稚拙で、僕の体験を、僕の感動をこれっぽっちもあらわせていないけれど、本当にすごいと思った。耳に入つてくる、体に染み渡つてくるその音、そしてそれを奏でている演奏者。世の中には僕の知らない美しいものがまだまだあるんだなあと、つくづくと思わされた。確実に、僕の中の世界が広がつた。

来てよかつた。

音楽なんて最近のノポップくらいしか知らない、クラシックどころかジャズだつてブルースだつててんで知らないこの僕。今日のコンサートに誘われたときは正直どうしようか迷つたけど、幻の言葉に従つておいてよかつた。『すばらしいものには、知識や経験なんて関係ない。ただ感じて、それが体を、心を伝わるもの』か。そうはいつてもやつぱり・・・とか思いながらも、結局招待してもらつた僕だが、幻の言葉が正しかつたことをよつやく知つた。

本当に、来てよかつた——

「お疲れさまっ！ 鞘ちゃんも影兄もすこかつたね！」

「祭姉さん、ありがとう。私も自分で満足できる演奏ができたわ」

「うん。皆来ててくれてありがとうね。それに春君、久しぶりだね。元気だつたかい？」

コンサートも終わり、現在は演奏後のパーティ。演奏を終えた影さんと鞘さんが合流して、間淵父母は知り合いで挨拶に回っている。当然ながら今までこんなところに来た経験はないので、正直かなり緊張している。影さんの挨拶にも若干声を上ずりながら返答する。

「は、はい。今日の演奏、なんていうか・・・すごかつたです！ 僕が感じたのなんてほんの一部なんだろうけど、音楽の力をを見せられたというか・・・」

「春君」

影さんは自分の唇に人差し指のふしあたりを当てた。

「言葉にしなくていい。今日感じたことは、君の中に少しでも残つてくれればうれしいよ。それで音楽に興味を持つたりしてくれれば、万々歳だね」

「は、はい！」

やつぱりこの人かっこいいなあ、そう思つた。

「あら、こんなところにいたの？」

慣れない場所にいたせいで少し疲れてしまったので、体の空気を入れ替えようと思って、会場の外、大きな自然公園を散歩していたところ、後ろから鞘さんがやってきた。

「あ、鞘さん。どうもです」

「うん。散歩してるの？ よかつたら、私もいい？」

「ええ、もちろん」

「ありがと」

そう言つて、僕の横に並んで歩く。そういえば鞠さんと一人で会話をするのは初めてかもしれない。そう思ひとだいぶ抜けていた緊張が再び戻つてくる。

「ふふふ、そんなに固くならないで。かわいい顔が台無しよ」もう一度ふふふ、と笑いながら両手を後ろに組んで僕の顔を覗き込んでくる。

目と目が合つた。なんだかからかわれているようすで恥ずかしい。

「なんて冗談。怒つた？」

「いいえ、怒つてなんか・・・」

なんだかペースを持つてかれているな。しかし、それがわかつたところにどうにもならない。

問題の原因がわかることと、それに対処することとはまるきり違うのだ！ つて、偉そうに言ひ「とじやないけど・・・」

「ねえ、音楽は好き？」

彼女は再び僕の横に並び、こちらを見ながらたずねてきた。

「え？ えつと・・・」

「大丈夫よ、落ち着いて。はい、深呼吸よ。吸つて、吐いて、吸つてー」

言われるがままに深呼吸をする。

「あ！ 今、私の胸見てたでしょ」

「ぶつ！..」

吹き出した。吸つていた息を吹き出した。

「あらら、冗談のつもりだつたのに。でもそんなに反応してるってことは・・・、もしかして・・・」

「いいえ違いますやつていません僕は何も見ていません！..」

句点も読点もなしで一息。誤解を解くために必死になつてこる。

そりや、必死にもなるだろ？

「んん～、そんなに必死に言われると、余計怪しい……かも？」

「ノオオオウ！……」

なんだかどんどん深みにはまつていくような……。

「容疑は深まる一方……」

「I don't watch your mune!…」

「あははっ。muneって。……ふつ、あはははっ」
つぼらせてしまった。僕の名前と学力のために弁解しておくけど、胸がbreastだつてことぐらい、わかつてるんだからねつ……。

・・・本当だよ？

「「めん」めん。ちょっとからかつてみただけ。リアクションのあまりの面白さに、つい」

「・・・」

さすがにすぐに許すことはできない。ちょっと黙つて困らせるのが許されるぐらいには、僕の負った傷は深いよね？

「「めんつて」

「・・・」

「「めんねつてば」

「・・・」

「えつと・・・胸見たいんだっけ？」

「違います！？」

負けた。この人、黙秘すらもさせないのか……。

「ふふつ、楽しいわね」

そりやあなたはね、とは言わない。

「でも、これで緊張もほぐれたでしょ？」

「え？」

言われてみれば確かに。保身に気が行っていたせいか、いつの間にか彼女と冗談のような会話ができるようになつていて。ここまで見越していななら、すごいな。

「緊張もほぐれたところでもう一度。do you like o

「さあ、さあ？」

さつきの僕のネタの変化形か。今度のは知能を疑われることなく、冗談だってわかる単語だな。言い訳を付け加える必要もあるまい。

僕はもう一度深呼吸して、意見を述べる。

「正直言つと、今まではそれほど興味はありませんでした。クラシックとか、一切かかわりのない人生を送っていたので。でも、今日のコンサートで生の音を聞いて、なんていうか、こんな美しいものがあつたんだなあつて思いました」

リラックスして、心のうちに滑らかに言えた。会話に大事なのはリラックス、そういうことかな。

「そう、それはよかつたわ。演奏している側としては、私の音が聴いている人に届いて、その人が何かを感じてくれるとすごくうれしいのよ。今日は春君に音楽の楽しさを伝えられた、それだけで大満足よ」

「こいつとかわいらしく微笑んだ。自然とこちらも微笑がこぼれてしまつ。

「音楽はね、ずっと昔から、きっと何千年も前でも、奏でられてきたと思うの。長い歴史の中、いろいろなものがかわつていつたけど、音楽と言つ存在と、それを愛する人たちはいつの時代にも、どこの場所にも変わらずいたのよね。そうやってずっとずっと愛されて奏でられてきたのが音楽。今このときにもどこかで音楽が奏でられている。なんだか口マンチックよね」

たそがれの空を眺めながら、そんなことを言つ彼女。

「ふふつ、ちょっとしゃれすぎかしら？」

「いいえ、そんなことないと思います。僕も口マンチックだなって思います」

自分の気持ちを正直に述べた。なんだか緊張もだいぶ解けてきた。

「そつか。君はこんな話でも聞いてくれるんだね。ありがとうございます。彼の人となりが少しわかつたような気がした。

「そういえば、君は命題の話が好きなんだよね」
散歩も十分ほど、体の緊張はもう完全に解けた時、鞠さんはそう声をかけてきた。

「え？ ああ、幻とよく話したりはしていますね」
急な話題にも、何とか返答する。

「今日は君が私の演奏を聴いたんだよね？」

「えっと、そうですけど」

「じゃあ、こんどは私が君の命題を聞く番だね」

ポン、と手を叩いて、今思ついたかのよつかの発言。いや、明らかに狙つただろ！ なんてことはとても言えない。

「そうだよね。じゃあ聞かせてもらおうかしら。えっとね、『どうして音楽を聴くのか』、それがききたいな」
「『どうと微笑んでそう叫ぶ鞠さん。これは僕の力では断れないな・・・。』

「・・・わかりました。拙論ですがお聞き願いましょ」

僕はおどけて、右手をへその前に、左手を腰に当て、紳士がそうするように、軽やかにお辞儀をした。

「まあ楽しみ！」

彼女も道化に付き合つてくれて、両の手を頬に当てて、楽しそうに微笑んだ。

これまでの何度かの対話式命題の経験を生かして、僕にはようつと試してみたいことがあった。今回はそれをやつてみよ。

「えっと、ご存知のとおり僕は音楽には疎い男なので、鞠さんにもいくつか質問させてもらいますが、いいでしょうか？」

「うん、私でよければ」

快い返事をもらえた。これで準備はばつちつだ。

「音楽を始めたきっかけ？　えっと・・・家の両親が音楽好きで、小さいときにお母さんにピアノを習つたのがきっかけかな。私に限らず、幻ちゃんとだってピアノ弾けるのよ。今度弾いてもらつたらどう？　まああの子は、子供のときやつてました、でやめてしまつたけど。子供のときはピアノやつてました！　つてよく聞く曲詞よね。それだけ音楽が愛されているということかしら」

「ええ、お母さんもピアノが弾けるのよ。お母さんもそのお母さん、私のおばあちゃんに習つたみたいで、そういう意味では音楽と共に生きている家族なのかも」

「ふふつ、音楽が友なんて、面白い言葉遊びね。さすが春君、私たちは音で表現するけど、あなたは言葉で表現するってわけなんだ」「フルートを始めたのは小学三年生のとき。オーケストラの演奏を聴いて、それがフルート協奏曲で。モーツアルト、知ってるわよね？　モーツアルトのフルート協奏曲、私が今日演奏した曲もそれだつたのだけど。そフルートについてはそれがきっかけかな。親戚にはフルートが吹ける人もいたから、勉強する環境としては困らなかつたわ」

「ええ。親戚にも音楽を好む人は多いの。私にとつてはそれが普通だけど、春君にとつては珍しいのかしら」

「どうして音楽を続いているのか？　そうね・・・。ちょっと照れくさいけれど、笑わないでね。音の持つあの、心を搖さぶつて、体を震わせて、神秘的でまぶしいカバーそれに魅せられているからかしら。あんな音を自分も出してみたい、あんな力を自分にも仕えるのか知りたい、それが私が音楽を続いている理由」

「うん、そうね。何事もそうだけど、『続ける』ことは簡単じゃない。何度も練習してもぜんぜん上達しない、そういうこともあるわ。だんだん悲しくなつてきて、自分には才能がない、これ以上やつても無理、そう思つこともあるわ。——でもね。とても高かつた壁を越えられたとき、ずっとできなかつたことができたとき、そういうときに感じる喜び、何にも変えられない達成感、それが音楽を続け

ている支えになつてゐるのかも知れないわ」

「つて、私の身の上話と命題に何か関係があるの？ 話が『冗漫な人は嫌われるわよ？ そろそろ君の意見を聞きたいんだけど』

「え？ もうまとまつてゐる？ 何よ、それならそうと早く言つてくれればよかつたのに。それじゃあ、ぜひお聞かせ願いましょうか」

「…………」

「ふふつ、なるほどね。君が私にいろいろ聞いてきたのは、そういうことだつたのね。なんだか頭を整理されたような、私の中にはたけど見えてなかつたものを示してくれたような、不思議な感じね」「ええ、満足よ。でも、欲を言えばもひとつだけかな」

「君の意見は、どうなの？」

「それで、私も声もかけずに散歩に出かけて、私は置いてけぼりにして鞄姉さんと一緒に散歩して、私を仲間はずれにして鞄姉さんと命題について話して、私のいないところで行われた対話は、たのしかつたかしら？」

歌うように言葉をつむいでいる。表情は笑みを浮かべているだろう。とても楽しそうな、そんな分言いを漂わせていた。

しかし——彼女は今、僕を尻に敷いている。

「…………」

いや、比喩的なそれではなくて、将来の暗示とかそういうものでもなくて、本当に、実際に、ここ幻の部屋において彼女はうつぶせの僕にのつかかっているわけだ。僕の頭を見るようにまたがつて、かかとで肩のあたりをぐりぐりやつている。

「…………」

『こんな情けない図ができるまで』について

て語つてみよう。聞いてくれるかな？

まずは現在がどの時系列にあるのか、取っ掛かりはこれかな。

端的に言えばパーティ後。もつ少し詳しく言つなら、あの音楽会が終わり、車で間淵家一家に帰宅。ちょっとしたお茶の時間を経て、

現在幻の部屋。時刻は午後八時半。

「謝罪するべきことはないかしら？」

「謝るときはうつ伏せじやなくて？」

「次の質問に必ず軽いと答えること」

彼女の放った言葉の一部だが、これでなんとなくわかるだらう。

『こんな情けない図ができるまで』終わり。

「それで、どうだったの？」

依然として僕に座つたまま、彼女は口を開いた。

「え？」

今日は『え？』ばかり使つてゐるような気がする。なんだかアホキヤラみたいで嫌だな・・・。

「だから、あなたの鞘姉さんへの答え。一つ田のぼりは何て言つたのつて聞いているのよ」

「ああ、それはね・・・」

『音楽を広めるため』。僕が鞘さんに応えた考えはそれ。

僕があの時何をしていたのか、もう大体わかっているだろうけど、一応答え合わせ。僕はあの時——書庫を得ていたのだ。僕の意見を裏付ける証拠。

厳密に証拠というなら、もつと人数を増やして統計を取る必要があるのだろうけど、ちょっとした会話程度でなら一人で十分。僕の意見を納得してもらいう程度なら、それでオッケー。

たとえば、『音楽を聴いて、自分もやつてみたいと思つた』『自分の音楽を聴いて、音楽が楽しいと思つてもらえればうれしい』などなどの発言。そこから導き出した、ちょっと変わった意見。

「音楽には人をひきつける力があり、魅せられた人はまた別の人へ音楽を伝える。そうして音楽が、自分が絶えないように人に伝播させている、ね」

まるで生き物のように、子孫を残すかのように——音に魅せられた人の心中で生きて、そして別の人にも人を通して移動、その人の心中でも生きていく。

「音楽に意志を持たせて、人の手から離れた、人の力を超えた存在として見るわけね。ふふつ、ロマンチックね」

ロマンチック。又は残酷。だって人は音楽に支配されている——僕の意見からはこの主張が生み出されかねないから。

でも、もしかしたら——そうなのかもしれない。そう思つておこう。

「それで」

彼女は体勢を変え、今度は僕の上にうつ伏せになった。僕のほうが背が高いので、彼女は全身で僕に乘つかっている。

「一つ目の意見——あなた自身の意見は?」

そう、一つ目のアレは、鞄さんの意見というか、思いから生み出した、彼女に影響されての意見。僕自身のとはまた別物なわけだ。

「えつと、すつげー単純だよ?」

「かまわないわ」

「——耳が気持ちよくなるから」

これが僕の、何も格好をつけていない率直な意見。教養のなさがにじみ出ているようなもの。

「・・・ふふつ」

「ん?」

「それも、悪くはないんじゃない?」

彼女は微笑んだ。顔は見えなくともわかる。——これだけそばにいるんだから。

幻への鞆さんとの命題の報告も終わった。これでパーティーでおいでいつてしまつたことも埋め合わせられたかな。

今日の僕がすることは、すると決めていることは後ひとつ、残つてゐる。大事な大事な、今日の中ではもちろん、今までの人生の中でも。

深呼吸。

うつ伏せのまま深呼吸してリラックス。緊張するな、リラックスだ。

そして、先ほどのままの体勢、そこに変化をつける。僕は、体を右に四分の一回転、左に半回転した。彼女を振り落とさないようゆっくり、寝転んだ状態で正面から向き合つ。

「春、くん？」

「幻

彼女の方に手をかけ、体を起こす。余計な力を入れないで、据わつた状態で正面から向き合つ。

「幻

「春くん」

彼女の手をとり、立ち上がる。ゆっくりと、立つた状態で正面から向き合つ。

「幻

「はい」

手が震えている。やっぱり緊張せずにいられないか。しかたないのかもしれない、それほど大事なことなのだから。

彼女と正面で向き合つ。目を見つめ、彼女も目を見つめ返してくる。

僕の緊張が移つてしまつたのか、彼女も心なしか手が震えている。言おう。勇気を出して、馴れ合いに甘んじないで。面と向かつてちゃんと言つたことのない、その言葉を。

「幻
好きだ
」

12／彼女（後書き）

今回ほどここで区切っても不恰好になってしまつた気がしたので、だいぶ長くなつてしましました^ ^；
さて、次回から最終章です。最終章は命題大団になると思います。
最後まで読んでくださった方、ありがとうございました^ ^

序・居間にて

間淵家の居間。一家全員がここにいる。それと僕が。入り口から一番奥にある椅子。一家の主のそれの正面に、僕と幻は立っている。僕たち二人の左右にはそれぞれ三つずつの椅子。それぞれにその持ち主が腰を下ろしている。

「では、契命題を受けるということでいいのだね」

正面の椅子の所有者、一家の主人からの最後の確認。それを見守っている全員の表情に、かすかな緊張が走る。僕の返事はもう決まっている。

「はい。お願いします」

皆の視線が僕へ向く。契を結んだ僕に。決断をした僕に。啓さんが、凪さんが、光さんが、祭さんが、鞘さんが、白さんが、影さんが、契の証人となつた。

もう引き返すことはできない、なかつたことにはできない、決定的な一步を踏み出した。

——もちろん、引き返すつもりもない。なかつたことにするつもりもない。

——己が決めて進んだ一步なのだから。

恐れはある。おびえはある。それでも、迷いはない。

体は震えている。鼓動は高鳴っている。それでも、その表情に曇りはない。覚悟を決めた男のそれだ。

「幻は、それを了承するか?」

続いて、彼は幻に、僕の契相手に問つた。

「ええ。私は彼を契相手として認めます」

「彼女もまた、迷いなく、曇りなく、己で決断してそう答えた。」
— そう答えた。

「わかつた。十坂春と間渕幻。一人の契命題をここに認めよう

そのとき、左右の六人は同時に腰を上げた。
彼もまた立ち上がり、右の手を差し出した。僕も右手を差し出し、握手をした。

「がんばりなさい。君がこの契を果たせることを、切に願おう」「ありがとうございます、啓さん」

「体ごと右へ向き、一番左の椅子の主のところへ、歩を進める。
応援しているわ。幻ちゃんのこと、よろしくね」

「いらっしゃい。戻さん」

その右となりへ。

「期待しているよ。といつても、もちろん手は抜かない。妥協しない僕を納得させるんだよ」

「がんばります、影さん」

さらに右となり、こちら側の列の右端へ。

「ついに腹を決めたな。やるからには最後まで負け。全員を納得させて妹をもらつていきな」

「もちろんです、光さん」

続いて、振り返り、その正面の彼女の下へ。

「はるっちと幻ちゃん、一人なら大丈夫。そうに決まってるよー！」

「そう願います。祭さん」

右へ。

「やつぱりあの子の相手は君よね。幻ちゃんと二人で、二人の力を

合わせてこの試練を潜り抜けなさい」

「わかりました。鞘さん」

最後の一人。

「あ、あの、その・・・ん、こほん。あなた方のこれからの方、
そのはじまりが契命題。この坂を越えて、それからもずっと一人で
歩んでください」

「はい、白さん」

そして、僕の隣の彼女。

「春くん、よろしくお願ひします」

「よろしくお願ひします。幻」

十一月二十日。午後九時三十七分。僕達の契命題の参加が認め
られた。

全員との握手が終わり。再び啓さんの前へ戻る。

「それでは、契命題、最初の一人は祭だ」

「はい」

祭さんはもう一度立ち上がり、啓さんの隣、僕達の正面へと歩む。
「それじゃあ、最初はわたしだね。日時は十一月二十四日、四日後
だね。その日の午後七時、夕食前にここで。都合は大丈夫かな?」

「はい」

「ええ」

「それじゃあ決まり。それと肝心の契命題ね。『なぜ努力するのか』
これが最初の命題。一人とも、クリスマス・イブまでに自分の考え
を整理してきてね。契を認める条件は、わたしを納得させること。
二人のうちどちらかでもちぐはぐな意見だったら、決して認めませ
ん。相談とかは自由にしてくれていけど、最終的に発表するのは
自分の中にある思いだからね」

「はい」

「わかつたわ」

契命題。間淵家の幻を除く七人。それぞれの納得する考え方を発表することで、幻との契が認められる。その第一題が今、祭さんの口から伝えられた。

一、祭契命題

自室。ベッドの上。十一月二十二日の夜十時、僕は明日のことを考えている。

十一月二十四日、クリスマス・イブ。

去年までの僕なら、この日に思考することといえば、クリスマスイブのつぶし方。彼女はもちろん、こんな日と一緒に遊ぶ親友もいなかつた僕のような人間には、面白いことなんて何一つない日だった。まあ、強いて言つならクリスマスケーキぐらいが数少ない楽しみか。

だけど、今年の僕は 契命題、これを差し置いてほかに考えるようなことはないだろ？

ここ数日、そのことばかり考えている。命題にはだいぶ慣れてきたけれど、今回はいつもとは勝手が違う。その抑圧が緊張を生み、緊張から命題の予行を試み、導き出される芳しくない結果がプレッシャーとなり……そんな蟻地獄に陥っている。それがわかっていても抜け出せないのだから、なかなかどうしておかしな話だ。

「ふう」

自然とため息が出る。そういうえば、ため息をすると幸せが逃げるつて聞いたことがあるけれど、それって人間にはもともと限られた幸せが生まれつき備わっていて、それを消費して生きているってことなのかな。いや、何も供給源がないなんて言つていなか。幸せを呼ぶ、なんて言つとまるで胡散臭いラッキー・アイテムみたいに聞こえるけど、そんなものがあつてもおかしくない。順当に考えれば、それは愛か何かかな。同時にもうひとつ、ため息をしそぎて幸せがゼロになつた人間の末路というのも気になるな……。

あれ？ いつの間にか話の軸がずれている！ 僕は明日のことを話していたのに。

気を紛らわせるならもつと現状に関係のある話をしたほうがいい

かな。たとえば、契命題についてとか

。

契命題。僕が幻に告白して、これが始まった。それはつまるところ何なのかといふと……間淵家の人間と結婚するための試練だ。

契命題自体は幻のお父さんが作ったらしいけど、それ以前から間淵家ではそういう伝統が続いているそうだ。自分の娘を任せられるかをはかる試練。それはいろいろな形をとつて、僕が受けるそれが契命題というわけだ。

つまり、幻との交際を正式に認められる条件が契命題 間淵家の家族から『『えられる命題について自分の意見を語り、相手を納得させること を達成することというわけだ。

「はあ」

改めて現状を認識したところでもたしても幸せが逃げていく。これからやることが決まっていて、さらにそのルールすらも明示されているのに、いったい何にビビっているんだい？ なんてあきれるかもしねえ。

しかし言おう、それは軽率であると。

僕がこんなにも心配しているのは、そのルールについてなのだから。

もう一度確認してほしい。『『えられる命題について自分の意見を語り、相手を納得させる』、これってかなりあいまいだと思わない？

相手を納得させる、この不明確なルールが気にかかる仕方ない。つまり、僕がどんな意見を述べようと、相手が納得したと思わない限り認められないわけだ。納得なんて外からじゃわからないし、論点に関係のない感情、たとえば僕のことが嫌いとか、そんなこんな

が混じりかねないじゃないか。

「ふう」

わかつている。本当はわかつている。そんなこと当たり前だつて。人と人との関係に個人的思考が入らないわけがない。要するに、僕は当たり前のことをさも問題のようにいつて、僕が失敗したときの責任を僕以外の何か、他人の気まぐれ、それに押し付けようとしているだけだ。

「ああ、かつこわりい」

もう寝よう。これ以上考えても悪方向へ落ちていくだけだ。見えない力オスにビビったところでどうしようもない。備えあれば憂いなしとはいっても、何を備えればいいのかわからないときだつてある。そんなときは必要以上に考えないことも大事なはず。なんてつたつて、僕は僕のできることしかできないんだから。

「おやすみなさい」

ふつきりで少し楽になつた頭を休ませるよつ、僕は意識を閉じていく。明日へ向けての休息。

「それじゃあ、はじめよつか」

祭さんが開始を宣言した。

間淵家。和室。これまで一度も足を踏み入れたことのない、広さ十五畳程度の置部屋に、僕と幻、そして祭さんが向かい合つて座つている。ほかには誰もいない。ギャラリーは禁止なようだ。

「それじゃ、最初ははるつちね。バツチリ聞くから、ズバツとビビつぞ！」

僕の緊張をほぐすためか、いつもどおりフランクな祭さん。

「はい」

肩の力を抜いて、雑念を追い払って集中する。そして、はじめる。「どうして努力をするのか。それが今回の命題でしたね。まず何のために努力するのかについて考えて見ます」

「大丈夫。声もそんなに震えていないし、頭だつて働いてる。さつきの祭さんの励ましが効いているのだろうか。

「努力の理由、それは目的達成のため。はじめはそう思つてました」「はじめは……ね」

相槌を入れてくれる祭さん。些細なことだけど、僕が話しやすいように心を配つてくれてる。

「でも、目的達成が理由だとしたら、それがかなわなかつたとき、その努力は、それまでのがんばりは無駄になつてしまつのか。もし、そつうなら、努力は目的を達成したときだけ価値があつて、それ以外ではやつてもやらなくて同じ、ということになつてしまつ」

「それだと現実と反してしまつわね」

幻も僕のサポートをしてくれる。自分も緊張しているだらう「…心が少しあつくなる。

「そつ。現実では、目的を遂げたか否かにかかわらず、がんばつたことに価値がある。努力自体に価値があつて、それは無駄になるものじゃない」

無駄な努力なんてない。きれい「」とじやなく、本当にそつだと思つていてる。

「だから、努力の理由は別のところにある」

「それは何かな??」

「それは 生きるため」

「生きるため、とはどういう意味かしら?」

幻からの問い。話の流れがスムーズでやりやすい。

「いまから話すよ。自分が何かがんばつているときのことを想像してみてください。たとえば運動、たとえば学問、たとえば料理」

最後のひとつに幻は反応した。適当にあげた例だったけど、彼女にとつては想像しやすいものだつたらしい。最近料理うまくなつて

たしね。

「そのとき、どんなことを思つてていたか、思い出してみてください。
……どうですか？ 意外とおもいだせないでしょう」

僕自身も自分が努力しているときに何を思つていてかなんて思い出せない。

「がんばつてているときは、それしか頭にないとか、とにかく夢中だつた、とかよくいうけれど、実際のところあまり、いやほとんど覚えていない。いわば謎、それが正体」

「確かに、力いっぱい走つてるときとかつて、何を考えているのか思い出せないにゃあ」

かわいらしい語尾は大歓迎だけど、今日このときは遠慮してほしかつた。思わず微笑んでしまつた僕の隣、そこには幻がいるのだから。

「そうね。何が努力しているとき、つまりは集中しているときの自分の思考はわからない。それがわかつたら集中していることに矛盾するものね。わん」

……。語尾装飾に失敗した人間の末路か。まあそれでもかわいいけど。

「とりあえず、努力しているときに何を考えているかわからない、といつところまでは納得してもらえますか？」

「うんうん！ 大丈夫だよ」

「では次に、何を考えているか分からぬことを承知で、何を考えているのか想像してみてください」

祭さんの、そして幻の反応を待つ。

「うーん。どうだろ？……。プラスかマイナスで言えば、たぶんプラスのことを考へてゐると思うけど……」

「私もそれくらいしか想像できないわね。きっと自分の想像する楽しい未来、そんなことを想像しているんじゃないかしら」

二人とも、こんな無茶なお願いにも付き合つてきちんと想像してくれている。

「それでいいんです。プラスなこと、楽しいことを想像している。

それはきっと、そのときの高揚した気持ち、田的に向かって進んでいるときのわくわくする気持ちから導いた想像だと思つけど、その想像が導かれることが重要なんです」

「んん、どういうこか、よくわからないかも」

「あ、すみません。努力しているときはわくわくしている、それは当然といつていいでしょ。しかし一方で、目標を追いかけたことへの疲れ、なかなか思うようにいかないもどかしさ、そういうつたものもあるはずです。いいことだけじゃなくて悪いこともある」

「どんなことでもそうだけど、いいことだけのことなんかない。当然何かしらのマイナスの要素も絡んでくる。

「にもかかわらず、そういうたプラスとマイナスを併せ持つた努力を振り返つてみると、僕たちはなぜかプラスのことばかり覚えてい。楽しかったことと同じくらいつらかったこともあつただうつて、どうしてかつらかったことはそれほど覚えていない」

「確かに、それを確かめる例ならたくさんありそうね」

「料理の特訓とかね、とは言わないでおこ。料理がつまくなるまでには、それに見合つた失敗、それを経験しているはずだけど、今幻に残つているのは、料理が得意だといつ事実。人はそうやってできているんじゃないんだろうか。

「同じ楽しいでも比較的努力の少なかつた楽しみ、その場限りの楽しみつていうのは意外と忘れちゃつたりする。それも考慮すると、最初の命題への僕の考えが完成する」

「わわつ！ ついにはるつちのまとめが聞けるのかなっ！」

「話の続きをわくわくして待つ祭さん。顔にこじれ出さないが幻だつて聞きたいと思つてくれているだう。

「つまり、努力をするのは楽しい思い出を作るため。将来つらくなつたときに思い出せるような楽しい思い出を未来の自分にプレゼントすること」。まだがんばりつつて、壁を乗り越えて生きていけるように、「

がんばったことは忘れない。それが自分の糧になり、明日の自分を支えてくれる、なんて言つたら格好つけすぎかな。

「それが、はるっちの考え方、そういうことでいいのかな？」

「はい」

自信を持つて答える。僕のできることはできた。後は祭さんの判断を待つだけだ。

「では、宣言します。わたしはあなたの主張に納得しました。私はあなたと幻ちゃんの契を認めます」

祭さんはやせしく微笑んだ。そして右手を差し出す。

「幻ちゃんの」と、よろしくね。わたしもはるっちよりかっこっこく見つけちゃうからっ！――人を見つけちゃうからっ！」

「祭さん」

祭さんと握手をして、第一の契命題は終わった。

つて、あれ？

「そういえば、幻も命題についての考えを話すんじゃなかつたっけ？」

「ああ、それはね」

祭さんが答えてくれる。

「私たちが判断するのは、はるっちが幻ちゃんを幸せにできる人かつてことと、幻ちゃんがこの家を出ても立派に生きていけるかってことなんだけどね。後の方のは割りと体裁だけで、はるっちのことを見めた後に、最後の締めをかねて幻ちゃんと私たちが命題について一言語るつてことなの。つて幻ちゃんから聞いてない？」

僕は首を横に振る。そんなこと、完全に初耳だ。

「え、あら。ふふつ、それは春くんを油断させないためよ。余計な情報を聞いて春くんの集中にさし伝えたらまずいものね。ええそうよ、わざとつてなかつただけで、全然まつたくこれっぽっちも忘れてなんかなかつたわ」

……。幻、忘れてたろ。

「命題については事前に相談するのはしないって決めたのは春くん

だつたし、このことも『命題について』に含まれることだから言わないでおいたのよ』

……いや、確かに言つたけど。事前に相談することで、逆に自分の考えがぶれてしまうかもしれないからつて、幻の考えに曳航された『自分の考え』ができるからつて、相談は無しにしようつて言つたけど……、それは事前に知つておきたかった。

まあ知つていたからつてどうこいうなるものえもないか。でもとりあえず、忘れていなかつたふりはする必要はないと思う。ていうか、するな。

「じゃあ、次はわたしたちだねっ！ それじゃ、幻ちゃん、先にどうぞっ！！！」

「努力をする理由。それは自分のやりたいことを見つけるため。いろいろなことに挑戦して、自分が本当にやりたいことを見つけるためだと、私は思うわ」

「つぎはわたしね。がんばる理由。世界を広げるため。自分の知らないことでもがんばつて、そうやつて自分の知つていること、自分の見えている世界を広げるためつて思うかな」

二人がそれぞれの考えを語つた。一人とも僕とは違う意見。短いながらも言いたいことが伝わつてくる。

やつぱり、こうやって自分の意見を聞いてもらつて、相手の意見

を聞いてつて楽しいなあ。

「じゃあ、これで私の番は終わり、白ちゃんが夕食を作つてくれてるから、はるつちも食べてこぐよね」

「はい、お願ひします」

「それじゃ、わたしは先に行くから。夕食は三十分後だからねっ！」

そう言つて、祭さんは部屋を出て行く。部屋には、僕と幻が残された。

「ふう、何とか終わつたなあ

「あら、春くんはお疲れのようね。そんなに緊張したの？」

座っている状態からそのまま後ろに倒れた僕の顔を覗き込むように、幻が聞く。

「そりゃしたさ。しないわけがない。このまま眠りたいぐらい疲れたらさ」

「何をお探し？」

「ちょっと枕になるものを。まあ、なくてもいいか。悪いけど、夕食までの三十分、ちょっと休ませてもうつよ」

人の家に来てなんだけど、正直僕はそれほどに疲労している。今までの緊張は、それほどものだつた。

「そう、わかつたわ。三十分たつたら起こしてあげるわ。私は読書でもしてるから、気にしなくていいわよ。ああ、それと枕も貸してあげるわ」

枕なんてどこにもなかつたけど、といぶかしみながら幻のほうを見ると、その正座しているひざを指差している。反対の手には、ブックカバーのかかつた本を持つていて。部屋に入るときから持つていたのだろうか。

「どうしたの。私は読書してるだけだから、別に使ってもいいわよ。すまし顔でそう言つ幻。……、えっと、それじゃあ。

「お言葉に甘えて」

幻の枕を貸してもうひとつじょつ。家の枕よりもやわらかくて暖かい枕を。

「お疲れ様」

幻がトレイで紅茶を運んできた。飲み物を「ほさない」よう慎重に歩いている姿がかわいらしい。

「ありがとう、幻もお疲れ様」

カップを手渡してくれた幻にお礼を言つ。僕が疲れている程度には、いやもつと疲れているだろうに、彼女はそんなそぶりは見せず、当たり前のようにもてなしてくれる。そのことにお礼を言いたいけど、御礼を行つた直後にまたお礼、というのはあまりよくない気がする。あまり言わないからこそ、本当に伝えたいときこそその気持ちが伝わるんじゃないかなあ、なんて一人考えてみる。

間瀬一家との夕食も終わり現在は幻の部屋。壁際においてあるソファ、僕の隣に幻が座つた。

「いいえ、私は自分の考えを一言話しただけだから。春くんほどお疲れではないわよ」

嘘だとわかる。契命題での幻の述べた意見は確かに少量だった。でも命題においては、自分の意見を述べるについては、内容量と努力量が反比例する。

短かつたら意見がはつきり伝わらなくていいわけじゃない。大事なのは濃度じゃなくて絶対量。ダイエット食品だって栄養が不十分じゃ話にならないみたい。

「そう。僕ももうばっちらだよ。おじぎちゃん枕で充電できたし」とたん、隣が明るくなる。そのときは雰囲気でできしたことでも、後に振り返るとかなり恥ずかしいこと、あの枕も幻にとつてそれだつたらしい。というか、ほとんどそれを承知で言つてみたんだけど。彼女の脳内での数秒の感情合戦では、怒りが勝利したらしい。動搖から怒りへのシフト。

「ふんっ。やうやくてふざけるんだつたらあの枕はもう捨てね」と

にするわ

つるり、とそつぽを向く幻。相手から顔を背けるのは拒絶の最もわかりやすい方法らしいけど、この状況で幻にやられてもただ可愛いと思つだけだった。つてこや、別にのろけてるわけじゃないんだけど……

冷静なようでたまにこいつに反感も見せる。そんな一つ一つの仕草に心があつたまる。なんて言つたらますます怒られそうだから黙つておく。

「冗談だよ。ありがと」

もう一度お礼を言つ。今度は枕を貸してくれたこと。

「ふんつ。何のことかしら？」

思つたより恥ずかしかつたらしい。それが怒りに変換されて、今彼女はかなりふてくされている。

仕方ない、僕も恥をさらすとするか。甘い台詞や心が動かされる言葉というのは、基本的に受身側の得る感情だ。その発言者は、まあ人それぞれなのかも知れないけど、基本的に恥ずかしい。それでも幻枕が幻として消えてしまふのを防ぐためなら、僕は喜んで恥をかこつ。

「何のことつて？」

「あなたが何につけて感謝しているかぜんぜんわからないわつてことよ」

「ああ、それは……」

「言つて」とはすでに決まつていても、理性がやめておけと伝えてくる。それは恥ずかしいから、心の中でつぶやくのもやめておけ、と忠告してくれる。

それでも言おひ、口に出して、恥ずかしい台詞を。

「幻が優しいこと」

「……」

「ふざけじ」めん。ありがと」

「……」

「今日もありがとう。幻が可憐だから、つご、からかいたくなつちやつただけだから」

「……」

「許してくれると、うれしい」

「……ふん。そ、そこまで言つない、別にいいけど」

「本当に？」

「……うん」

「ありがとう」

「あああ！」

顔から首元までがほかほかする。氣を紛らわすために叫びたい氣分だ。意識的に恥ずかしいセリフを言つことがこんなにダメージがあるとは。どうやら僕がキザになれる日は永遠に来ないようだ。まあ望んでもないけどね。

「今何時だろう？」

「え？ 九時十七分だけど」

ちゃんと返事をしてくれた。本当に許してくれたようだ。

「時間なんて聞いて、それがどうかしたの？」

こきなり話題が変わったことを少しいぶかしみながら、彼女はそ

う尋ねた。

「うん。ちょっとね」

九時十七分、ちょっと早いぐらいかな。でも早いにこしたことはない。遅くなるよりはぜんぜんいいし、なんだかんだで時間になつてしまつだろ?」

「いまから散歩しない?」

契命題だけが今日の予定じゃない。今日は十一月二十四日なのだから。むしろ、こつちが本命といつても良い。

散歩。間淵家からおなじみの公園までゆっくりと歩いていく予定。左隣には幻、散歩の意図をつかめない様子で歩いている。

「サンタクロースつてさ」

家を出て三分、外の寒さにも慣れてきて、僕はこの時期に定番の話を切り出した。

「サンタクロースつてさ、いつまで信じていた?」

「どうかしら。あまり良く覚えていないけれど、たぶん小学校の中学生くらいかしら」

「僕もそれくらいかな」

小学校三、四年生。なまじ知識がついてきて、根拠のないものを批判したくなる年頃。その幼い攻撃を真っ先に食らうのがサンタクロース。サンタクロースは認めないけどプレゼントはもらつ、そんな矛盾にはまだ気づかず、とりあえずサンタクロースは卒業する。僕はそんなよくいる子供だったことを思い出す。

「サンタクロースつてなんだろう?」

僕は契命題ともうひとつ、このことも考えていた。架空の人物、大金持ちの子供好き、そう言つてしまえば終わりなのかもしない

けど。

「サンタクロースとは何か。ふふつ、季節を捉えた面白い命題ね」
僕のあいまい極まりない問い合わせにも付き合ってくれるようだ。できれば今日この命題を幻と話してみたかったから、素直にうれしい。

「実はさ、僕はもう結論までまとめてあるんだ」

今日はいつもと違つてもう既に考えてきてある。幻へのクリスマスプレゼント、それが僕の意見というのも面白いかなと思つて。

「あら奇遇ね。私も同じ命題について考えてきたのよ

「え」

あれ。何食わぬ顔で放つたその言葉が僕の計画にひびを入れたことに彼女はまったく気づいていない。

「クリスマスだし、ちょっとお洒落なプレゼントといつもりだつたのだけど

「……ふつ。はははは

思わず笑つてしまつた。なるほど幻も僕とまったく同じことを考えていたらしい。

よく考えれば、僕がそうであるように、幻だつてこの数ヶ月、いや彼女の場合はもつと多くの期間命題に触れている。彼女も僕と同じように考えてもおかしくないか。

「そつか。幻もサンタクロースについて考えてきてたんだ。それじゃ、互いの意見を贈り物にして、プレゼント交換といこうか

「ふふつ。粋な交換会ね」

僕からプレゼントを渡すつもりが、思いがけなくプレゼント交換になつてしまつた。でも、それはそれで面白そうだ。

「じゃあとりあえず結論から。サンタクロースとは子供のときによく教わる大先生

「私の結論は、サンタクロースはふるさと」

二人ともぜんぜん違つた結論に達したようだ。これこそが、あいまいな命題から生まれる面白み。ひとつの命題には人の数だけ考え方があつて、どれがあつてどれが違うなんてない。考え方優劣な

んてない、どれもひとつの立派な意見だつて」とを思って出せられてくる。

「まづは私から話せてもらひつわね」

これから樂しい話が始まる、僕たちをそんな空氣が包んだ。

「サンタクロースといえば、まづは『まやかし』とこうのが出でてみると思つけれど」

「え?」

……。どうだらうか? それは少しひねくれすぎな……。

「サンタクロースといえば、まづは『まやかし』とこうのが出でてみると思つけれど」

……。

「うん……」

まづは話を聞いた。わざわざ「んないやなはじめ方をするのにまづきつとそれなりの理由があるはず。もしかしたら…… そのときは幻をひねくれつ娘認定しよつ。どうでもいいことだけど、『子』を『娘』にするだけで、そのワードが素敵に見えるのは僕だけだろうか、なんてどうでもいいことか。とりあえず、今は幻の話を聞こう。

「それは子供の発想よね」

子供の発想。彼女をひねくれつ娘認定するのは軽率だつた。話は最後まで聞こうということだな。つて、そもそもあんな微妙なところでじつたん区切る幻にも、何かの惡意を感じるけど……。

「そうやって子供はサンタクロースを『まやかし』と笑つてその空想から離れていくわ。まるで里出のよつに。もつとも、それができないままで大人になるというのも、素敵なのかもしれないけれど」 フツと笑う幻。案外、祭さんとか白さんはまだ信じているんじゃないかな、と思つたが……。あとで質問してみよつ。

「それで」

いつたん区切る幻。ここからが本題とでも言わんばかりに。

「サンタクロースから離れた子供は、サンタクロース離れした子供

は当然だけど大人になる。いつかは大人になる

「うん」

「そしていつかは結婚して子供を育てる。全員がそうとは限らないけれど、今はそうなると仮定して頂戴。サンタクロースを『まやかし』とした子供はいつか自分が子供を持つ」

「いつかは子供を持つ。それで？」

「そのときにもクリスマスはやつてくるわよね。絶対とはいえないけれど、それも今はそうと仮定してくれれば助かるわ」

まあ、ここで「クリスマスという制度が消えるかもしれない」なんて言つても仕方がないだろう。クリスマスはもはやただの信仰じやなくて、社会に完全に組み込まれている。クリスマス限定、クリスマスフェア、そういうものが消えてしまつとは、なかなか想像しにくい。

「そのときに、再びサンタはやつてくる

「……ん？」

「よくわからなかつた。どういう意味だらう？」

「今から説明するわ。さつきのは言つならば、格好付けね。あなたが納得した後には、きっとそれにしびれてしまつわね」

無駄にハードルを上げる幻。

「あなたは、サンタがいないとわかる前にはサンタのこと信じていたわよね」

「そりや、もちろん」

「それを教えたのは？」

「……あ！」

「そうこいつとか。なるほど、サンタがやつてくるとは、言ひえて妙だ。妙だ。」

「そう、もうわかつたと思うけれど、サンタクロースを教えるのは親の仕事。子供がそれを信じるのは、親に教えてもらつたから。つまり、親は、大人になったあなたは、一度『まやかし』としたサンタクロースを再び想うことになる。一度離れたそれにもう一度近づ

く、帰郷ね

つまりは里帰り、か。

「つまり、サンタクロースといつのはふるわとい。最初に言ったこれが私の考え方

子供に教えるために再び近づく、サンタクロースは故郷。なるほど。

「どうかしら? 」こんな考え方も面白いと思わな? 」

「ありがとう。いいプレゼントだったよ」

髪をかきあげてから深呼吸をする幻。僕は正直に感想を述べた。

「じゃあ、今度は僕の番だね」

「ええ、素敵なプレゼントをもらえたと期待して聞くわ」

「ホン、とわざとらしく咳をして始める。

「サンタクロースは大先生。それはね、ほとんび一言で納得してもうえると思つんだ」

今回は長く話して納得してもううんじやなくて、短い言葉で意見を伝える。「の前の幻のまねかな。

「はら、悪い子にはサンタさんからプレゼントはあませんよー。自分の母親を意識して言つてみた。

「そういうことね」

一言でわかるとは言つてみたけど、本当にわかるのか。結論を聞いてから、「ああ、一言田でわかつてもよさそなうなものね」「なんてさながら口ロンブスの卵状態になると思つたんだけど……

ちょっと悔しいから今度は解読不可能な意地悪文を。

「悪い娘にはサンタさんからプレゼントは来ないよー。」

「それは卑猥だわ」

「え! ?」

「だつて、それって、いやらじこおじさんのおじさんをイメの……」

「同音異義語を会話で見抜く! ?」

マジか。確かに、ホステスに言こ寄るこやらじこおじさんをイメ

一ジして言つてみたけど、そんな思考背景まで見抜かれるのか……

「ちょっと寒気がするよ……いや冬だからじゃなくて……」

「もともとサンタクロースというのさ、良い子にはプレゼント、悪い子にはおしおき、ところの風習があつたらしくんだ。親や先生の言うことには逆らいたい年頃でも、プレゼントをくれるサンタに逆らうわけにはいかない。そつやつて、サンタクロースは一人の道徳の先生をやつていて、その考え方。面白いかな」

すでに見抜かれていて、まさか説明するまでもないんだけど、一応最後まで義務は果たした。

「ええ、ありがとう。素敵なお誕生日プレゼントよ」

本当にそう思つてくれているのかもしない。だけど、僕は満足できなかつた。もつと、もつといいものがあつたんじゃないだろうか……

なんてことになるのはわかつていた。

まるで策士のような台詞だけど、これは強がりじゃない。実は、プレゼントはこれだけじゃない。

「そろそろかな」

「え？」

「僕のもうひとつ、僕から幻へのクリスマスプレゼント」

僕は上を指差した。そして、これはもはや運だつたが、ちょっとビッグタイミングで……

「あ、雪……」

雪が降つてきた。ホワイトクリスマス。時間を気にしていたのは、このタイミングを見極めるためだつた。

「これが、僕から君への、一つ目のプレゼント」

驚く幻の目を見て、ロマンチックを意識してそう言つた。格好い

い台詞は言つたほうは恥ずかしい、その法則にのつとつ今の僕も自分がかなり恥ずかしいが、ここは乗り切る。

だつて、まだ終わりじゃないんだから。僕は「バーの中」に隠して、いたそれを取り出す。

「これはが三つ目」

幻の肩をやさしく引き寄せて、小さい声で言つ。

「一緒にいかがでしようか。お姫様？」

白いマフラー。それを一人の首にかけ、くるりとまるめる。一人で使うよりもずっとあたたかかった。

幻の頬にぼくの頬をくっつけて、

「ちよつとはやいけど、メリークリスマス」

恥ずかしさが極限まで達したところで、僕は計画を完遂した。これで全部だ、たぶんうまくいった。

「……もつ」

一言そう言つて、幻は僕と腕を組んだ。もつ。なんて僕に負けないくらい恥ずかしい台詞、それでも言われたほうは、やっぱり悪くないな。

僕たちは一人でくつこつ歩いて歩いた。寒さに負けないよつこすこしでもあたたかいくよ。

「最後の台詞は、見てないといつぱりしないとダメよ」

そんな手厳しい一言も忘れない彼女であった。

サンタクロースとは何か？

白「子供が最初に思い浮かべる、想像力を働かせる課題」

祭「みんながちょっとあつたかくなる伝統」

一、白契命題（前編）

僕はまたしても間淵家と行動をともにしている。最近は、自分の家族よりもこの家族とともに過ごしている時間が長いんじやないかって気になるくらいだ。まあもちろんそんなことはなくて、僕は主に僕の家族とともに過ごしているんだけど、そう感じるのは僕の語る話が主に間淵家関連の話だからかもしれない。他人には自分と同じだけ生きている時間があつて、自分の知らないその人の時間があるってこと、つまり僕には語つていらない僕の時間もあるということなんだけど、そんなことを察して意くれている人はおそらくいなだらう。僕だつて、他人に自分と同じほどの時間があることを、無意識においては理解していないし、それを考へていて今だつて理解しようとは思わない。正確に言えば、思えない。能力的に、構造的に。なんてあきらめたようなことを言つと、無理だと思つてしまうと、そうだと思つたことは絶対に達成不可能になる、というのが僕の哲学なんだけど、こればかりはあきらめよう。できないうことは認識している、認識できているだけ上等だ、なんて逃げ文句でも打つておいて。

なんてどうでもいいことはおいておいて、そろそろ状況説明に移ろう。あまり場面の説明は得意ではないのだけど、今朝に読みきつたあの本の書き方を意識しながらやってみよう。失敗は成功の元！なんてやる前からネガティブになりながら。

僕は、僕らは揺れない車に乗っている。走行中にもかかわらずまったくといっていいほどゆれない、つまりは高級車に乗っている。高級車の中でも高級な部類なのだろうか、あまり車に詳しくないし、そもそも高級と付くものには無縁な家庭で生活している僕にはわかるはずもないことだが。

窓際に座っている僕は、松の木々を見ている。きれいに舗装され

た道の左右には松の木々がそびえていた。もしかしたら松ではないのかもしないが、それがたとえ杉であつたところで、クヌギであつたところで特になんというわけでもないだろ。

太陽はおそらく真上になるのだろ。木々の影はどれも短く、幹は光に照らされていてところどころにあるくぼみまでよく見える。昼食は車になる前にじき馳走になつたので、それほど空腹は感じない。僕たち、というと僕が主体であるかのように聞こえてしまうので間淵家とでもしておこうか。間淵家は三台の車を用いて移動している。この車に乗っているのは、白さん、幻、そして僕。幻を真ん中にして三人で一列に座つてゐる。

間淵家を出発して一時間、目的地は間淵家の本家、すなわち廻さん家の実家だ。話によると、あと三時間ほど車に乗つていれば到着するらしい。

今は車内で口を開いているものは一人もいないけど、出発からずつと全員が無言ですわ手いるわけでは、もちろんない。先ほどまでは、間淵家本家のまわりにあふれている自然、自転車で（車ではなく自転車を使うことに意義があるらしく）十分ほど行ったところにある幻や鞆さんやまとさんがいつも行く古本屋、間淵家本家に住んでいるおじいさんとおばあさん、それから幻たちのいとこ三人についての話しうを聞いていた。主に幻がしゃべつていて、白さんも時々話していた。

それならどうして今はみんな押し黙つてゐるのかと云つて、ちゃんとそななるべき理由がある。

これから、白さんによる契命題が行われるわけだ。

ふう、ようやく伝えるべきことを伝えられた。契命題、これがこれから行われるのだ。第一回の契命題。

今回は、事前に命題を伝えられなかつた。契命題は間淵家の一人一人がひとつ担当するもの、つまりそれにはあまりきちんとしたルールがないようだ。事前に命題を伝える人もいれば、当日直前に伝える人だつている。白さんは後者で、祭さんは前者だつたわけだ。というか、始まりも唐突だつた。車内で一時間ほどお喋りして、そして五分前、

「時間があるようだし、せつかくだからレコード契命題やつてしまいましょうか」

といつことともなさげな一言で始まつたのだ。

何の命題について語るのかもまだ知らされていない。彼女はどうやら本当に思いつき出始めたらしく、事前の準備も一切していなかつたようだ。今、僕の隣の隣でそれが生み出されている。まさか過ぎる展開に、ただただ驚くばかりだ。こういう破天荒な方法は、てっきり光さんか影さんの担当だとばかり思つていたから……

幻は特に驚いた風には見えなかつた。長く暮らしている家族同士、なんとなくこうなることを予想していたのだろうか。そうだつたら、僕にもそれを伝えておいてくれてもよかつただろうに……

「はい、決めました」

と、不意に白さんがそう言つた。本当に不意で、『なんて考えていると……』なんて言う余地もなかつたほどだ。

「それじゃあ聞きましょうか」

ずつと正面を向いていた幻が田をつむつて促した。白さんは一度うなずいて、その小さな口を開く。

「では、今からする話を聞いてください」

白さんは一度目をつむり、それから開いた。そのときにはいつものおどおどした感じは完全に消えていた。凜とした女性がそこにいた。演劇もこの人の特技だつたことを僕は思い出す。

「敵対している一国の王子、王女が互いに恋をしてしまいました」

白さんはある物語、僕も前に一度読んだことのある物語を語りだした。

「二人が出会ったのは一国が一度和睦をしようとしたとき。王子の国側が王女の国へ赴いたときでした。好奇心の強かった王子が庶民に変装して街を歩いていたときに、同じく変装してお忍びで街へ遊びに来ていた王女に会いました」

確かに、古い国の物語だったと思う。この話を読んだのは一度だけだけど、読み終わった後に何か心に置いていかれたことを覚えている。言葉にはできない、でも確かに何かが心に残つたことを覚えていれる。

「田が合つた瞬間、二人は恋に落ちました。庶民の格好をした王子が手を差し出し、同じく庶民の格好をした王女が手をとりました。そして、二人は街を歩きました」

あの時心に残つた何か、それが今また動き出している気がする。

白さんの語り方が物語に臨場感を生み出している。

「お互いに一言も話さずに、一人はただ街を歩きました。ただ互いの手の温度を感じて、隣にいる相手の心を感じて」

車は相変わらず無音で走つていて。僕の想像を、物語の情景を思い浮かべるのを邪魔するものは何もない。

「日が暮れて、二人は帰らなければならぬ時間になりました。二人とも気軽に街を歩いていい身分ではないので、召使が自分が外出していることに気づく前に帰らなくてはなりませんでした」

早すぎる別れ。確かに、ここでようやく一人が……

「別れ際に王子が恋に落ちた女の子に名前を尋ねました」

ここは特に覚えている。物語で一番有名なシーンかも知れない。

僕の心は、この物語の世界に溶け込んだ。

「王女は、本当の名を語りました。庶民にまぎれているのだから偽名を使ってもよかつたのに、またそのほうがよかつただろうに、その本当の名を語りました」

王家の名は特別で、誰が聞いてもその身分がわかるようになつて

いた。ましてや、敵国の王女、王子がその名を知らないはずはなかった。

「王子は無言で王女の瞳を見つめました。そして、自分もまたその名を口にしました」

王女もまた、王子の名は知っていた。しかし互いは決して結ばれることのない間柄であることを悟った。

「一人は黙つて抱き合いました。道端で抱き合つ一人を邪魔するものも、目を向けるものすらいません」

王子はいろんな思いを持つたまま、ただ彼女の温かさを感じた。そして、言った。

「『あと十年、僕たちが一十七歳になる』」、そのころまでに僕らの国の争いをなくそう。そして、そのときもしもまだ君が僕のことを見えていて、もしも僕の告白を受け取つてくれるなら、そのときに結婚してほしい』王子は王女を抱いたままそう言いました

互いにまだ十七歳、国と国の争いを消すことがどれくらい大変か、本当にわかつていなかつたかもしれない。それでも、本気でそう思い、本気でそう約束した。

「『互いの国が仲良くなり、そのときにもしもあなたが私のことを覚えてくれていて、もしもまた私を抱きしめてくれるのなら、私はその告白を喜んでお受けします』王女は王子に抱かれたままそう言つた

「二人は心から添う約束した。だけど……」

「その後、二人は互いに国をよい方向に導こうとがんばりました。国を説得して、この争いが終わるようにがんばりました。だけど、二人の約束から三年が過ぎた夏の夜……」

王子はある貴族を説得しに出かけた帰りに、後ろから……

「王女側の国の王子、王女の兄は、彼女が敵国の時期国王とした約束を知りました。彼は妹が敵国にだまされていると思い込み、妹は何も言わずに、当時一国間ではもつとも卑劣な手段といわれていたものを実行しました」

王子は道端に倒れ、そしてそのまま……

「王女の兄は、弓矢部隊の中で一番腕の立つ青年を連れて闇夜にまぎれて王子の国へ侵入し、そして…… 王子を暗殺しました」

王子は夜が明けるとともにその魂もどこかへ旅立つてしまつた。ここではないどこかへと、一人で……

「その話はすぐに二国間に広がつていき、当然王女もそのことを知りました。王女はただただ泣き続けました。部屋から一歩も出ず、悲しみにくれるばかりでした。そして……」

王女は兄が王子を殺したことを悟つたけど、兄に何も言つことはできなかつた。王女は心の中にあつた何か大きなものが消え去つたことを感じて……

「王女は悲しんで悲しんで…… それでも死は選びませんでした。王子との約束、一国間の争いをなくすことだけは果たそうと思つたのです」

王子を追つて自分も死ぬ、といつことをしなかつたことに一種の驚きを感じたことを覚えている。王女は生きて戦うことを選んだ。

「それから四年が過ぎ、王女の父は病で死にました。そして王女は家臣の推薦で國の主になりました。兄ではなく妹が次の王になりました」

國の実験を握り、王女は國の代表として相手国と話し合つことができるようになつた。

「相手国も王が代わり、彼女の恋した王子の弟が次の王となりました。二人は話し合いで戦争を終わらせる」と目指し、三年の月日がたつたとき、それは現実になりました

戦争で互いの国力も疲弊してい、どちらの国も、王の言葉に逆らつてまで戦いを続けるものはいなかつた。

「ちょうど王子と王女が約束をしてから十年たつたとき、戦争はついになくなりました。そしてその夜、王女もまた、どこかへ消えてしまいました」

亡き王子のところへ旅だつたのか、どこか知らない國へ旅立つた

のかはわからないが、白女はここではないどこかへ向かつた。一人で……

「という話ですが、知つてましたか？」

僕が物語の余韻に浸つてゐる間に、白さんはいつもの白さんに戻つていた。彼女ほど演技が上手な場合は、いや、彼女に限らず、『いつもの彼女』、『本当のその人』なんてのはただのこちらの思い込みなのかもしれないけど、白さんは先ほどまでの凛とした感じから、微笑がかわいらしい少女になつていた。それを戻るというのか、変わると云ふのかはわからないけど。

「ええ」

僕が返事する前に幻が先にそう言つた。そんなに有名な話でもなかつた気がするけど、やっぱり幻も知つていたか。

僕はうなずくことで白さんに応えた。でも、この話がどうしたのだろう。ただの余興とかなのだろうか。

幻も同じことを考へてゐるらしく、白さんをいぶかしげに見ている。

「二人ともこの物語を知つていましたか。なら少しやりやすいかもしませんね。特にこの話を読んだことがなくとも大丈夫といえば大丈夫なのですが、それでも手助けにはなると思います」

よくわからないままに話が進んでいく。僕らはまだ今回の命題すら聞いていないのだから理解できるはずもない。早く情報がほしい。「それで、白姉さん。その話がどうしたのですか？」

車の中は相変わらず静かだ。松らしき木々はずつと途切れることなく左右に並んでいる。

「今日はいつもとは少し違つた風にしてみましようか

「違つた風？」

僕は続きを促すように、そう尋ねた。白さんは一度うなずいて、

「今日は何かについて、あなたの意見を聞いて私がそれに納得できるかどうか、ということのとは違つた形式でやってみましょう

前提はない。間淵家の一人ひとりが自分の好きなように契命題を行つことになつてゐる。確かにそうだけど、このあまりに型を崩す白さんのやり方に驚きを隠せない。型なんて確かにないんだけど、それでも、今まで経験してきたものは、いずれも決まつたプロセスがあつた。細かいところは違つても、大きく見れば同系統といえるものだつた。

でも、今回はどうやら違うではないらしい。白さん独特の、今回限りの特別なプロセスによる契命題が始まららしい。

「それでは、発表します。今日の命題は、この物語の解釈にします」
静かな車内と高い木々。ただ白さんの言葉がよく聞こえた。

一、白契命題（前編）（後書き）

光「前編、なんて初めてじゃねえか？」

影「どうだつたつくな。よく覚えていないな。それにしても、相変わらず白は奇抜だねえ」

凧「そうねえ。春君、きっと驚いてるでしょうね。白ちゃんは我が家で一番の変わり者だけど、見た目は一番の真人間だからねえ」

白「い、誤解を招くことを、言わないで！ ぐださい……」

次回、後編です。最後まで読んでいただきありがとうございました。あ、作中作のあれば、もしかしたら短編として書くかもしれません。それでは^ ^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3596v/>

命題と恋愛

2012年1月8日18時45分発行